

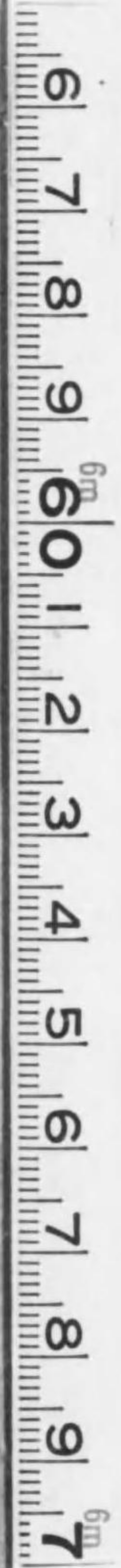
特252

880

良書百選

第九輯

社団法人 日本圖書館協會編



始



目次

第一 哲學・宗教

- 國民と教養
- 思想の運命
- 現代の問題としての復古思想
- 國學の本義
- 儒教の精神
- 印度古代精神
- ソクラテスの對話法
- 觸覺の世界像の成立—ニイチエ—
- 皇民の書
- 有限超越としての宗教
- 回教徒
- 日本佛教論
- 聖徳太子と法隆寺の諸相

- 木村素衛 一
- 林 達夫 二
- 竹岡勝也 三
- 山田孝雄 三
- 武内義雄 四
- 金倉圓照 六
- 稻富榮次郎 六
- 土井虎賀壽 六
- 武藤貞一 七
- 二名五良 七
- 笠間景雄 八
- 圭室諦成 九
- 井上善右衛門 九

- 國文學と佛教
- 道元禪師の生涯と信仰
- 正法眼藏の哲學私観

- 福井久藏 二
- 中根環堂 二
- 田邊 元 三

第二 歴史・傳記・地誌・紀行

- 歴史哲學と政治哲學
- 先人を語る
- 大原幽學
- 郡司大尉
- 大帝康熙
- 澁澤榮一傳
- 朝陽門外
- わが思想と生活より
- 全野口英世傳

- 高坂正顯 三
- 本多熊太郎 四
- 高倉テル 四
- 廣瀬彦太 五
- 長與善郎 六
- 幸田露伴 六
- 清水安三 七
- シニウアイツエル著
竹山道雄譯 八
- グスタフ・エックシュタイン著
栗原古城共譯 八
- 小田 律 共譯 八

野口英世	小泉 丹九
其國其俗記	木下圭太郎 三〇
日本風景誌	藤水鐵五郎 三〇
維新の史蹟	大阪毎日新聞社京都支局編 二
峠	深田 久彌編 三
洋車	須田 皖次 三
支那の土地と人	クレツシイ著 三
支那風土記	三好 武二譯 三
大陸支那の現實	米内山庸夫 三
ソ聯報告	藤田 元春 三
中南米の旅	布施 勝治 三
北極旅行	丸山 鶴吉 三
孤獨	ガオドビヤノフ著 三
	米川 正夫譯 三
	大江 專一譯 三
	高田 保馬 三
	松村 秀逸 三

外交回想斷片	石井菊次郎 元
大陸國策を現地に視る	朝日新聞社編 三〇
興亞の先驅	伊禮 肇 三〇
現代華僑問題	丘 漢平著 三
急々如律令錄	山崎 清三譯 三
經濟統制と人事調停	牧野 英一 三
人事調停法概説	末川 博 三
人事調停法講話	片山 哲 三
論説・史新日本經濟説話	佐野 福藏 三
話・隨筆	原 祐三 三
經濟上よ支那事變の本質	木村増太郎 三
り見たる	金原賢之助 三
日本戰時經濟政策	佐藤 弘 三
經濟プロックと大陸	深井 英五 三
人物と思想	鈴木 憲久 三
革新經濟講話	波多野 鼎 三
統制經濟講話	石渡 莊太郎 三
興亞經濟の前途	

第三 政治・法律・經濟・社會・教育・兵事

戰時財政講話	井藤 半彌 元
文化類型學	高山 岩男 三〇
町人	坂田 吉雄 三〇
支那人	東京日日新聞社編 三〇
日本食糧經濟論	大阪毎日新聞社編 三〇
貧苦の人々を護りて	水野 武夫 三〇
方面委員は語る	山田 節男 三〇
歌ふ子供たち	高島 巖 三〇
新知育論	長田 新 三〇
學生に與ふる書	天野 貞祐 三〇
日本美育論	金原 省吾 三〇
綴方の世界	百田 宗治 三〇
教育者としての母	兒玉 九十九 三〇
若き母に贈る	伊福部 敬子 三〇
工場生活と少年の教育	大塚 好 三〇
少年を工場に仕上げる心構へ	朝日新聞社編 三〇
滿蒙開拓青少年義勇軍	朝比奈策太郎 三〇
若きドイツ	

第四 自然科學・醫學

木綿以前の事	柳田 國男 三〇
英國の極新嘉坡根據地	池崎 忠孝 三〇
東作戦	内務省計畫局編 三〇
國民防空讀本	野間 恒 三〇
劍道讀本	本間 順治 三〇
日本刀	
行としての科學	橋田 邦彦 三〇
科學への道	石本 巳四雄 三〇
單色燈	辻 二郎 三〇
杉田玄白の蘭學事始	板澤 武雄 三〇
趣味の世界數學史物語	鏡 潤 三〇
物質と光(上下)	ドウ・プロイ著 三〇
天文と宇宙	河野 與一譯 三〇
海	荒木 俊馬 三〇
雷	宇田 道隆 三〇
人間	中谷 宇吉郎 三〇
	櫻澤 如一譯 三〇

結核は必ず癒る

第五 工學・産業

- 新技術者精神
- 轉業指導講座
- トンネルの話
- 日本美の再發見
——建築學的考察——
- 機械工業講話
- 工作機械（改訂版）
- 朝日航空講座（上・下）
- 化學工業講話
- 新生活の設計
- 家計の數學
- 石川翁農道要典
- 農村共同炊事の手引
- 時局農村の副業と工業
- 會計通論

厚生省保險院編 三

- 宮本武之輔 三
- 東京商工會議所編 三
- アトキンス・ラッパ著
平山復二郎譯 三
- ブルノ・モウ著
藤田英雄譯 三
- 東京商工會議所編 三
- 十川純夫 三
- 東京朝日新聞社編 三
- 東京商工會議所編 三
- 高良富子 三
- 小倉金之助 三
- 石川翁農具要典
編纂部編 三
- 増田正直 三
- 農林省副業課編 三
- 野口亮三 三

第六 美術・諸藝

- 無の藝術
- 芝居入門
- 古代劇文學
- 世阿彌元清
- 千利久

第七 語學・文學・隨筆

- 國語國文學年鑑 第一輯
- 精神美としての日本文學
- 日本的性格の文學
- 日本文學の思潮
- 日本文學論——神話篇——
- 近代日本の作家と作品
- 現代の文學
- 文學
- 大和魂と萬葉歌人
- 女身萬葉

四

- 山口諭助 三
- 小山内薫著
北村喜八補 三
- 能勢朝次 三
- 野上豊一郎 三
- 竹内尉 三
- 久松潜一編 七
- 齋藤清衛 七
- 齋藤清衛 七
- 久松潜一 七
- 志田延義 九
- 片岡良一 九
- 伊藤整 〇
- 小林秀雄 〇
- 吉澤義則 〇
- 武田祐吉 三

幕末愛國歌

- 現代短歌
- 聖戰歌集
- 大陸巡遊吟
- 石狩川
- 吳淞クリーク
- 大日向村
- 金山
- 建設戰記
- 小島の春
- 滬杭日記
- 咲きだす少年群
- 從軍五十日
- 先遣隊
- 戰取
將士陣中だより
- 西住戰車長傳
- 花と兵隊
- 病院船

川田順三

- 石山徹郎 三
- 讀賣新聞社編 三
- 吉植庄亮 三
- 本庄陸男 三
- 日比野士朗 三
- 和田傳 三
- 大鹿卓三 三
- 上田廣 三
- 小川正子 三
- 中谷孝雄 三
- 石森延男 三
- 岸田國士 三
- 徳永直 三
- 東京日日新聞社學藝部編 三
- 菊池寛 三
- 火野葦平 三
- 大嶽康子 三

不惜身命（改訂版）

- 北岸部隊
- 街
- 滿洲人の少女
- 宮澤賢治名作選
- 考へる葦
- 結婚・友情・幸福
- 昆虫言葉・國民性
- 戦友に戀ふ
- 竹頭
- 父の日記など
- 東洋の愛
- 土に祈る
- 土の饗宴
- 日本文化の方法
- 番傘・風呂敷・書物
- 随分に應じて
- わが人生と宗教

山本有三 三

- 林美美子 三
- 阿部知二 三
- 小泉菊枝 三
- 松田甚次郎編 三
- 横光利一 七
- アンドレ・モロア著
河盛好譯 九
- 市河三喜 九
- 火野葦平 九
- 幸田露伴 〇
- 濫澤秀雄 〇
- 龜井勝一郎 〇
- 相馬御風 〇
- 飯田蛇笏 〇
- 芳賀檀 〇
- 幸田成友 〇
- 八波則吉 〇
- 吉田紘二郎 〇

五

良書百選 第九輯

第一 哲學・宗教

木村 素衛 著

國民と教養

日本國民は現在世界史的な國民的な課題に直面して居る。そしてその課題は、その遂行の必然的條件としてそれを可能ならしめる國民的教養を豫想して居る。課題が世界史的であり、而もそれが國民全體の努力にまたねばならぬ時、國民的教養がそれに相應しないならば、課題の遂行は失敗に終らねばならない。そこに「國民と教養」の問題が現在の我國の歴史的課題として改めて吟味され、新しく考へなほされねばならぬ所以である。著者はこの意圖の下に、一人の眞摯な思索者、ゴットリーブ・フイヒテを引出して、彼が如何にこの問

題を考へて行つたかの發展の跡を、即ち、前後三回にわたる「學者の使命」に關する論文と「ドイツ國民に告ぐ」などの思想的發展の跡を辿る事によつて、問題の内容を展して居つたのである。

結論として、世界文化の構造に於ては國民文化が單純的有としてでなく、國民的有として媒介契約を形造り、之に對して、無的媒介者としての世界文化的普遍が、之を否定的に媒介する事によつて、それぞれの國民文化を恰も眞實にかゝるものとして成立せしめる原理として具體的な眞實性を現はしてゐる。従つて國民文化と世界文化とは辨證法的相即に於て成立する。かくの如くして著者は國民文化即世界文化を論理的に把握したのである。従つて本書では國民文化一般と世界

文化との一致をとくのみで、そこからは特に日本國民のもつ使命は出て来ない。之は今後の著者の勞作に残された課題であらう。

現代日本の知識階級に屬する人々に一讀を薦めたい。

(昭和一四、七 神田區駿河臺四ノ四 弘文堂 三五判 二〇二頁・五〇)

林 達夫 著

思想の運命

著者は謂ゆる評論風のものめつたに書かない。著者はジャーナリズムの人ではないのである。著者は學者なのであらう。しかし謂ゆる學者風の人ともタイプを異にしてゐる。著者は氣質としてジャーナリズムのやうな場所を好まないのであらうが、實はジャーナリズムには著者のやうな人を最も必要とするのではあるまいか、著者のやうに確かな基礎の上で確かな物言ひをする人はわが國の評論壇で最も必要なのだ。ジャーナリズムとはその時その場限りの思ひ付を論じてをればいふといふやうなものではあるまい。ジャーナリズムは、まさに輿論の舞臺であつて、確實な基礎をもつて確實な物言ひをする人が多ければ多い程健全なのである。著者のやうな

二

人は恐らく指導的物言ひをする人ではあるまいが、判断の據り所をはつきりと示してくれる。その意味でジャーナリズムに必須の人であると思はれる。本書に收められてゐる長短幾多の評論文はそのやうな著者が稀に書いた——恐らく多くは見ると見兼ねて——ものであり、それぞれ右にいつたやうな性格も役割ももつてゐるものである。

著者は西洋の學問をした、といふと今日誤解のおそれもあらうが、謂ゆる科學的精神を身に帯びた典型的な文化科學者の一人であらう。著者の立場なり、書振りなりは、謂ゆる批判的といふべきものである。著者の學風は何といつても近代的といふべきものであらう。近代の社會科學勃興以後のものであるといふ感觸を與へるのである。

『思想の運命』といふ標題は同名の一論文が中にある。この名は今日いろいろな意味で象徴的な響をもつてゐるやうである。著者もこの書に收められてゐるものはすべて「思想の運命」を背負ふものと心があつたのであらうか。著者はあくまで歴史家なのであらうか。

(昭和一四、七 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店 四六判 四七四頁 二・二〇)

竹岡 勝也 著

現代の問題 復古思想 (教學新書 三)

本書は興亞教育研究会編の教學新書の一編として刊行されたもので、文部省教學局主催に係る講習會の講演記録である。著者は九州帝大の教授であり、日本文化史研究者として著名である。

近來日本精神の擡頭につれ、日本的なものゝ探究、日本歴史への反省益々その度を高めつつあるのであるが、そこに見出される復古の氣運復古の思想は果して今日の如き世界的舞臺に立つ日本にとつて如何なる意義をもつものであらうか。國學は漢學への對立として現はれた。今日の復古的思想は、たゞ單に西洋的文化への對立としてのみ意義をもつものであらうか。今日の風潮に排外的なる傾向はないか。それらのことは各方面より批判せられ、日本精神の進むべき道はあらゆる方面から説かれてゐることではあるが、未だ十分に闡明せられ、汎く把握せられてゐるといふ譯には行かない。本書は著者の精緻丹念な學識と經驗とに裏づけられて、實に平明に説き與へられた一つの解答書である。著者は西洋と日本との

根本的差異を認めんとする。それにも拘らず東西文化の融合を日本の理想して掲げること同意せんとする。而もそれが日本の如何なる樞軸により、如何やうに可能なのであるかを見極めんとすることに力を注ぎ、そこにわが國體と復古思想の生きた意義を見出さんとしてゐるのである。一般に一讀を奨める。

(昭和一四、一〇 神田區駿河臺三ノ一 目黒書店 新四六判 一〇八頁・四〇)

山田 孝雄 著

國學の本義

山田博士が國學の本義を説くことは、誠に打つてつけである。國學とは徳川時代に興つた特種の學問であつて、全く歴史的な意義のものであり、明治以後西洋科學の傳來以來の日本の學問界には今はないものである。或は無意味のものであるといふ謂ゆる歴史學派の説に對して、博士は眞向から反對の立場にあるのである。國學は何であつたか、又何であるか或はあるべきかの問題を徹底的に究明し、普く説き明かさうとしてゐるのである。本書に收つてゐる大半の文章はそのためのものであつて、一般人に國學の本義を説き聞かさうとし

三

たものである。それ故一見専門的な、難解な著述らしく思はれるかも知れないが、決してさうではなく、むしろ大衆的なものである。

博士によれば、わが皇國は古來萬國に冠絶する獨特な國體なるが故に、皇國の學としての特異なる學、國學が存するのである。これはわが國體の存する限り永遠に存する學問であるといはれるのである。博士の所説は謂ゆるヨーロッパ流の科學の概念を以ては率し得ないものであらうし、國學とはしかくあつたであらうし、又しかくあるべきものであらう。今日時局極めて重大なる秋、本書に就て國學の眞義を究めることは決して閑事ではない。そのために最も一般的な、而して最も熱烈な國學の信徒たる山田博士の本書の如きはまづ眞先に取りあげらるべきものであらう。

(昭和一四、六 神田區神保町二ノ六 國學研究會出版部 菊判 二一六頁 二・三〇)

武内 義雄 著

儒教の精神

儒教は支那に起つた教であるが、はやくから日本に傳はつて、我が國民精神の昂換に貢献するところが少なくない。然

し日本と支那とは國情も違ひ、歴史も異なるので日本の儒教が支那のそれと全然同じであつたとはいはれない。従つて兩者の間には無論共通點も多いが特異點も少くはない。

本書は「儒教以前」「儒教の創始」「儒教の紹述」「秦代の儒教」「漢代の儒教」「儒教の經典とその解釋」「新しい儒學」「朱子學と陽明學との長短」に於て支那の儒教及儒學思想の發達を敘述し、次に「儒教の實踐道德」に於て五倫を述べ、孔子の教は理論的には仁道であるが、實際的には孝道中心の道德であることを説いて居る。

次に「日本の儒教」を六項に分つて其の變遷並に各儒者の特色を簡潔に要約して居る。

「はしがき」にも述べて居るやうに日本の儒教は著者の専門ではない。又經書の成立年代、朱子學、陽明學と佛敎との關係等については學界に於て多少の異論がないではないが、この小冊の中に支那、日本の儒學變遷の一般を要領よく取纏められたことは大いに多しなればならぬ。

儒學に就いての入門書として知識階級に推したい。

(昭和一四、一、二七 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店 三六判 二一四頁 五〇)

金倉 圓照 著

印度古代精神史

著者は其の序の冒頭に、

「印度精神の歴史的展開をわかり易く敘述してみようといふのが、本書を起稿した動機の一つである。現在わが邦で印度の哲學や宗教に關する著述は、その數において、必ずしも乏しとしない。そして中には、學術上きはめて優れた研究もある。此の種の著作は、専門家に缺くことのできない参考書となつてゐるが、一般の讀者にはわかり易いと云へない。又通俗を目的とした出版は杜撰で信用のおけないものが多い。そこで學術的にも信頼され、理解にも困難の少い敘述を試みたいといふのが私の年來の希望であつた」と述べて居る。

以つて其の意圖を窺ふに足るであらう。かゝる意圖の下に、緒論に於て東西に於ける「印度精神の受容と觀點」を述べ、我國に於ては印度思想に關する限り佛敎思想に局限されたに反し、西洋に於ては好奇的研究より實用的研究へ、再轉して學問自體として印度文化全般に互つての研究に進んで來た次第を略述し、西洋に於ける印度學の現狀を紹介して居る。

本論は「精神史の黎明」「全一への階梯」「梵我一如」「ウパニシヤドの哲人」「輪廻と業」「文化の東漸と新宗教の興起」「思想界の情勢」「主要なる思想家(六師外道)」「邪命外道」「チャイナ」「佛敎」の諸章に分ち種々なる思想體系の前後の關聯に重きをおき、全精神史におけるそれ々の意味を明らかにしようとして居る。然も印度哲學各派に關する最近までの研究の成果を取り入れて極めて要領よく記述されてある。

西洋哲學殊に希臘精神の研究については若い學徒にも相當の關心が拂はれてゐるが、印度哲學等については一般に無關心であるかのやうである。これには相當の理由も存するであらうがこれに關する適當の概論書のないこともその重要なる理由でなければならぬ。かゝる際に學問的良心を以て書かれた本書の出現を見たことは讀書界の幸慶と言はなければならぬ。これによつて我國人に最も關係の深い佛敎が印度思想上如何なる位置を占め且つ如何なる特色を有するかも理解され得る所少くないと信ずる。本書はその内容及性質上高等教育をうけた人々に推したい。因みに著者は東北帝國大學教授である。

(昭和一四、一、二六 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店 菊判 四六六頁 三・六〇)

稻富榮次郎 著

ソクラテスの對話法

本書は實踐の人、典型的教育者としてのソクラテスを、彼の對話法を理解せしめることによつて明かにしようと試みたものである。著者によれば、ソクラテスは謂ゆる概念哲學の創始者ではなく、實に史上稀なる教育的人格の典型である。彼はアテナイの街頭における貧しき一市民ではなくて、實に人類に對する共通の文化的先達であり、今日尙教育及教育の本質に關し永遠の眞理を汲み取ることの出来る世界史的存在である。

著者は多年の間プラトン哲學を研究し、本書もプラトン初期の對話篇を基としてソクラテスを描き出し、彼の教育的實踐を彼の對話法——人間の魂をして自ら眞理を分曉せしめる爲の産婆法——を十分に理解せしめることによつて明かならしめようとしてゐる。本書によつて我々は、ソクラテスの無知の自覺とはいかなるものであるか、ソクラテスの皮肉はいかなる働きをもつものであるか、彼の産婆法はいかなる本質を有するものであるか、これらのことを、この比較的小著の本書によつて、よく纏つて明瞭に理解することが出来る。著

者によつて我々はソクラテスは眞に實踐の人、教育者であり體系的哲學の建設者として、眞に實踐的に哲學せるものとして、我々の永遠に尊敬すべき人格であることを知ることが出来るのである。

(昭和一四、三、三〇 神田區一ツ橋二ノ五 賢文館 四六判 二三三頁 二・〇〇)

士井虎賀壽 著

觸覺の世界像の成立

——ニイチエ——

本書は「ニイチエ」と副題されてゐるやうにニイチエ的世界觀の探究である。本書に收められたすべてがニイチエ論もしくはニイチエに關するエッセイではなくて、ニイチエ的に思索し探究しようとした論文、隨筆集である。論文も謂ゆる哲學論文風のものではなくて、課ゆるエッセイ風といつたものである。題名は巻頭の一論題であり、「ニイチエに於ける假面と眞實」と共に本書中の力篇である。著者は眞剣にニイチエに肉薄しようとしてゐる。本書に現はれてゐるニイチエは、血肉の生々しいニイチエである。このやうなニイチエは従來のわが國には見られなかつたものであらう。新しい眞摯

なニイチエ論としてお奨めしたい。

(昭和一四、三、二二 日本橋區通三ノ一 河出書房 四六判 一・八〇)

武藤貞一 著

皇民の書

日本は今未曾有の大事變に遭遇してゐる。然し四邊環海の我國は、未だ一度も外敵を國土内に邀へて國民が戦を目のあたりに經驗したと云ふ事がない。その爲か兎角銃後國民に緊張の精神を缺く嫌ひなしとはいへない。歐洲諸國では一年戦へば日常物資の窮乏著しく、國民の生活は強制的に戦時化される。之に比較すれば食糧資源に豊かな我國は、二年戦つた今日、我等の食糧は戦前と變りがない。之は喜ぶべきことではあるが又警戒を要すべしである。本書に於て著者はこの點を取り上げ、極力國民の自制を喚起し、長期戦克服への精神高揚を唱へてゐる。氏一流のジャーナリストイックな筆になるものである。

(昭和一四、五、五 芝區田村町五ノ七 東海出版社 四六判 一八七頁 一・八〇)

永田秀次郎 著

國民の書

この著者の名は大人にも子供にも男子にも婦人にもよく知れわたつて居る。一つにはラヂオに、演壇に、或は新聞雜誌の紙上に所謂お馴染みであるせいもあるが、一つには著者の持つ人格的魅力である。そしてその話さるゝ言葉の中にも書かるゝ文章の中にも、いつもある一貫したものを有つて居られる。

この本も前に出版された幾つかの著書と同じ様に放送やら講演講話やらを集めたもので、婦人向きのもので、兒童への話、青年への講話等種々の範圍のものが收められてゐるが、その内容は何れも健全なる國民を作るものであり、その書き方は俳人青嵐の面目躍如たるものがある。最も健全なる國民の書と云ふことが出来る。

(昭和一四、三、一 京都市河原町二條下ル 人文書院 四六判 二五七頁 一・〇〇)

二名 五良 著

有限超越としての宗教

書名は少しく生硬に響くが内容は、「宗教への道」とでも言ふべきものである。然し、その取扱方は平板的な「宗教への道」ではなくて、反宗教的な一群の人々を想定し、これ等の人々に對し理論的に宗教の必要なる所以を認識せしめやうといふ熱意が隨所にあふれて居る。

著者は先づ「現代の反宗教的性格」の史的變遷の敘述から其の論歩を進める。次に「人間身體の有限」の章に於て人は永遠を求め不死をはかるが結局死の恐怖にさらされたものであることを述べる。次に「人間精神の有限」の章に於ては、「學問活動」「道徳活動」「藝術活動」の有限を論じ、第四章に於ては、宗教は身體、精神の兩面に互る有限な一切のものを絶對否定し、無限者に活かされることによつて、あらためてこれを絶對肯定するものであるといふ著者の所謂「有限超越としての宗教」を提示する。かくして宗教は人類にとつて不可欠のものとなるのである。

最後に著者は「宗教反駁者への應答」の一章を設け、コント、フオイエルバツハ、ニイチエ、レーニンの宗教觀を紹介し、其の否定論が各々その一面觀に過ぎないことを論評し、更めて「有限超越としての宗教」の必要を高唱し、今後の宗教の具備すべき條件を列擧して居る。所論極めて明快、宗教の何物なるかを知的に把握せんとす

る知識階級的好讀物と信する。

(昭和四、一〇、二五 麹町區内幸町二ノ一二)
(理想社出版部 四六判 二二二頁 一・三〇)

笠間 呆雄 著

回 教 徒

事變以來俄に我が國民の關心を喚ぶようになつた回教徒について通俗平易に解説したものである。内容は四つに大別してあるが、最初の回教總説と云ふ所には回教徒の教祖であるマホメットの生涯、その教義、回教諸國の興亡史等が收められ、次の回教徒の生活と云ふ項では戒律の厳しい彼等の社會生活及宗教生活が扱はれ、次の回教徒及び回教民族の現狀では所謂回教國と稱せらるゝ地方、日本、滿洲、支那、蘭印、フィリッピン、印度等に在住する回教民族の現狀が示されてゐる。最後の回教徒の人物と云ふ章では五人の人物が擧げられてゐるが、ケマルアタチュルク、馬仲英等の我々の耳にも聞き馴れた現代の驍將も含まれてゐる。

(昭和四、四、二 五神田區一ツ橋二ノ三)
(岩波書店 特小判 二〇四頁 〇・五〇)

圭室 誦成 著 日 本 佛 教 論

(日本歴史全書 第十六)

本書の目的は宗教改革の名を以て呼ばるゝ鎌倉時代の佛教を通じて日本佛教の性格を究明せんとするにある。蓋し鎌倉時代に於て純粹の日本佛教は創せられ且つ現在まで存續して居るからである。

本書の特色は次の諸點に存する。一、從來教理史的、教會史的の何れにか偏して居た宗教改革の研究を其の兩者を綜合統一する立場に於て取扱つて居る。二、禪宗は從來宗教改革の埒外に放置されて居た。これに對して著者は禪宗の刺戟によつてはじめて宗教改革は進行し、日本佛教は創造されたと見る。この禪宗史觀は本書の中核をなすものである。三、日本天台を鎌倉時代にまで引下げた。しかもこれは禪宗の影響による天台學の新時代的再組織であること、又淨土、眞宗、日蓮宗が組織の原理をこゝに得て居ることを實證して居る。四、修驗道の創始は奈良時代とされて居るが、それは單なる説話に過ぎず、寧ろ鎌倉時代に於ける密教民衆化の線上に生れ出たものであることを述べて居る。

従つて本書の内容は極めて獨創的であるが、同時に又種々の異論も豫想される。又禪宗の刺戟をこの宗教改革の殆んど唯一の要素として居るに關はらず、これに關する敘述はあまりに稀薄であり、曹洞禪については道元禪師の北越隱棲を述ぶるのみで殆んど觸れる處がない。

右様の難點はあるが、透徹した史觀により、鎌倉時代の佛教を相關的な一つの活ける宗教運動として把握することが出来ることは著者の功績といひ得る。日本文化史に關心を有する人々に一讀を勧奨したい。

(昭和四、二、一五 神田區西神田二ノ二一)
(三笠書房 菊半裁判 二二六頁 〇・九〇)

井上善右衛門 著

聖德太子と法隆寺の諸相

聖德太子の聖德宏業、法隆寺の研究については幾多の成果が發表せられて居る。しかし一般人の聖德太子觀は「太子は蘇我氏に與して佛教を興隆し給ふた」とか、「法隆寺は世界最古の木造建築物である、聖德太子は厚く佛教を信奉して三寶を興隆し、此の伽藍を建立し給ふた」といふ如き皮相なる教科書風の説明によつて養はれて居るやうである。著者はこ

の事を頗る遺憾として居る。

著者は従來の聖德太子並に法隆寺研究が歴史的若くは藝術的に極めて綿密に行はれて居ることは之を認めて居る。然しこれ等の研究が形の上の研究、資料の考證のみに立脚して歴史的結論に到達せんとする弊あるを慨し、聖德太子の信奉し給へる大乘佛教の眞精神に照らし考究することの必要を説き主としてこの觀點から太子を見、法隆寺を觀察せんとして居る。

先づ總説に於ては太子が内外多事の際、齡僅かに二十歳にして攝政の大任に就き給ひし悲壯なる御決心を回顧し奉り、太子の佛教受容は決して蘇我氏に與するといふが如き性質にあらざること、四天王寺や法隆寺の建立は支那帝王の佛教外護にならばれたものでないことを反覆説明してゐる。

「三經義疏」「十七憲法」「法隆寺」は太子と密接不離關係を有するものであることは言ふまでもないが、これを太子の大乗史觀の三つの顯はれとして本書の如く相關的に説いたものはあまり其の類例がないであらう。

著者は言ふ「三經義疏」と「十七憲法」とは別物でなく前者は眞諦の生命であり、後者は其の俗諦の展開である、と。かくて著者は義疏についての古本の三つの見解を批判して親撰なること、三經御撰定は太子の内面的統一を背景とせるも

のなること、義疏の特質を論じて太子を日本佛教の祖と仰ぎ奉る所以に論及して居る。

次に「十七憲法」の根本精神は三經義疏によつて示された一乗の精神即ち第一條の「和」にあること、「和」は第二條の篤敬三寶より生ること、和は安易に求めらるゝものでないことを各條の背景と時代との聯關、太子の胸奥に去來する深刻なる人間精神の動亂と對比して極めて有機的に取扱はれてある。我々はかゝる取扱によつてはじめてこの憲法が單なる道德的宗教的の教條ではなくて、古今を通ずる不動の生命であることを教らへられるであらう。

「法隆寺の藝術」は單なる藝術ではない。著者は一切の藝術的解説をそれ／＼の専門家に委ね、専らその生命を把握せんとして居る。

かくて著者は玉虫の厨子に描かれたる「藤垂王子投身餓虎の物語」(金光明經)「雪山童子施身開偈の物語」(涅槃經)に着眼し、これ等を通じてあらはるゝ求道精神の極致を太子並に推古天皇の大御心に於て見奉らんとして居る。その他「釋迦三尊」は太子と妃との御因縁「藥師如來」及び「法隆寺」とは用明天皇の御憐平癒の發願に基づき、天壽國繡帳は太子の往生思想のあらはれと見て居る。

右の如く其の觀察は鋭利深刻であり、又極めて我々を首肯

せしむるものがある。

「太子の佛教攝取は、國土を外面的に榮えさす爲政者の功利からでもなく、また有閑者の物好きからでもない。それは實に攝政の大任に立ち給ふ御身の畢竟依として、佛教をその身に聞き給うたことに始まるのである。」

との言は頗る味ふべきである。聖德太子の眞精神に徹せんとするものゝ一讀すべき好著と信じ敢へて推奨せんとするものである。

因に著者は商業經濟學を専攻し學士、更に京大文學部大學院に學び家業の傍ら太子の研究に餘念のない篤信家である。

(昭和一四、一、五 京都市壬生川通五條下
同朋社 四六判 二一〇頁 一・五〇)

福井 久藏 著

國文學と佛教

(青年佛教叢書 第十六編)

近時國體明徴が叫ばれ日本精神の高調せらるゝことは洵に喜ぶべきであるが、他面久しく國民の精神上の糧となり、その生活を規定して來た儒教や佛教等を外來思想としてこれを排斥せんとする僻見が一部に擡頭しつゝあるかに見えるのは

頗る寒心に堪えないところである。

佛教のみについて見るに、佛教は渡來以來已に一千四百年になんなんとし、爾來幾多の變遷を経、其の間に盛衰はあつたが、よく國民の信仰の對象となり、國民の思想を深め、文學、藝術等に、大なる影響を與へたことは見逃すことが出来ない。

本書はかゝる點に着眼し、奈良朝時代より江戸時代に至る主要なる文學作品にあらはれた佛教思想、佛典の影響を具體的の例を擧げて説明したものである。

讀者はこれによつて佛教が如何に國民思想の血肉となつて居るかを看取することが出來ると共に、佛教の理解なくして眞にこれ等の文學作品を理解し鑑賞することの如何に困難であるかを知ることが出來やう。

(昭和一四、九 神田區神保町一ノ二〇
三省堂 新四六判 二一九頁 一・二〇)

中根 環堂 著

道元禪師の生涯と信仰

(青年佛教叢書 第十五編)

道元禪師は我が國哲學の最高峰に位するものとして最近特に學界の注目するところとなつて居る。田邊元博士は其の「正法眼藏の哲學私観」に於て「七百年前の我國の名僧道元の正法眼藏を読み、その思辨の深さ綿密さに打たれて、日本人の思索能力に對する強き自信を鼓吹せられた」といつてゐるに徴してもこれを立證し得る。

この書は著者が道元禪師について述べた舊著の中から禪師の風格、思想、信仰を窺ふに足るものを手際よく取りまとめたもので、道元禪師の風格「行の宗教」の構成「禪師行の基調」禪師行の規範「行の宗教」の中心問題「打坐の一行三昧」から成つて居る。

内容は従來の道元禪師の研究から一步も出てゐないが、簡潔平明にその生涯、信仰を述べた所に本書の特筆がある。

(昭和一四、九 神田區神保町一ノ一 三省堂 新四六判 二三七頁 一・二〇)

田邊 元 著

正法眼藏の哲學私観

正法眼藏は言ふまでもなく我國曹洞宗の開祖道元禪師の語録である。この眼藏は久しく同宗僧侶の間に於てのみ尊崇されて居たが、大正の中葉より哲學者の注意せられることとなり、最近では岩波文庫版によつて街頭に進出することとなり、殊に最近日本哲學乃至日本精神の昂揚せらるゝに及び、凡そ思索せんとする人々にとつては不可欠のものとして斯界に君臨しつゝある。本書は曩に哲學研究にのせた「永平正法眼藏の哲學」に補訂を加へられたもので、田邊哲學を通じて見たる正法眼藏を知らんとするものゝ一讀すべき好著である。

(昭和一四、五、二五 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店 四六判 一〇四頁 〇・九〇)

第二 歴史・傳記・地誌・紀行

高坂 正顯 著

歴史哲學と政治哲學

現代世界は危機に直面してゐる。そしてこの危機に立つ世界史の舞臺に、日本が今までになく大きな役割を負はされて登場して來たのだ。

今、われわれの戦ひつゝある支那事變も、偶然の出來事や一部の政治家の肆意によつて起つたものでは無論なく、そこには深い世界史的意義の藏せられてゐることを覺らなくてはならない。

著者によれば、近代ヨーロッパの特色は人間中心主義であるが、この近代の人間は機械を發明したことによつて却つて自ら機械の一部となり終り、人間の主體性の否定といふ矛盾に達着しなくてはならなかつた。この如き人間中心主義の自己否定が近代の精神的構造であり、そしてそれが危機と解せらる所以なのである。こゝに歐洲大戰以後を現代とし、近世から區別するならば、現代は近代の人間中心主義の行づまりから、新なる時代に移らんとする過渡期として特色づけられる。

日本も、いふまでもなく、かゝる近代の西洋的機械文明か

らその有つ廢頽性と共にまた多くの惠澤を蒙つた。しかし東洋の實は西洋のそれとはもとと根本的に原理を異にしてゐる。西洋的實はギリシヤの自然、中世の神、近世の人間と、何れも有の原理に立つに對して、東洋にあつては無を原理とするが故にそれはいかなる存在でもないと共に、しかしすべての具體的存在に根據を與ふるものである。かくて現代の世界史的危機にその打解の光明を與へるものがまさにこの東洋的なる無の原理であり、更につきつめればかゝる打解こそ、東洋のわけても日本の世界的使命であるのである。

本書は五つの論文から成つてゐるが、その最初の論文「現代の精神的意義」に於て上述の如き、現代の、つまりは日本の精神的意義を明かにするために、西洋に於けるそれぞれの時代の實在と考へられたものが何であつたかを考へ、それを手引として世界史の哲學を述べることから初めてそこに世界史の倫理を導き出し、一應の未來への洞察を試みんとしてゐる。そして、第二章の「歴史の普遍と世界の動向」で歴史に於ける偶然なるものの合法則性、歴史の偶然的必然性を明かにし、かくて歴史の危機が媒介されたものでありながらしかも何等かの解決を見出され得ることを論證し「われわれはその可能に怯懦であつてはならない」といひ、更に「アジア的世界は今我國を通じて近世史の中に再生しつゝあるのだ

ある。しかしそれだけに日本的なるものは、同時に近代であり、また世界的でなければならぬ。日本精神を單に懐古的復古的とのみ考へるのは、却つて日本の使命に忠實ではないのである」と叫んでゐる。第三章は「政治の悲劇」第四章は「ヒューマニズムと世界人」で、以上述べた如き新時代、新なる世界序は新なる世界人（古き意味のコスモポリタンでない）を要求する所以を説き、最後の「歴史哲學と政治哲學」でプラトンの神話の解釋を手懸りとしながら、歴史哲學と政治哲學との深い連關を解明し、もし哲學が人間の根源的なる理解を與ふべきであるならば、歴史と社會の哲學として、哲學とは即ち歴史哲學であり、政治哲學である。それは哲學の一部であるよりは、むしろ哲學の本流をなすべきだといつてゐる。

今日、國を擧げて所謂非常時局の前に緊張してゐる時、もし、哲學が従來の講壇に於て説かれた如く抽象的形式的論理の問題をのみこととするのならば、それはもはや無力以外の何ものでもないであつて、現代人の關心から棄てられなくてはならない。しかし本書の如く歴史的、社會的存在に關する探究を使命とする哲學こそは今日の危機打解のために何にもまして必要なものとして、現代の青年達に薦められて然るべきであらう。

（昭和一四、三、二五 神田區駿河臺四ノ四 弘文堂書店 三五八頁 一五八頁 〇・五〇）

本多熊太郎 著

先人を語る

著者が多年の外交官生活中親しく接した明治、大正時代の政界の巨人をスケッチしたもので、山縣、伊藤、松方、桂、山本、寺内、明石、後藤、原、小村の諸氏が語られて居る。就中著者の久しく隨從した小村侯の思出は三分の一を占め、ポーツマス條約に於ける「東清鐵道」の處分問題、小村男と袁世凱との「滿洲撤兵」の折衝に議事録拔萃を掲げ、この偉大なる外交家の功績をたゞへて居る。行文平易、興味津津たるものがある。

（昭和一四、五、一九 京橋區京橋三ノ一 千倉書房 四六六頁 二七五頁 一・六〇）

高倉 テル 著

大原 幽 學

大原幽學といふ名は、一般の人にとっては耳新しい名であ

る。それが本書の傍題にあるやうに「世界で最初に産業組合を作つた偉大な殉教者」と聞くと、われ／＼の耳を驚かすのである。本書の著者高倉氏は十數年前から幽學の事蹟を調べ大いなる愛と敬意とをこめて今日この書を書いたのである。本書は大原幽學なる世界に誇るべき人を普く國民に知らせ、現在新しく改革を迫られてゐる農村問題に對しても貴重な示唆を與へんがために書かれたものである。

幽學の傳記は未だ審かでないが、名古屋藩士として生れ、浪人して諸國を流浪し、遂に房州長部村に居住するに至つて今日の産業組合の祖ともいふべき「先祖株組合」を創始したのである。それは天保十一年、西暦一八四〇年のことであり西洋における創始に數年を先立つものであつた。本書は當時の社會事情を見、幽學の傳を探り、彼の人格と教とによつてこの事業の生れ出でる過程を極めて平明に説いたのである。本書は未だ説き盡さない憾もあり、引用その他の點において尙十分に通俗化してゐない嫌もあるが、幽學の事蹟に現はれてゐる感化影響の記述は自ら感激をそゝり、襟を正さしめるものがある。國民精神總動員の秋、眞に珍重すべき良書である。

（昭和一四、一、一〇 京橋區京橋一ノ八 東邦書院 四六六頁 二四三頁 〇・〇〇）

廣 瀬 彦 太 著

郡 司 大 尉

本書は文學者幸田露伴、幸田成友、女流音樂家幸田延子、安藤幸子等の季兒にあたる海軍大尉郡司成忠氏のその熱烈たる氣概を以て成し遂げたる北洋拓殖事業について、海軍大佐廣瀬彦太氏のものせる、いはゞ故大尉の事業傳記である。

本書推薦について、本書が單なる故大尉の北洋拓殖事業を完成したその間の苦澁を以てするのでない。現在に於ても日ソ國交は紙一枚の差にて平和が戦争に導くのである。そして北洋は國境である。僅々呼ばば答へんの境地にある占守、この地を平和に保持するには拓殖防備の外に何もあり得ない。現今に生命をもつ國境生命線である。然も世界三大漁場として名高い北洋であり、我が國民は確かに海洋國民であるを思はれる時、一層將來にも大きな國家的問題たるを失はぬ。

（昭和一四、一、一〇 四谷區荒木町四 鱈書房 四六六頁 三五二頁 一・八〇）

長興 善郎 著

大帝康熙 (岩波新書)

清の聖祖康熙帝の一代の行歴を史實に基づき、讀物風に記されたものである。支那歴代の帝王中その治蹟の大きいにあがつたものには義に唐太宗があり、後に康熙ありといはれて居る。しかも康熙帝の偉大さは滿洲族より出で、明末清初の複雑なる内治外交を處理し、清朝二百六十餘年の基礎を固ふした所にある。異民族による支那の支配、統治、これ今日の課題である。この課題に對する康熙帝の答案こそ、日本國民の一讀に値するものではあるまいか。

本書の目次左の如し。

康熙帝登極までの時代と環境——少年時代とその修養——康熙の科學的精神と西洋人の康熙觀——露西亞との外交折衝の成功——蒙古征討と喇嘛教の問題——康熙の對支政策——その行政と文化事業——其の晩年、悲劇、死——結尾

康熙帝の一生はこれにより首尾一貫して居る。本書は必ずしも嚴密なる意味に於ける史籍を目標として居るものではない。其の擧げられて居る参考文献の如きも嚴密なる史料にはよつて居ないやうである。此處にこの書の物足りなさがあ

る。然し大帝の治世の一般と異民族による支那の支配の成功の一つの例をうるほいのある筆致を以つて敘述されて居るところをとりたい。

(昭和一三、一二 神田一ツ橋二ノ三 岩波書店 新四六判 二〇〇頁・五〇)

幸田 露伴 著

澁澤榮一傳

本書は露伴學人の筆になる澁澤榮一傳である。本書で取扱つてゐるのは、榮一が三十四歳大藏省退官に至るまでの時期に屬し、それ以後は單にプログラム程度の記述を附加したに過ぎない。それ故、彼の九十年の長い生涯から見れば半生の傳にも満たないのであるが、これはこれとして立派に獨立の意義を持つてゐる。本書敘述の體は露伴學人一流の傳記體のものであつて、平面的のものでなく、立體的のものといつていいであらう。榮一の成長、發展を丸彫りに表現しようとしてゐるのである。著者の榮一觀によれば、彼は正しく時代の子であり、時代と共に成長した人物である。それ故、彼の事蹟功業は、時代の轉變、推移の過程の中に語られるのである。彼の人物、性行等もそれらの事實を語る中に顯現するのであ

る。併しながら時々著者の史觀、人物觀を間にはさみ、それがまた一流の史傳として光彩を放つものとなつてゐるのである。本書に現はれてゐるところから見れば、著者の探究は微細に互り史眼また透徹して、優に史家を啓發するに足るものがあるやうである。今更に學人の博識睿智に驚歎せざるを得ない。本書は傳記として特色鮮かに優秀なばかりでなく、之を讀むものは多少の難讀の間にも滋味掬すべきものを味ひ

教養上に於ても幾多貴重の示唆を得ることが出来る。本書は或は青年には多少難讀であるかも知れぬが、一般成人、青年指導者の讀物として適當であらう。

澁澤榮一傳としては他に土屋喬雄著「澁澤榮一傳」(昭和八年)白石喜太郎著「澁澤榮一翁」(昭和八年)小貫修一郎編「澁澤榮一自敘傳」(昭和十二年)等の著があるけれど、人物・事業を渾一體として描き出したものは本書の外にはないといつてよい。大藏省退官に筆を止めたことは本書の重大缺陷とせられ、榮一の意義は寧ろそれ以後にあるとの評もあるが著者は明かにそれを認めながら、それは我が任にあらず、社會經濟史家に屬することであると斷つてゐるのである。一面見方によれば彼の生涯の礎石は本書に取扱はれてゐるまで出来上つたので、その後は坦々たる一路を齎進したのであるとすることも出来るわけであるから、本書獨立の意義を減

却するものではない。

(昭和一四、六、一〇 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店 四六判 三一七頁・一・五〇)

清水 安三 著

朝陽門外

本書は北京朝陽門外において崇貞學園なるものを經營し、支那貧民の子女の教育に半生を捧げて來た清水安三氏の赤裸々な自敘傳である。氏の二十年に互る献身的な事業も、この度の事變に至るまで、聊かも世の注目するところではなかつた。然るに端なくも事變を縁として世に喧傳せられるところとなり、氏は今や「北京の聖者」と呼ばれ、その著書は疾風の如き賣行を示してゐるのである。まことに世の皮肉といふのほかはない。

本書は發端を事變の勃發に起し、彼自らの半生を語り、崇貞學園の事業を語り、更に美穂前夫人の生涯を、最後に現夫人郁子氏を語つて終つてゐる。これを語る清水安三なる人物は稀に見る正直な、あけつばなしな人である。氏は熱烈なクリスチャンであるが、謂ゆるクリスチャンらしからぬクリスチャンである。氏は己れの内面を、己れの思想を語らない。

その意味では己れを語つてゐないのであるが、本書を通じて實にくつきりと清水安三なる人物を映し出してゐる。氏は宗教的人格といふべき人ではない。我々を打つものは氏の献身的な、奉仕的な行爲であり、事業である。その意味で氏は事業家なのであるが、謂ゆる事業家の外衣を徹塵も纏つてゐないのである。氏の如き人物は今日以後、我が國にとつていかに必要なことであらう。

(昭和一四、四、二〇 龜町區有樂町 三六七頁 一・三〇)
朝日新聞社 四六判

シユヴァアイツェル著
竹山道雄譯

わが思想と生活より

優れた神學者であり、現代最大のバイプオルガン演奏家である著者の自傳である。三十歳にして學者、音楽家として世界的名聲を得、三十六歳醫師となつて半生を人類への奉仕に捧げようと決意して、夫人と共に赤道直下の未開地コンゴに入り、未開蠻人のために献身的活動をなせる著者の生活と思想とを簡潔に敘述したものである。この人に見る敬虔眞摯な思想と行爲とは眞に一體をなして高潔崇高である。現代わが

國の知識階級は何よりも信念と行爲とを要求せられてゐる。東亞協同體の理念は掲げられた。この理念は崇高である。この秋この人の生きた模範は必ずやわが知識層の人々に偉大な暗示を與へるであらう。

(昭和一四、二、六 神田區小川町三ノ八 白水社 四六判 三二一頁 一・五〇)

グスタフ・エックシュタイン著
栗原古城共譯
小栗田律譯

全傳野口英世

野口英世傳は日本において奥村鶴松氏のもの、小泉丹氏のものなどすでに立派なものが出てゐるが、本書はこれらの世に現れる以前に出版され、最初の權威ある野口英世傳となつたところに意義がある。しかも後出の奥村氏、小泉氏の傳記に參考材料を提供し、多くの重要なヒントを投げ與へてゐる點において輝やかしい功績を有する。

著者は野口英世の死後遙々日本を訪れ、その故郷を歩いて材料を蒐集し、その情熱の失はれないうちに一氣に執筆せるもので、一九三一年野口の死後僅かに三年にして發表されたものである。それでゐてその内容の充實せること、材料の豊

富なること、外人の著者にしては實に珍らしいことだと感嘆せざるを得ない。奥村氏が日本に於ける話が多いのに對してやはり外人だけにアメリカにおける話がよく集められてゐる。文章のスタイルは全巻現在形によつて終始されてゐる點印象が鮮明で、人物の映像が躍動し、傳記文學としては最も優秀なもの、一つであると信ずる。

野口英世は非常な天才であつたと同時に、また多くの缺點を持つた人であつた。この缺點が天才と混交してゐるところに野口英世の人間としての全貌がよく滲んでゐる。この傳記が天才または學者の傳記としてのみ記述されず、むしろ特種の人間像として描かれてゐるところに人間研究の貴重な資料を提供するものといふことができる。

著者の日本人に對する愛情も美しい。とにかくこの待望の書が二人の譯者によつて世に紹介されたことは喜ぶべきことである。

(昭和一四、一、二 神田區小川町二ノ一〇〇)
青年書房 四六判 四三三頁 二・〇〇)

小泉丹著

野口英世 (岩波新書)

野口英世博士の傳記としては、奥村鶴吉氏の優れた「野口英世」があり、エックシュタインのそれとは異つた、これまた優れた「Nobels Ein」がある。なほ他に、單行本の形で出版されてゐるものが數種もある。然るに本書は、これ等現行のものとは別趣の内容を有し、立志傳的、訓話的、讀物的のものでなく、醫學専門家の立場から野口博士の生涯の敘述に添へて學人としての野口、人間としての野口を、吟味し味はつたものである。而もそれが、徒らに野口博士を賞揚し讃歎することに終ることなく、その業績並に人間的性格に關しても、公正な立場から觀察し、そしてそれ等の眞實の位置を明らかにしてゐる所に特色を有してゐる。

斯くの如く野口英世が一人間として我々の身近く置かれ乍らも、その偉大さは何等損傷されることなく、寧ろ餘りに人間的にして而も超人間的なものとして萬人に高く仰望されるのである。

更に彼の偉大さは次の點に存する。

「彼が人類の敵と戦つた功業は、實に日本國民のみならず世界人類の永久的記録として特筆大書するに價する。如何なる武人の功業も野口博士の勇敢なる戦闘に比すべきものはない。博士は人命を奪ふ微細なる病菌發見のため他むところなき努力を續けて一生を終つた。されば國境を超越して人道のため戦つて來た博士の努力は、何人を指いて

も世界の感謝を要求する資格がある。實に博士は、社會的乃至政治的自由のために闘つた人達よりも、人間の福利増進に大なる貢獻をなした。〔紐育タイムス〕一九二八、五、二二。

最後に、野口博士の「母、師、友」に關する事が述べられてゐる。母親シカ女の六十六年の一生は、文字通り生れた時から、肉體的、物質的には、貧窮、勞働、苦難といふこと以外に何物もなかつた。世界的の學者、丁抹のナイト、ロツクフェラー研究所の正員、恩賜賞受賞者たる博士の母であつても然も猪苗代湖畔の寒村の茅屋に、貧農の老婆として安住し、婆婆の華かさから、完全に遠ざかつた生涯を終始したのである。次に博士はまことに良き師をもつてゐた。少年として小林先生、青年として渡部ドクトル、續いて博士にとつての大危期であつた東京時代から血脇先生と、良き先生、肉親以上に血の通つてゐたやうな恩愛の師の庇護のもとに置かれて來た。更に博士は多くの良き友をもつてゐた。高島屋の代吉君、西川義次君、八子彌壽君、石塚三郎氏、奥村鶴吉氏、星一氏等斯うした氏と最も深い關係のあつた人達が擧げられてゐる。

(昭和一四、七 神田區一ツ橋二ノ三
岩波書店 新四六判 一八七頁・五〇)

木下 奎 太郎 著
其國其俗記

大正九年十月に書かれた「洛陽及鞏縣」を最初にして、それ以後昭和十二年八月の「マニラ記」に至る迄の間、著者がクウバ、北米、倫敦、巴里、羅馬、里昂、獨逸、暹羅、マカオ等その他の各地に遊んだ旅行記である。尙卷末に「マニラ板ろざりよ記録の事其他」「マニラ板ろざりよの經に就いて」の二篇が附録されてゐる。單に科學者でない著者、むしろ詩人としての著者の豊かな情藻によつて各篇にむせかへるやうな高い香氣の異國情緒が匂つてゐる。優れた文明批評、科學者としての犀利な觀察もあるが、それがある場合には、旅愁とでもいへる、しつとりと潤ひのある筆致で描き出されてゐる。一般成人向の好隨筆集。

(昭和一四、三、一〇 神田區一ツ橋二ノ三
岩波書店 四六判 四一三頁 二・五〇)

脇水 鐵五郎 著
日本風景誌

ある讀者は必ず一讀すべきものであらう。敘述は平易で一般大衆にも理解は容易である。

(昭和一四、三、二〇 日本橋區通三ノ一
河出書房 四六判 三三二頁 二・五〇)

大阪毎日新聞社京都支局編
維新の史蹟

本書は昭和十四年正月より七十回に亘つて大阪毎日新聞京都版に連載されたものの輯録であつて、書名は「維新の史蹟」と題してゐるが、其の範圍は京都市内に限られてゐる。即ち分布の地域に依つて、これを中央、東、西、南、北の五部分に分ち「久坂玄瑞と蛤御門」より「岩倉具視公幽栖の故宅」に至るまで、全部七十箇所を擧げ、夫々の史蹟に關係ある人物或は事件の解説をなしてゐる。

しかしもとより幕末維新の主要な舞臺は京都にあつたと云つても過言ではなく、京都を中心に幾多勤王の志士は國事に奔走し、多くの重要な事件が相踵いで起つたのである。しかも本書は京都に於ける維新史蹟の主要なものを、殆んど網羅してゐるが故に、本書を通讀して幕末維新史の一面を知ると云ふことが出来るであらう。巷間の所謂名所案内とは勿論そ

國立公園を中心として我國の名所、天然紀念物を著者の專攻する地學的な立場から取扱つたもので、かゝる點では一般の讀者に之を勧めることは躊躇せざるを得ない。しかし著者が巻頭の「日本風景と日本精神」の中で述べてゐるが如く、「古人が日本風景に對してなしたる如き敬虔なる態度を以て日本風景に臨み、以て身神の修養と日本精神の發揚に努力」すべきであるならば、即ち祖國の自然に對して慎しく之を禮拜する精神に徹するなれば、明媚なるわが自然に對して本書の示すやうな正しい地學上の知識を得てをくべきであらうと信ずる。國立公園はもとより乍ら、「地質上から見た薩南」「漸戸内海はどうして出來たか」等の篇名を一瞥するのみでも興味を唆られるではないか。

總論的な「日本風景と地質」を第一として、その内容をあげるならば、吉野熊野國立公園概説、富士箱根國立公園、日光國立公園、雲仙・霧島・瀬戸内海三國立公園、阿蘇國立公園の外地質上から見た松江と宍道湖、黒部峡谷の地學的考察、紀南地方、別府地方、天草新名勝、隱岐新風景、耶馬溪彦山風景論等の諸篇が收められてゐる。いづれもその土地を造る岩石又は土壤の種類、性質又はその岩石土壤が組立てゝゐる土地の構造、更に地殼變動を考察したものであつて、風景鑑賞を一步進めて風景科學を説くものである。地理學に關心の

の撰を異にするもので、平明にして興味ある行文と相俟つて幕未維新の事蹟を國民に親しませる意味からも、本書を國民一般に推薦したいと思ふ。

(昭和一四、六、一 京都市上京區丸太町堀川西入) 星野書店 四六判 二八六頁 一・二〇

深田 久彌 編

峠

本書は曾て出版された「高原」の姉妹篇となるものであつて、峠を實際歩いた諸家によつて書かれたものを、登山家としても名を知られてゐる小證家の深田久彌氏が編んだものであることは「高原」の場合と同様である。最初に峠の概説があり、次の第二部が中心的部分で足馴峠から以下全国主要な峠三十四について各々経験者が紀行を書いてゐる。第三部は島崎藤村氏を始め結城袁草果、入澤達吉といふ様な名士によつて書かれた峠に因む隨筆である。巻尾に主要峠高度表が付いてゐる。主要部である峠の紀行はどれも無味乾燥に陥らぬ様手際よく書かれてゐて讀物としても興味多いものであり、ハイキングの案内書としても勿論好箇のものである。一般に推薦する。

(昭和一四、九 再版 神田區駿河臺二ノ一〇) 古今書院 四六判 一六六頁 一・二〇

クレッツシイ 著
三好 武二 譯

支那の土地と人

原著者クレッツシイは一九二三年上海大學の地質學教授として赴任したが、爾來六年間に全支二十八省中、雲南・四川・西康・新疆・福建の五省を除くの外は足跡を印しない處はないと云ふ程に支那内地を實地踏査をしてゐる。現在は米國シラキユース大學の地理科主任教授の由。

本書は右の如く數年に亘る實地踏査を基礎とし、諸文献・收獲の結果と、加ふるに著者の非凡な科學的才能とを以て出來上つたもので、原著は一九三四年(昭和九年)に刊行されてゐる。その編纂に際しては太平洋學會支那委員會の推薦により、後には重ねて社會科學研究委員會に依つて同會より再度に亘つて補助金が下附されてゐる。従つて本書は元來研究報告に屬するものであるが、記述は平易で、所謂報告書型の無味乾燥な嗅味はない。

内容は地形、氣候、土地等の自然環境と人間との相關關係

(昭和一四、八 澁橋區訪諏町一〇八) 青木書店 ノート判 五一七頁 二・四〇

須田 皖次 著

洋 車

本書は現在福岡氣象臺長たる著者が昭和十三年九月から昭和十四年四月に至る八ヶ月間の北中支蒙疆等の各地に旅行した際得た見聞を「北支雜記」として雜誌「地理學」誌上に載せた六十六篇を單行本に纏めたものである。

その内容は「北京の日本人」「洋車」「北京の堂深」「北京の古本屋」「北京の物貨」「北京の通貨」の題が示す如く北京に於ける日本人、支那人の日常生活を紹介したものが多く、中には北支蒙疆の自然と人々とに密接不離な關係のある面白い事象を卑近な實生活に即して取上げた點に著者の氣象學者、地理學者らしい觀察眼の躍如たるものが窺はれる。

もとより旅行の途次忽々の間になつたものであるから、深い研究調査の成果と異なり、支那の研究者、或は一度彼の地に遊んだことのある者にとつては敷ぬ點が多いであらうが、平易輕妙な記述の中に自づと北支蒙疆の風土、支那人國民性等の一端を知らしめる輕い讀物として一般に推薦する。

を分析し、之を解釋することに依つて支那の眞の姿を有機的に描き出そうと云ふのが原著者の意圖らしく思はれる。唯本書にも若干の缺陷がないわけではない。それは本書が一九三四年に版行されてゐるにもかゝらず、政治的に滿洲國を明確に認識してゐない點である。然し元來純粹に支那の地理を論ずる場合には大きな亞細亞大陸の東斜面を總稱して支那と云ふ場合がある。その點を考慮して、政治的認識はともかく純地理學書として本書を見る時は評判通りの名著であることに些の疑念もない。支那研究に忘す人には必讀の書と云ふことが出来る。

(昭和一四、六、五 京橋區寶町二ノ二) 併成社 四六判 六二五頁 三・八〇

米内山庸夫 著

支那風土記

著者は嘗つて支那駐在領事であつた。この著者が大正十四年暮より昭和三年春まで濟南に在勤し、昭和三年夏より同七年夏まで杭州に在勤した當時支那各地の風物を探訪した際のありのままの記録である。

支那風土記と名のつく圖書は尠くはない。しかし所謂支那

通のものには新鮮味が缺けてゐるし、新しいものでは短くて一ヶ月長くも三ヶ月を出でない。駢足式のものが多い。これ等の中にあつて本書は身を以て全く平和時の大陸の風物を撞に探訪して居る。支那の眞の姿は寧ろかゝる所に見出されるのではないだらうか。挿入の寫眞も頗る個性に富むもので、内容と相待つて類書より遠く抜きんで居ると思はれる。

本書は何處までも悠々たる支那紀行である。全體としての豫定を立てゝのあはたゞしい旅行記ではない。支那人の性格を描くにしても面子や没法子といふやうな概念を説明するのではなくて、著者が随時随所に於て體驗した實話を以てせられて居る。

足跡の及ぶところはあまり廣汎ではないが、それでも西湖及び其の附近、南京から揚州、錢塘江と普陀山、山東省一帯の地で支那の風物、古美術の探訪には絶好の地であり、この方面の案内書としても興味津々たるものがある。

著者は當時我が駐支使臣であつた。しかも杭州在勤の後期には先の上海事變をも經驗して居る筈である。しかし本書では全く此の方面の記事を収めては居ない。著者の趣味は支那藝術の一般に及んで居り、其の筆は頗る暢達、典雅である。

(昭和一四、七、芝區新橋一ノ七、改定社、四六判、五六一頁、三・二〇)

藤田 元春 著

大陸支那の現實

こゝで云ふ支那は純粹に地理學の便宜上から云ふ名であつて、廣く東亞の東方斜面を指してゐる。故に中華民國即支那と云ふ意味の支那ではない。

内容は二篇に分つてゐる。第一篇は通説で、地形構造、住民風俗、産業、交通、その他自然地理、人文地理の一般が扱はれ、第二篇を地方誌に充て、各地方の事情を細述してゐる。滿洲國については特に附篇として一項を獨立せしめてゐる。

何と云つても廣い支那を各分野に分つて、この小さい一冊の本にまとめたことゝて、記述は稍々粗で、讀み物として魅力には乏しいが、大支那の地誌を簡單に知らうとするには手頃の本である。

(昭和一四、一、二五、神田區神保町一ノ三、富山房、四六判、三八〇頁、二・五〇)

布施 勝治 著

ソ 聯 報 告

現在彼地には、約二十五萬の同胞が我が海外發展の先鋒として色々な艱難を克服して勇敢に活躍して居り、又今日吾々はその缺乏を痛感せしめられてゐる鐵、石油、綿花等の重要資源は「世界のとりどころされた寶庫」と云はれる位豊富なのである。

支那事變の成功的處理の爲に物心兩方面の總力をあげて奮闘してゐる我國の現状に於ては、中南米の天地に積極的に関心する事は不可能であらうが、然し發展してやまない我國の前途を想ふにつけても、この未開拓の世界は、吾々の決して見逃してはならないものであらうと思ふ。本書はたゞに中南米諸國の文化と自然の狀態を概觀的に紹介するのみならず、國民一般の彼地に對する關心を高め認識を深めしめるに役立つものと思ふ。

(昭和一四、七、一〇、神田區駿河臺二ノ四、明治書房、四六判、三四七頁、二・〇〇)

丸山 鶴吉 著

中南米の旅

本書は丸山鶴吉氏が紀元二千六百年日本萬國博覽會の招請使節として中南米に派遣せられた時の——昭和十三年四月より同年九月まで——旅行記で、「中南米空の旅」「中南米諸國大觀」「日記抄」の三編より成る。

ヴォドビヤールノフ 著
米 川 正 夫 譯

北 極 飛 行

(岩波新書)
原著はイヴィミール誌(一九三七年八月號、一九三八年五

大江 一 著
譯

孤 獨

バード少将は極地探検家として世界屈指の経験家であつて一九二六年には飛行機によつて北極を横断、二八年には南極に飛び、リットル・アメリカを發見、翌二九年同じく飛行機によつて南極に到達した。更に三三年再度南極に向け出發、リットル・アメリカを基地とし、これよりトラツクにて二日行程を南下してロス氷原の氷雪の中に前進基地を設け、單身これに籠城して極地の氣象と極光の觀測に従事した。本書はこの時の記録で彼の不屈不撓の意志力と信念とを如實に示してゐるものである。

一行が根據地リットル・アメリカに到着したのはその年の三月で、この時分から南極の冬が始まり、極地の探検は最も不利な状況に入るのであるが、あらゆる困苦を冒して、隊員は零下七十度に達する嚴寒の中に小屋を建設し、氷原の空をバードは前進基地に飛來し、それより單身この小屋に起臥して觀測に従事した。彼が單身踏み留まつた理由は本書に詳細に述べられてゐるが、彼の隊員に對する愛情の美しさは見る

月號)に掲載されたヴオドビヤノフの「如何にして空想が現實となつたか」と題する記録で、一昨々年(一九三七年九月)成就された北極探検飛行のルポルターージュである。譯者も卷末に附言してゐる如く、書中には冒險的なスリルや、華々しい劇的のヒロイズムは殆んど見當らない。が然しそこには何等の誇張もなく飽くまでも事實を事實として現實的に報告されゐるので、却つて全卷に内面的緊張味が漲つてゐる。ヴオドビヤノフは、一貧農の子から身を起してソヴェット第一流の飛行機操縦士となり、一九三七年全世界の耳目を聳動せしめたパーソンを主班とする學術冬營隊を極北の氷塊上に着陸せしめた功勞者である。

本書の中からはソヴェットの航空機、並に技術に關し可なり精細な知識も得られ、かゝる大事業の遂行には如何に周到な用意と辛抱強さを要するかを知り、而も幾度か死地に直面し乍らも猶ゆとりのある彼等の態度に幾多の學ぶべき示唆を受けることであらう。

譯文は流麗親しみのある名文章で、一般教養向きの好著として推めたい。

(昭和一四、七 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店 新四六判 二六一頁・五〇)

べきものがある。氣象觀測の記録は米國氣象學會に貴重な資料として保存されてゐるが、この記録をとるためにバードが如何に努力したかはこの記録の各頁に見られる。特に最後の二ヶ月半は石油ストーブより洩れる瓦斯のため、起臥にも不自由する程に衰弱してゐる。しかし週三回の基地とのラヂオ通信にも彼は一切これを發表せず、不屈の意志力を以て病と闘つた。全體が忠實な記録であるから相當に退屈な點もあり

努力して讀まなくてはならないかも知れない。しかしバードのこの記録は探検家に對して我々が想像するが如き粗剛なものではなく、人生に對する澄んだ心境と濃やかな美しい感情を盛り湛へた優れたものである。

(昭和一四、四、二〇 芝區芝公園七號地一〇番 大東出版社 四六判 三四八頁・一・五〇)

第三 政治・法律・經濟・社會・教育・兵事

高田 保馬 著

東亞民族論

稀に見る情熱的な學者として知られる高田博士が烈々たる愛國の念に促されて書かれた本である。

本書の第二章をなす「東亞民族主義について」の一篇はこの問題に關する論說としては我國で最も早くあらはれたものであらう。その後三木、蠟山、船山其の他多くの人々によつ

て東亞協同體論、東亞聯盟論、東亞思想論等の名で種々の角度から盛んにこの問題が論議せられたこと周知の通りである。そしてそれらの論が根本に於て同じ問題を目指しながら種々その重要な點で意見の對立を有つてゐることはいふまでもない。本書が全體として、ボレミークの形をとつてゐるのはそのためである。

十一篇の主論文と餘論一篇とからなつてゐる。一々の論文の内容については煩雜になるので説明は省略に従ふことにす。博士の東亞民族論の主旨は、要するに一般に民族を成立

せしめる紐帯なる同血、同文、同城等の諸條件が（強さに於ては著しく程度の差はあるにしても）少くとも潜在的のものとしては東亞各民族の共同の地盤として既に與へられてゐるのであつて、この地盤の上に東亞民族を一體の意識にまでもたすための工作、殊に政治的工作が行はれなくてはならぬとするのである。

さてこの結合によつて到達せられる中心の目標は東亞のための東亞の自衛である。それを東亞文化の形成に求めんとする東亞協同體論はかかる形に於ては無力である。

またこの場合、日本民族、支那民族等々の個々の意味に於ける民族そのものが結合して東亞民族をなすのではない。成員たる各個人は一面に於て個々の民族に屬すると同時に東亞民族に屬するのである。従つて日本民族はどこまでも日本民族として存続するのであり、日本精神が東亞精神に從屬するのでは無効である。

この主義の結論として、博士はその有名な貧乏主義？をここに持つて來られる。「日本民族よその生活標準を高めてはならない」と主張されるのである。

東亞新秩序の建設は支那事變に關するわが國策の標語である。總ての日本國民はそれぞれの分に應じてこの國策に協力しなくてはならない。この問題があらゆる角度から眞剣に檢

討されることはもとより望ましいことである。本書の如き主張が絶対に正しいとはいへないにしても、この著者の如き愛國の熱情に燃える態度は青年達の心構へに大きな影響を與へずには置けない。知識階級殊に青年向。

（昭和一四、六 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店 四六判 二二七頁 一・五〇）

松村 秀逸 著

日本の進路

本書は著者が今迄に新聞、雑誌、放送、講演等に於て發表したものを一冊に纏めたものである。内容は大きく分けると「戦ふ日本」「歐洲はどうなるか」「陣中雜記」「放送四題」「疾驅廣東」となるのであるが、其の中で主要を成す文は「戦ふ日本」と「歐洲はどうなるか」の二文である。著者は序文に於て「戦ふ日本」「歐洲はどうなるか」は日本を廻る東亞の情勢を、歐洲の戦争を出来るだけ平易に、政治部的なもの、社會部的にと思つて書いてみた」と述べてゐるが、其の言葉の如く「社會部的」な、如何にもくだけた敘述の中に吾々は却つて生き／＼とした印象と感銘を覺えつゝ、「大陸戦線」「援蔭戦線」「アジア進軍譜」「歐洲はどうな

るか」等につき理解を深めることが出来るのである。更に又「戦争記事は全體と個人との動き、この兩者を組合せて書かなければならない」との著者の意圖する處も亦本書に於て、よく具現されて居ることを認めざるを得ないのである。要するに本書は「戦争記事」として勝れたものであり、國民一般に時局認識を深めさす上に好適なものとして、正に推薦然るべしと信ずる次第である。

（昭和一四、一〇 小石川區音羽町三ノ一九 大日本雄辯會講談社 四六判 三二四頁 一・三〇）

石井菊次郎 著

外交回想断片

本書は石井子爵が主として國際聯盟協會（後の國際協會）でされた講演及び外交雜誌に發表されたものゝ集録である。最初の「外交回想断片」は日露講和會議に於ける樺太南半割議の経緯、歐洲大戦當時におけるロンドン宣言加入とその後のヴェルサイユ會議における日本の地位との關係等について、石井子爵の盡力を述べられ、次の「日英同盟回想録」では日英同盟成立の背後に動いたドイツの策謀其の他の裏面の事情を語り、「不戦條約論」では特に我が國體と外交方針と

を説いて同條約の用ひた「人民の名に於て」の言書に對し權威ある意見を開陳し、また同條約が仲裁々判條約及び制裁事項を伴はない不備を指摘してゐる。次の「イン・ゼ・ネーム・オフの句に就いて」はそれに関する立博士との論戰の一端であり、「平和事業と各國の婦人」は昭和六年に我國國際聯盟協會に婦人部が成立した時の挨拶、「國際經濟會議を語る」「國際平和の眞意義」は何れも國際關係は結局實利であることに着目して、經濟的に孤立してゐる日本は經濟統制を行はなくてはならぬと注意し、「極東問題と佛蘇の因果關係」は昭和九年の兩國接近の意義を明かにしてゐるが、現下の佛蘇並に英國との接近の意義に關しても頗る示唆に富んだものである。次の「領土並に資源再分割問題」ではその解決に對する各國の熱意が世界平和のパロメーターだと叫ぶ。「ロンドンに反映した日支事變の雲行」は石井子爵が國民使節として渡英された時の英國の輿論、「歴史は繰返す」は上海に於ける各國租界當局と我國との間に生じた紛争に關し、「シドニー號事件」を回想してその意義を明にしたもの、最後は「メツテルニツヒ公に就て」である。

（昭和一四、二、二〇 神田區神保町三ノ二二 金星堂 四六判 三四〇頁 一・五〇）

大陸國策を現地に視る

本書は朝日新聞社より中南支、北支蒙疆、朝鮮、滿洲等の各方面に派遣せられた各特派員の所謂「現地報告」(東西朝日紙上に連載)を纏めて一書としたものである。

而して序文に書かれてゐる如く各特派員は夫々「大陸各地に於ける大陸政策」の現状を政治、經濟、外交、文化の諸角度から視察して報告してゐるのである。

此の意味に於て「本書は全篇に亘つて潑刺として生彩に富み、讀む者をして帝國の大陸國策が現地に於て如何なる難關と闘ひつゝ、如何に具現化されつゝあるかを切實に認識せしむる所がある。

先づ第一の中南支篇に於ては上海を繞つての租界の問題、法幣の問題等の記事が注目し得る。第二の北支蒙疆篇に於ては治安、討匪、宣撫等の第一線の活動の報告記事と共に資源關係の記述に興味を覚えさせられる。

第三の朝鮮滿洲國篇に於ては「大陸への兵站基地」としての新觀點に立つた朝鮮の政治、教育の現状と日滿不可分關係上の滿洲の政治開拓産業等に關する記事が讀者に多分の示唆

を與へるだらう。
之を要するに、本書は一般國民をして「現實に刷して時局を認識」せしむる上に役立つ所多しものと云ふことが出来るであらう。

(昭和四、五、二五 麹町區有樂町二ノ三)
朝日新聞社 四六判 四五四頁 一・〇〇〇)

伊禮 肇 著

興亞の先驅

前拓務參與官たる著者は其の序文に於て「一つは滿洲移住者のために最もよき手引となり、他方國內にある人々の此の移民政策(滿洲移住國策)に依つて東亞の情勢がどんなに展開されつゝあるかを明瞭に認識してもらふことに重點を置いて編纂したのである」と述べてゐるが、其の意圖は本書の全篇を通じて、よく具現されてゐることが認められる。第一に「大陸へ平和の進軍」と題して滿洲移住國策の内包する意義を分り易く説明し、第二に「滿洲國策移民の由來」を述べ、第三に「移民となる迄」に於て移民の募集、訓練、渡滿等のことを主として語り、第四に「移民の現況」を述べ、第五に「移住地の營農」と題して滿洲農業の概略を説明してある。

第六は「移住地の實情を視る」で彌榮村、瑞穂村等の狀況が語られて居る。第七は「日本農村の革新」で主として分村運動の事が述べられてゐる。第八に「若き開拓者青少年義勇軍」の記事がある。尙附録として「移民關係の諸機關」「募集要綱案」「視察者のための栞」「移住者渡滿の栞」等の記事が附加されてゐることは本書の實用的價値を一層大ならしめるものである。要するに本書は、正確なる資料に基づいて書かれた「滿洲國策移民讀本」とも稱すべきものであつて「二十ヶ年百萬戸滿洲移民の國策」の全貌を窺ふ上にも、將又、滿洲移住希望者の手引きたる實用的價値の上からも、安心して世に薦めていゝものと思ふ。

(昭和四、六、一 澁橋區下落合一ノ五六二)
郁文社 四六判 三二六頁 一・五〇〇)

丘 漢平 著
山崎 清三 譯

現代華僑問題

本書は十章から成り、先づ第一章緒論に於て「華僑とは何ぞや」の問題を検討してゐる。華僑とは何ぞやの問題を解決するには、當然本國の法律に依つて決定すべきである」と強

調して「支那の法律に依つて解釋すれば、凡そ支那人にして外國領域に移住又は僑居し、支那國籍を喪失し居らざるものを稱して華僑となす」と定義を下してゐるのである。第二章の「華僑の國籍問題」は華僑の各所在國に於ての國籍問題を取扱つて居り、第三章の「華僑の經濟問題」は華僑は過去に於て經濟的地位の光榮を享受してゐたが、一九二九年の世界經濟恐慌の發生以來大打撃を受け爾來衰落の狀態に在る旨を述べると共に其の衰落の原因をも探求してゐるのである。第四章の「華僑の失業問題」は海外華僑約八百萬の大多數が労働者である點を明かにし「労働問題としての華僑問題」を看過してはならぬと説いてゐる。第五章「華僑の教育問題」は現在華僑の失業者増加の傾向と共に、華僑教育も亦憐れむべき狀態に陥つてしまつたことを述べ、華僑教育の長所と缺陷とを指揮して居る。第六章「華僑の文化と社會問題」は華僑社會に於て友邦文化が漸次没落しつゝあること、失業と婚姻の二つが當面の社會問題として最重要であること等を論じて居る。第七章「華僑の團體生活」は「海外各地の華僑は五、六百年の歴史を有し、一千萬人に近い大衆を擁し乍ら團結能力に於ては非常に薄弱で極めて個人的である」と慨嘆的に述べて華僑團體の困難と其の缺點を種々指摘して居る。第八章「華僑の政治問題」は主として華僑と支那國內の政治上の諸

問題との關聯を述べ、第九章「華僑待遇上の苛例」は支那人が各國に於て排斥される理由と其の苛遇されて居る事例を示してゐる。第十章「支那國民の條約權利問題」は華僑が各條約國との間に條約に基づいて如何なる權利を享受し得るかを克明に論述してある。

要するに本書は著者の眞摯なる研究的態度をもつて成れる著作と稱すべく、譯者の冒頭言の如く「華僑の現状一般を簡單乍ら比較的正確、且つ平易に纏めたもので、この點華僑を知るため極めて恰好な書と云へよう」と私も亦信するものである。

(昭和一四、五、一二 神田區鍛冶町三ノ六 鍋町ビル)
生活社 菊判 一九六頁 二・二〇

牧野 英一 著

急々如律令錄

牧野博士が永年の撓まざる自由法論への精進の間に生れた隨筆集である。昭和十年から同十二年まで三ヶ年に亘つて「法律時報」に連載されたもの三十六の集篇録である。

自由法論はいはゞ文化人としての立場で法律を考へんとするものと見られていゝのであらうから、そこで宗教、藝術、

哲學、教育、國家、政治、社會等凡ゆる分野を背景として法律論が展開されるわけである。

近時法律が政治の前にその權威を譲りつゝあるといはれるが、それは法律の衰退を意味するのではなくして、寧ろ新しき法律思想への進展の過程と見るべきであり、このために一般國民の法律文化への關心が薄らいでいゝといふことは斷じてないと思ふ。

たゞしかし、從來概念法學と呼ばれた如き多くの法律論に見る形式論理的な考へ方は、少くとも一般の關心を惹き得るものではない。自由法論そのものの批判はしばらく別問題としても前述の如くもこの立場の法律論が廣く文化の諸問題と連るものであり、わけても本書の場合は固苦しい専門的法律論ではなくして、序文にいはゆる牧野法學に於ける「脱線」と呼ばれる程われ／＼に親しみを感ぜさせるものであるから、これを一般國民、殊に知識階級に屬する人々に一讀を薦めてもいゝかと思ふ。但し牧野博士の「脱線」はその示唆が深いだけに行文の平易さに引ずられて眞意を理解しないで讀み了る虞のあることを注意しなくてはなるまい。

(昭和一四、三、二七 京橋區京橋三ノ四)
日本評論社 四六判 三七七頁 二・〇〇

末川 博 著

經濟統制と人事調停

最近私法制度は極めて急激な變化を示しつゝある。その一は私有財産制度に對して統制經濟のもたらすものであり、他は身分制度の上に人事調停法のもたらすものである。

この如き變化はこれを私法制度の百八十度の轉回(即個人主義的組織より全體主義組織への飛躍的轉向)と見るべきか、或は未だ從來の基礎の上に立ちつゝある漸進的推移と見るべきかは人によつて見解を異にするであらうが、本書の著者は後の見解をとり、その立場から新らしき經濟統制の諸法並に人事調停法に一應の考察を加へてゐる。本書は右の如き法律の堅苦しい法律乃至解釋論ではなく、かゝる法律制度の法律思想史上の意味を國民に知らしめんとする方律隨筆と見るべきものであらう。

こゝに取扱はれてゐる題目は「統制と調停」「統制經濟と私法制度」「經濟法の據點」「統制と契約」「ドイツ判例學說を通じて見たる公定價格違反賣買の效力」「裁判と調停」「人事調停法解説」である。何れの意味にもせよ現代は諸法律制度の著しい轉回期である。一般國民がこれに對して一應

の理解を持つことは望ましいであらう。

(昭和一四、八、日本橋區通三ノ一・三〇)
河出書房 四六判 二一七頁 一・三〇

片山 哲 著

人事調停法概説

第七十四議會を通過して本年七月一日から施行されることになつた新法律「人事調停法」の解説である。専門法律書ではないが、必ずしも一般的常識に止まるものでもない。それは本書の目指すところが第一に家庭婦人なのであるが、同時に氣の毒な娘、或は妹を持つ父兄や、更に進んで調停委員や方面委員に推される人々の參考たらんことも庶幾してゐるかである。

先づ本法の總括的證明から始めて、各條項を逐次わかり易く解説し、終りに家庭紛争の生ずる原因を検討して現行の親族法、相続法の含む矛盾を指摘し、その速なる改正を期待すると共に、これ等の點を念頭に置くことによつて本法運用の適切ならんことを願つてゐる。最後に親續法、相続法が如何に改正されんとしつゝあるかを概説し、附録として家庭事件に關する司法統計、調停申立の書式等を示して實際に役立た

んことを期してゐる。

國を擧げて聖戦を戦ひつゝある今日、銃後家庭の安定化は極めて重大な意義を持ち來つた。人事調停法はかかる事情に促されて急速な實現の運びを見たものである。これに對して一般國民、殊に家庭婦人、それ等の父兄、調停委員、方面委員に推されるが如き人々の深い關心が要求される譯である。

(昭和一四、六 神田區保町二ノ二)
巖松堂 四六判 一九七頁 一・二〇)

佐野 福藏 著

人事調停法講話

本書は法律大衆化の目的の下に書かれた「人事停法」の手ほどきである。序文によると警若心經に於ける「繪心經」或は南部藩に行はれた「盲曆」の例に倣つて思ひ切りくだいて法律を説くことを試みたものだといふ。俗語を引き、實例を挙げ、比喩を用ひ嚙んで含めるやうな説明ぶりである。またルビの振り方も例へば「西洋」「古往今來」「事件の具體的妥當性」といふやうな意譯的な仕方を用ひてゐる。

序編と本編に分ち序編に於て本法の精神を理解させ本編に於て本法の各條項を説いてゐる。

嚴密さに於けるところがあると思はれるが、本法の精神を氣分的にわからせるには役立ち得るであらう。そして大衆にとり大切なことはかく氣分的にわかるといふことであると思ふ。

(昭和一四、六、一二 神田區猿樂町一ノ六)
松山房 四六判 三一六頁 二・〇〇)

原 祐三 著

新日本經濟說話

論說
史話
隨筆

著者はダイヤモンド社の記者であり、また中央物價委員會の委員として國策にも關係せられ、今日の重要な經濟問題について活躍せられつゝある人である。本書は標題に冠せられてあるやうに、論說・史話・隨筆の三部から成つてゐて、全體として興味ある經濟讀物である。

論說の部分では現下の統制經濟について簡潔に要領よくその見透しを説明してゐるが、簡明な解説書でもあり、將來への問題の所在を説き明かしてくれる指導書でもある。史說の部は日本經濟史に關するもので、この分でも經濟史に關する著者の豊富な學識や調査事實を示してくれるのである。隨筆の部は「經濟考現學」と稱して、日常世上のいろ／＼なトビ

ツクを捉へて、經濟上から面白く、輕妙に語つてくれる短篇短話の集りである。

この本を讀むとまことに興味深い。われ／＼は著者の識見、知識の凡ならざるを感じながら、充實した内容をもつものとして、面白く、楽しく讀んでゆくことが出来る。今日の經濟書は概して息苦しいものである。それも勿論事態の重大性はわれ／＼に異常の緊張を呼び起すのは當然であるが、時にはこのやうな書を読んで、經濟知識を廣く豊かに養ふことも有意義であらうと思ふ。

(昭和一四、一〇 麹町區霞ヶ關三ノ三)
ダイヤモンド社 四六判 四〇六頁 二・五〇)

木村 増太郎 著

支那事變の本質

經濟上より見たる

本書は教學局主催に係る徳島高等工業學校における木村博士の日本文化講義をその内容とするものである。

今次の支那事變が我國にとり容易ならぬ困難な事情の下に置かれてゐること、それは一方に於ては、支那社會組織の特殊性、殊に支那國民經濟の地方自治的な構造に基くものであり、他方我國自身の側における財政、經濟の直面してゐる憂

慮すべき事情をも考へ合はせなくてはならぬものであることを明にし、この困難に打勝つて、事業解決に邁進するため、日本全國民が支那並に日本の經濟財政をよく理解して、この重大時局に善處すべきことを要望してゐる憂國の言葉である。

今次の支那事變解決が容易なものでないことは、もとより我國民の誰でもが口にするとところであり、今更の如くこれを力説する必要はないかも知れない。しかし口では國難をいつてゐる國民も、今迄もさうだつたやうに、今でも廣東が落ち南寧を陥れたと聞くごとに、今度こそは蔣政權の没落だらうと、それとなく解決の日の近いことを思つてゐるものが少いとはいへないのではないか。矢張り國民は心の底では「高が支那だ」と見くびつた氣持をもつてゐることは覆へないと思ふのである。この見くびつた氣持が長期聖戦にどんなに恐ろしい邪魔になるかは多言を要しないであらう。そればかりではない、もつと悪いことは國民の内にこの事變を誰か解決して呉れるのを待つといふ氣持の少しでもあることである。

例へば「軍部がやつて呉れるのだらう」とか「えらい人達には見通しがついてゐるのだらう」といふやうな他人だのみの氣持をもつてゐるものがないとはいへない。經濟統制に不満の聲を放つものがあつたり、暗取引が盛んに行はれてゐる事

實を、われわれは見逃すわけには行かないのである。それは結局國民が支那事變の本質を充分認識せず、我國の經濟財政の事情を深く反省しないためだと思はれる。

本書は片々たる小冊子に過ぎないが、これ等の大切な點で國民の認識を深め、事變處理に邁進すべき覺悟と努力を促すに充分役立ち得るものと信ずる。一般國民、殊に青年、學生に奨める。

(昭和一四、一〇 神田區駿河臺三ノ一
目黒書店 新四六判 八〇頁 〇・三〇)

金原賢之助 著

日本戰時經濟政策

本書は現時戰時經濟に關する論文集である。各篇獨立に執筆されたものに順序體系を立て、大體に於て纏りのあるものにしてゐる。政策基調の問題より始めて物動計畫、物價對策、輸出振興、金融對策、増税、貯蓄、資金調整等各般の問題に就て網羅的に、一般的に解説し、論究したものである。

本書は時に應じて各問題を具體的に取上げ、解説し、批判を與へたもので、個々の問題に就てはよく盡されてゐるが、全體としての經濟政策の見通しなどは十分でない。且つ個々

の論文集であるから重複もあり、整理が十分に行届いてゐない憾みはあるが、堅實な論究として實際家にも好参考となるものである。

(昭和一三、一二、二三 京橋區京橋三ノ一
千倉書房 四六判 三六二頁 一・八〇)

佐藤 弘 著

經濟プロックと大陸

本書は經濟地理學的觀點から東亞經濟プロック體制における大陸の概念、世界における經濟プロックの趨勢を説き、次いで大陸の地理的意義、日滿支プロックの生成を論じ、更に本書の主要部をなす資源地邦品市場移住地としての大陸事情を解説し、終に日滿支プロックの結成並に將來に就て言及してゐる。

本書は經濟地理の見地から試みた東亞經濟プロック論であるから、政治經濟的觀點よりしたプロック經濟論とは多少趣を異にし、地理的色彩が濃厚な譯であるが、單に資源及經濟概観とか、綜覽とかいふ種類の書とは違つて首尾結構よく整つてをり、東亞經濟プロックの概念を與へるには具體的實際的で誠に適當したものである。

本書は文部省と東京帝大人講座銀杏會との共同主催にかゝる特設成人講座に於て講演したものを内容としてゐるので一般成人向の常識教養書として奨める次第である。

(昭和一四、五、三一 神田區駿河臺三ノ一〇
古今書院 四六判 二一八頁 一・二〇〇)

深井 英五 著

人物と思想

本書は前日銀總裁深井英五氏の論文、講演集である。それは著者の「今尙關心の存するもの、及び將來更に商量を續けたいと思ふものを抽出し、之を補修し、且つ新稿を加へた」ものであると云ふ。

題目の主なるものをあげて見れば「獨逸興國史上のフリードリヒ大王」「高橋是清の外債募集事蹟」「經濟學上に於けるラスキンの着想」「唯物史觀の批判」等である。

更に「貨幣經濟上の認識整理」「日本銀行の國債引受と財政經濟」等、これらは「構想集」の部とせられ、標題の所謂思想に相當するものであらう、所謂「人物」に當るところは卷末約五分の一位を占める「隨筆録」の部に收められてゐる父母を始め恩師、學友、友人知己を語る短い隨筆集である。

本書は眞に實のあるエッセイ集である、實業界にもこの人あるかと思はせる重厚篤實な論文隨筆集である。單に實務才腕の實業家でなく、學識深く堅實敦厚信頼すべき一人格であると思はれる。

一見時局に縁遠い論集のやうに思はれるかも知れないが、實はさにあらず恒久的意義を持つものと云ふべきであらう。中には「高橋是清の外債募集事蹟」「貨幣經濟上の認識整理」「日本銀行の國債引受と財政經濟」等時局に於て大きな意義を持つものも含まれてゐるのである。

右の意味で本書は正に推薦に値するものであらう。
(昭和一四、三 京橋區京橋三ノ四
日本評論社 四六判 四一三頁 二・〇〇)

鈴木 憲久 著

革新經濟講話

本書は現今の統制經濟の様相を解説したものである。而もそれは學說式的抽象論でなく、あくまで實情に即して、いはゞ通俗的な一つの物語に纏め、平易な大衆向の讀物にしようとして懇切詳細に説明した興味ある著述である。

本書は前後兩編に分れ、前編では歐洲大戰以後における經

濟統制への大勢を、歐洲諸國並に米國の實情について説き、且つその必然的理由を説明し、後篇では武漢攻略以後わが國の當面した謂ゆる長期建設、東亞新秩序の建成といふ新局面に對處すべき財政經濟の現状並に政策の動向を詳細に解説し將來の革新を見極めようとしてゐる。

本書はあくまでも現實の經濟情勢の解説書である。現實の經濟は如何にあるか、如何に動きつゝあるか將來如何に成り行かんとしつゝあるかといふことを國民一般に認識せしめ、それが必然的のものであり、決して一時的のものではなく、再び元に戻るものではないといふことを知らしめ、國民に對し新なる自覺を呼び起し、興亞の大業に邁進せしめんと意圖するものである。

本書は中等程度の學力あるものなら誰でも、小學校を了へた位の青年や中年の人々でさへも理解出來さうな經濟解説書として上乘なるものである。

(昭和一四、三、八 本郷區湯島二ノ五 鄰友社 四六判 四一六頁 二・〇〇〇)

波多野 鼎 著

統制經濟講話

本書は、支那事變の完遂、國防經濟の確立、東亞新秩序の建設等の必要上、微細に互つて行はれるに至つた我國の經濟統制の全貌を理解せしめ、國策への協力において誤りなきを期せんがために著はされたものであつて、内容は「序論」「生産力擴充問題」「輸入力増大問題」「物價統制」「公債消化政策」の五部門に分れ、極めて組織的に、具體的に、簡潔明快に説かれてゐる。

内容を體系的に整序し、各個の統制の全體的なつながりを明かにし乍ら解説を加へてゐる。また解説自體もできる限り理論的たらんことを期してゐる。これは他の類書に求められなかつた本書の一大特色であつて、我々は本書によつて、現下經濟統制の全貌を整序された形において、具體的に、明確に、理解把握することが出來、我々の雜然たる知識見解を整理統合することが出來る。これ本書を推す所以である。

本書は實に簡明な敘説になつてゐるから誰にも讀める。知識階級といはず、一般の人々でいくらか此の方面の本を讀み漁つてゐるものには、一層適切であらう。勿論初めて讀む人にも適當してゐる。

(昭和一四、一〇 京橋區京橋三ノ四 日本評論社 四六判 三〇八頁 一・六〇〇)

石渡 莊太郎 著

興亞經濟の前途

本書は石渡前藏相の現下の我國經濟財政事情に關する講演集である。

就任の辭、議會演説を始とし、諸會議、諸會合に於ける講演、ラヂオ放送講演等、全篇十一章から成つてゐる。講演の對象は政治家、行政官、財界人、一般大衆さては婦人、青年少年にまで及んで居る。題目は長期建設期に於ける日本經濟の實力、支那事變の經濟的特殊性、興亞經濟の前途、近代戦に於ける經濟の力、長期建設期の財政金融、銃後婦人の力、時局下に於ける青年の使命、銃後小國民は何を爲すべきか等國民各層に向つてあらゆる方面から現下の我國財政經濟の實情を理解せしめ、全國民の國策に對する協力を要望してゐる。

本書の説くところは實に平易明快であつて、誰れでも容易に理解することが出來る。その上人柄の然らしめる所が、柔い、温い、親しみの感情が全篇に湛へられて居り、讀む人にお話を聞いてゐるやうな親しい氣持を抱かせるのである。説くところは極めて平明なのであるが、問題は現下財政經

濟の全面に互つてゐるのであり、重要國策の核心は適確に與へられてゐるのである。このやうな本は財政經濟について無智な大衆にも理解せられる程度のもので、而も時局に最も必要な良書であると思はれる。

本書は國民大衆の齊しく必讀すべきものであるが、就中家庭婦人などに奨めて、この程度の理解を持たせ、國策に對する關心を強めさせたいものと思はれる。

(昭和一四、七 芝區田村町四ノ一八 今日の問題社 四六判 二二九頁 一・〇〇〇)

井藤 半彌 著

戰時財政講話

本書は「準戰時財政とは何か、戰時財政とはどういふものか、戦後に財政をどうして整理再建するか、これ等の諸問題について、一兩年の間に諸處で講演をしたが、その材料を整理統一し、また新資料をも加へてこゝに上梓することゝした」ものである。内容は「準戰時財政」「戰時財政」「戦後財政」の三章から成り、支那事變下の我が國現時財政を中心としたものではあるが、全篇到る所、日清、日露兩戰役、歐州大戰における歐米諸國の戰時及戦後事情を比較對照して説

述してゐる。

本書は謂ゆる大學擴張講義の典型とも見らるべきものであつて、正確・簡潔・平明の三拍子揃つた名著といはなければならぬ。戦時財政の一般を説いて、かくの如く平明に、懇切に、而も簡潔に、何等の豫備知識ない者にも理解し得るやうに、大衆向に出来てゐるものは稀有である。本書は我が國現時の戦時財政の本質・輪廓を一般人に理解せしめるための好箇の良著である。

本書は誰が讀んでも解る。青年にも、婦人にも理解される。一國財政のことなどは一般人には縁遠いことだといふやうな觀念が漠然と流れてゐる今日の状態にあつては、まづ以て青年にこのやうな書を讀まして現時の事變財政に對する認識を高めさせなければなるまい。

本書は戦時財政の説明ではあるが、單なる解説に止まるものではない。財政政策の方面にも説き及び、自説を強調してゐる所も多々あるのであるが、それは言ふまでもなく我が國戦時財政政策に低觸を來すものではなく、寧ろそれを完備せしめんとする方向にあるものである。「地方税改革の必要」を力説し「戦後財政」の章において戦時財政の繼續の必須を歐州戦後の經驗に徴して強調し、それを結論として與へてゐる所などは、國民の齊しく傾聴すべき卓説といはなければならぬ。

るものを取り出して、新に理想類型を再構成して示すのである。

いふまでもなく、民族文化は、その發展の相に於て他の文化と交流し、世界的性格を帯びるが、それは愈々民族の獨自性を鮮明にするもので、その發展はかゝる一般化と個性化の綜合調和の上にある。民族文化をその發展の相に於て考察しつゝ、然もその各段階に於て貫通する不易の民族精神を闡明するのが精神史學であると著者はいふ。

この精神史學的立場に立脚して、現今なほ顧みる價值があり、また顧みなければならぬと思はれる數種の世界性を有する民族文化及び我國文化を、主として神話と哲學と宗教との發展關係の視角から考察するのが本書の大様である。

その結語として「日本文化の發展」を歴史的に分割して考察し、現代日本文化の世界的世界の構造に達し、新しき日本が二十世紀以後の現代世界史の主題とならねばならぬことを説いて、日本の文化的自覺の必要なる所以を詳述してゐる。

本書は世界優秀民族の精神文化に對する一通りの概念を得ると共に、今日切實に要求されてゐる日本の課題に幾多の解決の示唆を與へるものであつて、今次事變の意義も説かれてゐる。本書は袖珍乍ら広く知識層に讀まるべき良書であると信ずる。

ないであらう。

(昭和一四、四、二〇 神田區神保町二ノ二)
巖松堂 四六判 一九二頁 一・五〇)

高山 岩男 著

文化類型學 (教養文庫 四)

本書は著者が昨年京都帝國大學に於て月曜講義として日本精神講座に講じたものを基礎として成つたものである。今日諸多の方面より要望されてゐる日本の民族的自覺に精神史的秩序を與へ、汎き世界的展望の下に、傳統文化の上に立つ新日本の世界的使命を明らかにせよとしようとしたものである。

此の意圖は文化類型學といふ學的根據に基いて爲される。即ち日本の民族的な文化精神を他の諸民族の文化精神に對決せしめ、此の冷靜なる比較研究を媒介として、その結果日本精神の自覺的認識に達するといふ徑路をとるのである。

著者に依れば、文化類型學は一定の構造を有する文化形態として、その構造は概念的に知られるものでなく、直觀的に了解せられるものとする。而して學としての文化類型學は、多様な文化的周邊を一々理解するのではなく、それらの中から特に本質的のもの、即ち最も明瞭に中心に構造づけられてゐる。

(昭和一四、二、二一 神田區神保町一ノ一)
弘文堂 三五判 二四九頁 一・五〇)

坂田 吉雄 著

町 人 (教養文庫 二八)

この本は町人の性格を社會史的に考察しようとしたもので、従つて階級的に見て町人の性格の最も顯著に現はれた徳川時代が主なる時代的背景となつて居る。この時代に在つては、何と云つても表面的には武士の絶對的勢力の認められた時代で、町人は社會階級上は固よりのこと道德的見地から迄一段と低い存在とされてゐた。所が徳川時代も中期を過ぎる頃から、社會經濟は漸く貨幣經濟時代に進展し、町人の經濟的實力は次第に武士階級を壓迫し遂に武士は商品經濟社會の經濟機構の前に完全に膝を屈せざるを得なくなるのである。このことは歴史的な必然的な動きと云つて了へばそれに違ひないのであるが、この必然的な動きを裏書するものとして著者は町人の性格の社會史的考察を企てゝゐるのである。

内容から云へば、最初に慶長から寛文に至る發生期の町人に就いて述べられてゐるが、云はゞ之は序論である。次は元祿時代の勃興期、次いで八代吉宗の緊縮政策による享保時代

の停滞期、之が過ぎると田沼時代、大御所時代の反動期となつて町人の全盛期となるのであるが、この全盛期に入つて、同じ町人でも商業都市として發達し、兩替屋、問屋、仲買等を主要な構成因子とする大阪と消費都市として發達し、御用商人、出入商人、職人等から成つてゐる江戸との町人の性格の相違が、面白く比較されてゐる。結局この新しい社會機構の前に、實質的に武士と町人との位置を轉倒せしめたものは、實に「町人道」を守つた町人そのものと、「武士道」を忘れた武士そのものに外ならないことを示してゐる。武士は吉宗の大名保護政策と、白河樂翁の旗本家人の保護政策と、この再度の政策に於て完全に大阪江戸の町人から輕蔑されて了つたのである。

右の様な次第で、この本は一般教養の書として知識人に推薦してよいものであるが、特に江戸時代の國文學を志す人には、その基礎的必讀の書として推薦し度い。

(昭和一四、一一、二二 神田區駿河臺 弘文堂 特小判 一五八頁・五〇)

東京日日新聞社編
大阪毎日新聞社編

支那人

本書は支那問題の權威者に夫々其の得意とする問題について執筆を煩はしたものを東京日日新聞社に於て一冊に纏めたものである。「家族制度と革命」(村上知行氏)は支那の家族制度と、其の中から發芽育成された「孝」の觀念の形式化、畸形化の状態を述べ、それが屢次の革命や革新運動を経て漸次崩壊しつゝある次第を語つてゐる。「美點、缺點」(村上知行)は「忍耐と頑固裏合せ」「忍耐から生れる寛大」「寛大墮落し無關心」「沈着變じて遲鈍」「知足」「狭さならぬ政治」性などを例示してゐる。「民族性と共產主義」(藤井晋三郎)は青幫、紅槍會等の如き自然的な組織には容易に紐結される支那人が、「理智や批判による目的意識に基く近代組織」には中々入れない「反組織性」を強く有ち中國共產黨も民衆の中に根を有たない一個の軍閥化に終りつゝあることを述べてゐる。「政治外交の性格」(吉岡文六)は支那の政治外交上に現はれた性格を具體的に且つ興味深く例示し、要するに支那は斷乎として行ひ、徹底的にやるといふ強靱なる性格の前に低頭し服従する事を強調してゐる。「民族性論」(小竹文夫)は「民族の性格なるものは其の民族が過去に作つた全歴史をそれ自身の中に表現せられてゐるものに外ならぬと思ふものであるから民族性の研究はもつと廣い觀點の上に立ち其の民族が作つた一切の文化について觀照すべきものと考へ

てゐる」と論じて、筆者の支那民族觀を披瀝して居る。「農村農民」(天野元之助、小竹文夫)の前半は「舊い封建的殘滓の濃い農村から、比較的近代化した所にあつてさへ、我が國には既に／＼に消滅したやうな姿が今もなほ支那農村中に嚴存すること」を實例を擧げて説き、其の後半は「支那の農村は傳統的な特殊の家族制度の下に祖先の廟と墓とを中心に自らの力に食み、自らの力による自足的經營を營み自分のことは自分で處理する代りに、租税も成るべく負擔せず、國家に對しても義務を負はず希ふところは子孫を繁殖させ自由安逸に生活を立て、ゆくことであつた。」次第を述べてゐる。「租界」(植田捷雄)は租界の來歴と現狀を語り「租界は正に帝國主義の遺物たるに外ならない租界はすでに支那人にとつて無用の長物となり終れることを悟るべきである」と斷じてゐる。

「女」(米内山庸夫)は支那女性の中々御し難きを述べ、「内輪から支那の社會をのぞいて見ると、支那ほど女の權力の強い國はないやうにも思はれる」として「女尊男卑」の内面生活を描いてゐる。「抗戰に現れた支那人」(田中香苗)は先づ「雜草的、原始生物的強靱さ」の支那人について語り、次に國民を抗戰に驅り立て、來た所のゲ、ベ、ウの蔭権力網に關して説明を與へてゐる。「支那の知識階級」(厚勝)「現代支那インテリの特徴」(岳廷棟)は支那インテリ階級の問題が今

後の支那並に日本にとつて如何に重大であるかを示唆してゐるのである。

以上は簡單乍ら本書内容の摘要を示したのであるが、要するに本書は複雑多變なりと稱せられる支那人を種々の角度より検討したものととして、我が一般國民をして支那人の何たるかを知らしめる上に寄與する所が多大であらう。

(昭和一四、九、麹町區有樂町一ノ一一 東京日日新聞社 四六判 一七九頁・一・三〇)

水野 武夫 著
日本食糧經濟論

本書は著者が、わが國民はあまりにも、食糧に恵まれてゐるが故に、食糧問題に對する認識と關心とが極めて乏しいことを遺憾とし、これが重要性を強調してその實際問題に協力せんとする熱意を引き起さんかために公にせられたもので、著者の研究の總論をなすものである。内容は配給論、配給機構論、市場論、價格論、日滿支食糧問題の各篇に分れ、食糧問題に關する殆ど一切の問題に觸れて、極めて平易、明快、率直に論述せられてゐる。米穀その他農産物に關する専門學術的研究又は時事論集の

類は他にも数々ある。併し乍ら本書の様に農産、畜産、水産等一切の食糧に亘つて食糧問題を全面的に取扱つたものは尠い、而も本書のやうに平明に時論風に、誰が讀んでも解る様に説かれ、一通りよく纏つてゐるものは他に殆ど見當らないのである。

本書は國民一般に讀まるべきものである。

(昭和一四、七 神田區一ツ橋二ノ三
高陽書院 四六判 三二九頁 一・八〇)

山田 節男 著

貧苦の人々を護りて

——方面委員は語る——

この本は貧と云ふ悲しむべき社會事業を描き出すと共に、之に對して今日如何なる救済策が施されつゝあるかの實狀を述べ、歐米諸國、就中この事業に最も古き歴史を有する英國の夫と比較して、我邦に於ける救済事業の未だ充分ならざる所を示し、政府並びに一般市民にこの事業に對する認識の改めらるべきことの必要を説いたものである。

著者は東大卒業後渡英、オックスフォードに學ぶこと五年、歸朝後直ちに江東のスラムに投じて方面事業に携はり、

今日東京市厚生局保護課に勤務、この方面の理論家であると共に實際方面にも豊かな體驗を有せらるる由

この本は江東方面に住む一老方面委員の體驗談と云ふ形式に依つて書かれてあるが、その書き方には若干の素人臭さまづさを認めない譯にはゆかない。然し所信を述ぶるに當つては極めて率直、街學的な嫌味は少なく、殊に貧困者への深い理解とこの事業に對する熱意とは敬服するの外はない。

(昭和一四、九 京橋區京橋三ノ四
日本評論社 四六判 二六三頁 一・五〇)

高島 巖 著

歌ふ子供たち

本書の著書高島巖氏は社會事業生活を始めてから既に十五ヶ年にもなつてゐるが同氏はこの間に於て、主として兒童保護を中心し、研究し、事業して來た。特に昭和八年兒童虐待防止法制定以後は、専ら被虐待兒童保護について努力した。

本書は同氏が講演し、座談し、記述したものの中から、被虐待兒童に關するものだけを新に書き下して、本問題に關す

る一般的理解に資するために出されたものである。

本書の内容は次の四つに區分される。

- 一、慮められる子供たち
- 二、歌ふ子供たち
- 三、保母たちへの手紙……そして子供たちへ
- 四、子供の家學園

本書は單なる主觀的な思ひ付き、兒童感、教育觀、社會事業觀でなくて、著者の長い體驗と客觀的な科學的實驗法とによつて産み出されたものであり、冷靜な批判的理論と止むに止まれぬ兒童愛の熱情に基く實踐とに貫かれてゐる。そして兒童保護、兒童教育、兒童の生活指導、保母の教養、兩親の再教育等の問題に對して多くの解決の方法を與へてゐる。子供を持つ兩親、特に母親、保母等に好適。

(昭和一四、一〇 芝區田村町一ノ三
萬里閣 四六判 三一〇頁 一・三〇)

長田 新 著

新 知 育 論

此の十數年教育界に於ては知育呪咀の聲が彌漫しこれに代はるに、情意の教育が強調せらるるに至り、勢の赴くところ

知育無視の傾向を馴致するに至つた。かゝる「歪曲されて迷妄の淵に沈みつゝある吾が國民教育の現狀に對して、私は默することが出来ないのである」と敢然筆をとり、所謂「愛國的教育學」の一部としてものされたものが本書である。

著者は云ふ

吾々に依れば明治五年學制頒布以來吾が國の教育においては道德重視の事實はあつても、知識が偏すと非難されるほど重んぜられた事實はない。

と喝破し

寧ろ人々は知育の成り難く及び難きをこれ嘆じて今日に及んでゐることこそ告白すべきではないだらうか

といひ、或は

事實到るところに見られる認識の不足乃至知識の缺乏は到底知育偏重の結果ではなくて、寧ろ反對に知育を輕視して、徒らに感情を昂揚し、動機のみを純粹を以て如何なる行動を正當視しようとする非合法主義の結果である。

と絶叫する。著者の新知育論は此處から出發し國民教育者に深き反省を求めて居る。敢て識者の一讀を奨めたい。

(昭和一四、三、二九 神田一ツ橋二ノ三
岩波書店 四六判 一七三頁 一・五〇)

天野 貞祐 著

學生に與ふる書 (岩波新書)

本書は様々の機縁によつて新聞雑誌などに發表されたもの二十三篇と本書の爲めに新しく書下した一篇とから成つて居る。書中或るものは必ずしも本書の意圖に沿ひ得るとは云ふ事が出来ないが、そして可成重複をして居る部分があるが、然し乍ら「學生諸君に與ふ」「學生、學友會、學生課」「讀書論」「有情論」「創造的的人生觀」などは著者の抱く思想と情熱とを最もよく表して居るすぐれたものである。

これ等の諸篇にあらはれた著者の思想は、著者の永い間の學究生活の間に蓄積された蘊蓄の凝つて發露したものである。そこには圓熟した著者の心境と道理への情熱、世紀の期待としての學生若人への信頼と温き思ひやりとが渾然として居るのを見る。而して著者の思想の根柢には、その構成要素としてカント哲學と西田哲學との二つを見出す事が出来る。

日本の將來が若き人達の、殊に學生の將來に負ふべき時、學生へ限りなき期待と信頼とをかけて、かうした學生をその人生の途上に勵ましその志操を堅くする事を目標とする本書の意圖は正當であらう。又著者自身の深き學識に根差した人

四六

格は、憫々として讀む者の胸をうち、よくその意圖を達成するに足るものである。學生は勿論のこと、一般知識階級、青年にも一讀を薦めたいと思ふ。

(昭和一四、八 神田一ツ橋二ノ三 岩波書店 新四六判 二三二頁・五〇)

金原 省吾 著

日本美育論

本協會ではさきに同じ著者の『東洋美學』、『東洋美術論叢』等の書を推薦したが、著者は東洋美術の専攻者である。本書はかゝる美學者としての著者の學識と經驗とから説き出された美術教育論である。美育などといふと教育の特殊部面であり、これまで情操教育とか情操の涵養とかいつて教育にお添物風の觀を呈して來たのであるが、著者の美育論はもつと深く人間生活の根本から出發してゐるのである。本書の第一章に「表現の文化」として論じてゐるところは、その美育の根據を論じたものである。こゝには著者の卓越した見解を見ないうわけには行かない。しかし、本書はそのやうな美育のいはゞ哲學論をやるものではなく、日本美術の歴史を説いてその精神を理解せしめ、それに準據して美術教育の目標や方法を

定めしめようとするものである。それ故第二章「日本の美術」の所が最も長く、茲では著者の豊富な蘊蓄が自在に斷片的に語られてゐるのである。その反面には抽象論に走り、讀者に意味の通じ難い部分がないでもない。本書の中に挿繪が一枚もないといふことがその感を深くしたものともしはれる。第三章は主として文學の方面より「日本美術の特質」として靜・寂を説き、第四章に美術教育の實際に就て概要論じてゐる。教育に従事する人々に奨める。

(昭和一四、二、二〇 神田區錦町一ノ二七 見文社 四六判 二〇四頁 一・五〇)

百田 宗治 著

綴方の世界

本書は「今日の子供の綴方」「日本の子供の作つた詩」「綴方・綴方教育・綴方教師」「家庭と綴方」等の諸篇に於て、綴方といふ小學校の教科が他の教科に比して子供の日常生活乃至は社會生活面に接觸する度合の濃いものであることを實證し、それを有効に指導してゆく精神と方法を探究したものである。著者は詩人で、あると同時に児童文學の研究家として著名である。今や全國の小學教師の間に「新しい綴方

教育」の運動が漲つてゐる時、この種の嚴正なる批判は最も必要であると思ふ。第二の國民の教育に従事する教師は勿論、父兄保護者にも、兒童の生活組織のために一讀を勧めたい。

(昭和一四、二、二五 牛込區矢來町七一 新潮社 四六判 三三二頁 一・七〇)

兒玉 九十 著

教育者としての母

本書は子供を持つ一般家庭婦人に與へる、家庭教育のための書である。著者が序文に記する如く、「一人でも多く、御國のためになる人物を養ひたい念願から、日々の體驗と實例とを基礎とし」、「知情意の統合的鍛錬を、日常生活の實踐の中に求めやうとすることを根本として」記述されたもので、世の兩親が日々の生活に於て子女の問題に關し出合ふ凡ゆる場合を豫想して、その場合に處すべき親の心得を親切に説いたものである。

第一章の「子供の虚榮心は如何にして矯正すべきか」といふ問題から、子供の嫉妬心、公德心、禮儀、友情、競走心、克己心、同情心、喧嘩、早熟、不良性、生さぬ仲等の諸問題

四七

を二十二章に分つて、一々實例を擧げながら、批判し、検討し、解決法や導き方を説いてゐる。中には「戦争中は如何に子供を教育したらよいか」「父親のない子供はどう教育するか」「教育上より見た子供の體位向上」等、時局下緊要の問題にも觸れてゐる。

本書に收むるものは悉く、昭和十年五月以來滿二ヶ年「主婦之友」誌上に連載されたもので世の母親に深い感銘を與へたものである。著者は、東京府下の明星中學校長にして、多年の體験からしぼりだされた言葉は、言々皆子女教育の上に適切な教訓となるものである。その説は偏狹固陋の見に墮することなく中正穩健にして多くの人に分るやうに特に注意されてゐる。

家庭教育上の具體的な問題を取上げて、両親にその際的心得を最も平易に説き示してゐる本書の如きは、一般の家庭婦人を益すること大なるものありと信ずる。

一般家庭婦人の讀物として推薦したい。

(昭和一四、二、一 神田區駿河臺一ノ六 主婦之友社)
(四六判 二八八頁 一・三〇)

伊 福 部 敬 子 著

若き母に贈る

本書は若き母を対象に、子供の生活、教育、道徳、躾の問題について、日常の思想や觀察を土臺として綿密に説き示したものである。

第一篇「若き父、若き母に語る」に於て兒童保育の問題に特別の注意を促し、第二篇「搖籃を揺りつゝ」に於て、搖籃時代の嬰兒の取扱について書き、第三篇「抱きつゝ育てつゝ」に於て、子供の心理と外的刺戟の關係を色々な場合を例示して記述し、第四篇「幼年時代の問題」に於ては子供の健康教育、宗教教育、經濟教育等の問題を取扱ひ、第五篇「少年時代の問題」に於ては家庭と兒童との關係、子供に對する母の態度等について突込んで提言してゐる。

兒童の諸問題に關し、從來教育者や心理學者によつて教示されたものは多く散見するが、かくの如く多方面の問題を、實際に子を持つ母の立場から説き且つ答へたものは少ない。本書の價値は、母の立場から語られてゐるところにあり、子供に對するよき理解が示されてゐるところにある。

全體に亘つて、隨筆風に書かれてゐるから、気軽に讀むことが出来る。外國の例など多く取入れてあつて知的に示唆する點が尠くない。

著者は有識なる一家庭婦人であつて、新聞雜誌などに最近擡頭した兒童文化研究家である。本書は家庭に子女をもつ中

流階級の若き母に與へるに適したものとして推薦する。

(昭和一四、七、二〇 小石川區西丸町九)
(教材社 四六判 三三七頁 一・四〇)

大 塚 好 著

工場生活と少年の教育

少年を工場に仕上げる構へ

本書の内容は三部よりなり、第一部は職業指導講習會に於ける講話の速記である。工場は高等小學校卒業生を、どんな心構へで待ち、また待つべきか、従つて高等小學校卒業生はどんな考へで工場へ這入つて行くべきか、どんな風に躾けられるか、といふ趣旨の下に、工場生活、工場道徳、福利施設、工場教育等の問題を懇切に説いてゐる。

第二部は、新しい教育方法である「コーポレイティブ・システム」について米國の實狀を紹介してゐるが、學校と學校外の會社・銀行・工場が相提携して、相互に利用し合ひ乍ら教育を行ふといふこの制度が、工場事業場技能者養成令及び青年學校令によつて、必然的に工場を教育的に組織化せざるを得ない我が國の工場に對して、何等かの示唆を與へるものであることを述べ、最後にそれと關聯して川崎東山學校の教

育法を詳述してゐる。

第三部は、工場教育關係の法規を集めてあるが、これは工場、工場經營者並に教育者のための良書として推薦したい。

(昭和一四、一〇 神田區錦町一ノ六)
(錦正社 四六判 三一六頁 一・六〇)

朝 日 新 聞 社 編

滿蒙開拓青少年義勇軍

友邦滿洲國は建國以來五族協和、王道樂土建設の大理想の下に、着々として堅實な發展振りを示してゐるが、東亞の盟主としてこの建業に協力するはわが民族の責務といふべきである。

政府はこゝに昭和十三年滿蒙開拓青少年義勇軍制度を創設し、純眞剛健なる青少年を大陸へ進出せしめることとしたが、爾來一年にして、今や二萬を突破する青少年が建設の勞苦と闘ひつつある。本書はこの義勇軍が内地並に現地の訓練所に於て如何に教育され、訓練されつゝあるかを平明に述べたもので、豊富な挿入寫眞と共に義勇軍の全貌を傳へたものである。

(昭和四一四、五、五、麹町區有樂町、東京)
朝日新聞社 四六判 二〇八頁・五〇

朝比奈 策太郎 著

若きドイツ

昭和十一年の幕當時伯林駐劄帝國大使であつた武者小路子を通し、ヒットラー・ユーゲンツト當局よりわが青少年代表を獨逸に招待したいと云ふ申入れがあり、之に對しわが國に於ても亦獨逸側を招待し、相互に交際訪問をなすことに決定して、昨年その實現をみた。この壯舉に参加し、五月二十七日新緑の祖國を後にして一路訪獨の旅にのぼり、以來約半歳に亘つて、獨逸各地を視察し、盟邦獨逸の眞の姿を把握し、兩國親善の楔を一層堅くしたのは一行三十名よりなる大日本青少年ドイツ派遣團であつた。そして團長として一行を引率されたのが本書の著者である。

本書はその滞獨中に於ける見聞、體驗を記したもので、一行が入獨以來いかなる行程を取つたか、或は何を感じたか、幅達平明な文章で綴られてゐる。ヒットラー・ユーゲンツトに關する圖書は既に數冊刊行されてゐるので、その青少年團の紹介は必ずしも珍らしくはないが、流石に、親しく之と

五〇

接してこれだけあつて、いかにも彼等の姿が生々と躍動して描かれてゐるのは類書に見られないところである。

一行はまづ白耳義を経て入獨し、ケルン、マゲデブルクを経て伯林に入り、更に北行してハンブルクに至り、それよりバルチック海沿岸の北方獨逸より海上を経て東プロシヤを訪問、これよりシレジア、チューリンゲン地方を視察しニュルンベルクに於て青少年團の大會に参加した。この大會には伊太利、ルマニア、西班牙、イラク等の各國の青少年代表が参列、わが代表一行の規律正しい態度は非常な評判を得たさうである。尙一行は舊埃太利を視察し歸國の途についたのである。

わが代表一行について知るには本書は唯一の書であり、同時に單なる記述的なヒットラー・ユーゲンツトの紹介ではなく、生々と活動してゐる彼等について知るには本書は優れたものである。小學卒業程度。

(昭和四一四、三、一八 日本橋區通二ノ二
エンバイヤビル 羽田書店 四六判 一・二〇)

柳田 國男 著

木綿以前の事

池崎 忠孝 著

英國の 新嘉坡根據地 極東作戦

本書は英國の極東作戦の根據地シンガポールに就いて種々の角度から考察を試みたものであつて、全部で十五章から成つてゐる。先づ第一章の「大戰前後の新嘉坡」に於ては「最近のシンガポールはまるで大戰の前夜でもあるかのやうな状態に置かれてゐるらしい」として其の慌しい戦争準備ぶりを述べ、第二章「古都の復興」は今から凡そ八百年前に繁榮した *Singapura* (獅子の島) を、西暦一八一九年に偉傑ラッフルスが占領して、其處に英領植民地たるシンガポールを建設するに至つた歴史の變遷を語り、第三章「新嘉坡論争」は今日迄過去二十ヶ年に亘る英國での所謂「新嘉坡論争」の経緯を説いてゐる。第四章「計畫と實行」では一九二三年にシンガポール根據地案が豫算總額一千五百萬磅、十ヶ年繼續事業として議會を通過し、愈々其れが翌年から實行に移されたのだから、最初の豫定通りで行けば遅くとも一九三五年迄には出來上る筈の處今日に於てさへ尙最後の仕上げの残つてゐるといふ有様は其の間に屢々豫定計畫が變更された爲であると解釋すべきであると述べてゐる。第五章「地理的概説」第

わが國の衣食住の昔からの變遷と、これに伴ふ婦女の家族の中に於ける位地の變化等をテーマとして之を民俗學的な立場から、方言、俳句、或は古い記録等を以て考證したものであるが、組織的にかうした知識を纏めて書いたものでなく、例の柳田國男一流の名調子で、隨筆風に書いたものである。「木綿以前の事」「何を着て居たか」「昔風と當世風」「働く人の着物」「國民服の問題」等の諸篇では主として衣服のことを扱ひ、木綿が肌ざはりがよく、染め易く、女性の身のこなしを美しく見せるが故に麻に代つてわが國民に愛好されたこと、現在の着物は昔の式服が簡略北されたものであつて新時代の生活に向かない故に改良されなくてはならぬが、然し改良も目先きを追ふのみでは愚かであり、最も我々に相應した生活の發見まで行かなくてはならぬことなどを論じてゐる。「餅と臼と摺鉢」「圍爐裡談」「酒の飯みやうの變遷」は飲食物の變遷を方言で考證したもので、飲食物の作り方の變化につれて、主婦の家族に於ける權威が變遷したことをあげ、「女性史學史」はその續きといふべきもので、主婦の位地、嫁の位地の變化等をあげて、現在の主婦の進路を示してゐる。

(昭和四一四、五、一七 芝區二本榎町二
創元社 四六判 四一頁 一・五〇)

五一

場合に著者は必ず夫々の世界的權威者の所論を一應吟味して自己の論陣を張つてゐることが特色であらう。この意味に於て本書は時節柄一般國民に薦めていゝ良書であると信ずる。

(昭和一四、七 日黒區下目黒二ノ三七二) 第一出版社 四六判 二八六頁 一・六〇)

内務省計畫局 編

國民防空讀本

國民防空の必要、組織方法の全面に亘り正確平易に説明したるもの、内容目次々の如し。

「防空と國民」「防空の組織」「監視、通信、警報」「燈火管制」「焼夷彈と自衛」「消防木造家屋の防火處理」「毒瓦斯の防護」「破壊用爆彈の威力」「防護室と防空壕」「空襲時の避難と救護」「都市防空的構築」「結言」

結言に於て「防空に對する國民全般の心構への確定の必要」「防空に關する正確なる認識の會得」「周到なる計畫の設定と必要なる設備資材の充實」「眞摯なる訓練」の四項をあげて居るが、本書は之に對して確實なる知識を盛つて居る。國民はこれによつて徹底的に防空觀念及びその施設に對する認識を得べきであらう。

六章「錨地と要塞」第七章「海陸軍の内容」等はシンガポールの現状報告である。第八章「背後地の價値」ではシンガポール根據地が有つ缺點としての四點が擧げられてゐる。(一、其の背後地に工業生産地なきこと、二、附近に適當な副根據地なきこと、三、根據地の所在地たるジョホール海峽が狹隘に過ぎること、四、餘りに氣候風土が不良なること)、第九章「戦時の艦隊勢力」では「英帝國が心ひそかに理想的勢力だと考へてゐる主力艦五隻標準の艦隊を集中するのでさへ恐らく困難であらう」と冒頭して其の論據を展開してゐる。第十章「防禦性と脆弱性」ではシンガポール根據地の防禦性と脆弱性に關する權威者の所論を紹介し「シンガポールの不可侵性と難攻不落」を信じない著者の所見を吐露してゐる。第十一章「英米共同の觀念」が段々と現實化されてゐる次第を説き、第十二章「香港の運命」に於ては「香港は今や完全に我が勢力圏内に包まれてゐる」と述べて、從來シンガポールの前進根據地乃至は副根據地たりし香港の將來の運命の暗さを指摘してゐる。第十三章の「協同作戰の實際」第十四章「日本の不敗性」、第十五章「決意と實行」を強調して結論してゐるのである。

之を要するに本書はシンガポール根據地の有つ具體的の問題に關して夫々具體的の解答を與へてゐること、而して其の用語に多少難解なものがあるが總ルビ付であるから、何人にも讀め理解も出来るであらう。

(昭和一四、三 龜町區内務省内 大日本防空協會 四六判 二一六頁 一・五〇)

野間 恒 著

劍道讀本

劍道は初めは刀劍を使用して戰闘する技術を練磨し、勝利を得るにあつたが、歴史的發達の結果、武士道と密接に關係し、武士道的人格修養の道となつた。即ち武術としての本來の目的は第二次的となり、人格陶冶の目的が表面に出たものである。

劍道の極意奥儀は直觀認識すべきものであり言語文章を以ては表現し得ないとされた。本書は之を現代語を以て平易に傳へたものであるが、五倫の書その他に例を引き、慎重を期してゐる。今や國民精神の涵養、武士道精神の養成を最も必要とする時、この良書は成人にとつても、學生にとつても優れたる修養書であらう。

(昭和一三、四、二三 小石川區香羽町三ノ一九) 大日本雄辯會講談社 菊倍判 二四八頁 二・〇〇)

本間 順治 著

日本刀 (岩波新書)

この本は日本刀に關して一應の知識を與ふるもので、極めて平易な記述に依つて初心者間に扱はれてゐる内容は十四の項目に細分されてあるが、大體之を四つにまとめて考へることが出来る。先づ第一の部とも稱すべき處は歴史、特色、鍛錬、研磨と云ふ初めの四つで、こゝでは専ら日本刀の基礎的な知識が與へられてゐる。次は用語解説、鑑定、取扱と保存と云ふ三つの項目で、用語解説と云ふのは古來刀劍界で使用され作つた日本刀の各部分の名稱、その他の術語の解説で、鑑定と云ふのは「いかなる刀工の作であるかを見定めること」と云ふ通念を主とし、「切味其他實用上の性能を見分けること」「作風の吉凶を判斷すること」等の意味の鑑定は從としてある。次は國寶の刀劍、名物、参考書と云ふ三つの項目であるが、前の部分が實際刀を手にした折の問題が扱はれて居たのに對し、この部分でなされるゝ所は専ら書誌的のものである。最後は刀劍に關する隨筆とも云ふべきものを集めた部分で「正宗抹殺論に就て」「村正は妖刀か」「軍刀の選び方」「武將と刀」の四篇が收められてゐる。いづれも輕い讀

物である。

今事變勃發以來、國民の日本刀への關心が可也一般化された折柄、本書の如き平易な然も総合的な入門書を得たことはまことに喜ぶ可きことである。日本刀の常識書として或は研究入門の手引書として一般に薦めて可なるものである。著者は文部省國寶調査室囑託である。

この本を讀んで最も強く感ずる處は所謂「食ひ足りない」

五四

といふ感である。多少でも刀劍に對して關心を有する人々には、本書はいさゝか常識的過ぎるのではないかと思はれる。然し一冊の小冊子に刀劍に關する各方面の知識をこれだけ手ぎわよく平易に記述したのも亦少いと思ふ。その意味で刀劍に關して最初に讀むものとして良い本であると思はれる。

(昭和一四、五、三〇 神田區一ツ橋二ノ三)
岩波書店 特小判 二二五頁・五〇

第四 自然科學・醫學

橋田 邦彦 著

行としての科學

曩に協會に於て紹介した「空月集」は隨筆集であつたが、これは左の六つの講演を集めたものである。

「行としての科學」は教學局主催の日本文化研究講習會自然科學科第一回、「自然科學者の態度」はその第二回講演で

對象は高等專門學校學生主事並に教授、「道としての教育」は愛知縣國民精神文化講習會に於けるもので對象は小中學校の教師、「自然の觀方」はある專門學校學生、「日本文化としての科學」は東京高等學校の學生、「醫道」は日本大學醫學會での講演である。

對象の相違によつて表現は異つて居るが、内容は整て同巧異曲、科學、文化、教育の根柢たるべき「行」或は「道」についての著者の根強い體驗を語られたものである。

しからば著者のかゝる主張及び體驗は何處から生れ來つたものであらうか。これに對して著者は、

さて私がさういふ考へを得來つたのは何によつてであるかと申しますと、この書物一巻であります。又私の申上げることこの書物以外に何物もないのであります。是は道元禪師(筆者註)日本曹洞宗の開祖)の書き遺された『正法眼藏』といふものであります。……實際私自身は『正法眼藏』に依つて自然科學者としての立場を獲得し得たのであります。

と述べ隨處に其の言葉を引用し、徹底した物の見方を教へられて居る。敢へて科學と限らず、かゝる物の見方に親しむことは、すべての人々に要求されてよいと確信し、江湖に推す所以である。

(昭和一四、三、二四 神田區一ツ橋二ノ三)
岩波書店 四六判 三三八頁 二・〇〇

石本巳四雄 著

科學への道

科學者は高き理想に生きるもので少くとも日本の現狀に於いては決して生活には恵まれるものではない。

筆者は地震學界の世界的權威であり、現に第一線の陣頭に

立つ科學者である。二十有餘年の體驗、思索より出る言々句々は既に科學者たるものにも、その入門者にも科學なる道の正道を傳へ、並々ならぬ覺悟を教へ或は反省の示唆を與へ、激勵の鞭ともなり、或は首途を鼓舞する壯行の辭ともならう。主として科學者たらんとする若き學徒に薦めたい。内容は學者と自然、自然と研究、天才論並に附録として地震の原因に就いてに分かれ、學者と自然に於ては

「科學者の仕事は自然現象中より事實を摘出するのみでなく、更に之を系統づけることであるが日本に於ては後の場合が等閑に附されてゐる傾向がある」となし、科學者の自然を研究する態度につきては或は愉悅を感ずるからとか、一種の遊戯であるとか云ふものもあるが著書はこれを本能的所作と斷じ、決して功利的立場から自然研究に臨むべきでないことを戒めてゐる。

次に自然と研究に於ては科學者の思想を論じ公正不偏の思想を根柢とし研究を進むべきであるとなし科學者の理性についても説いてゐる。

又自然研究には外國語が必要であるが決して偏すべきではなく、ゲルマン民族文化の演繹的方法とラテン民族文化の獨創性とを適當に學ぶ必要があるとなしてゐる。

五五

辻 二郎 著

單 色 燈

此書は昭和十一年より十四年に至る間に新聞、雑誌に依頼せられて著者が寄稿せるもの、集積である。莊嚴な建築物もその一つ／＼の要素を取れば總て寄木である。統一した頭腦さへあれば、拙劣な和洋折衷の様に、其部分部分がチグハグな感を抱かしめる様なことはない。此書は其一例である。

第一部の展望窓は著者の見た最近の世間である。その廣さは滿支より西歐諸國に擴がる、此處に見る世間は決して著者の云ふ様な單色燈の光りは無く、白晝の事物を夕に觀る程の偏りしか持たぬ。従つて誰にでも親しめる丈のゆとりを持つ。見えぬ裏迄を勝手な主觀を交へて洞察しようとする事は無く、反つて整頓と緻密とを具へた觀察眼を十分に働かせてゐると云ふ點は確實なものである。

第二のコンパクトは學會の統一、増産と變災等の好短篇をも含み、誰にも嘯みしめられる適當の硬さである。

第三の單色燈でもそれ程強い方向性は持たぬ。科學者では

あるが、科學者の中では第一流の經綸の才を持つ著者の執つた立場は飛抜けては居ぬが實際に即してゐる。研究と製作、産業擴充と物理、工業と研究、文化と技術等は普遍性のある著者の思想を傳へるもので、文明國に於ける科學者の執る可き道又彼等と遇す可き方法、一國の文化に對する科學研究の價值等に就て述べ、又學者としての科學者、一般營利に携はる商工業家、其等の中間にある技術者相互間の關係は如何にす可きかを、廣く例を先進西歐諸國に執つて平易に而も確實に述べてゐる。眞面目な讀者階級なら、總ての職業に携はる人々に讀んで頂きたい。

文は流麗とは云ひ難いが平易でソツが無い。尙ほ誤字、誤植の皆無と云つてよい程の完璧さ、萬國博覽會の寫眞版の美しさ(但し、著者の作と思はれる寫眞はカットに用ひてはあつるが眼を樂しませる程も無く、無意味であり、なくもがなと思ふ。)挿入凸版の美しさは此種の書籍としては第一のものである。

更に單色燈の部に含まれる世界一周の乗物は其の位置から云つて不適當では無いかと思ふ。

(昭和四、一〇 神田區一ツ橋二ノ三)
岩波書店 四六判 三二四頁 一・八〇)

板澤 武雄 著

杉田玄白の蘭學事始

從來一般人の關心に餘りのぼらなかつたと思はれる日本科學史の方面に近時良書が漸次あらはれて來たのは喜ばしい事である。森銑三氏の「おらんだ正月」(富山房百科文庫)、富成喜馬平氏の「日本科學史要」(教養文庫)などは概觀的のものとして良書と思はれるが、東大助教板澤氏の新著「杉田玄白の蘭學事始」も最近のすぐれた書である。

本書は昨十四年の夏、J O A K から放送された連續講演の原稿に手を加へたもので、「ラヂオ新書5」として刊行されたものであるが、我國の科學史上、又思想史上甚だ注目すべき「蘭學事始」の解題書であると共に、著者が特に深い研究を有する「蘭學」そのものの、歴史的、思想的解説とも言ふべきである。「蘭學事始」自身がかうした方面に十分意を拂つた名著である事は言ふ迄もないが、板澤氏は之が内容を追ひつつ之が解釋説明に詳しい筆を加へてゐる。しかも最近史學界の進歩による新見解新解釋も少くないやうである。支那文化の攝取と西洋文化の攝取の様相の相違とか、蘭學發達の原因、或は阿蘭陀通詞の横文學習なども、亦玄白以前の西洋學、玄

白の先輩同僚の事蹟等を経て、千住小塚原の腑分、及び「解體新書」の翻譯刊行の苦心及び後世への感化影響など、一般人には稍親しみ難い原文を平易簡明に。堅苦しかるべき内容を退屈せずに讀ませしめる。「解體新書」翻譯の苦心をよんで感激したといふ福澤諭吉の言も首肯し得るであらう。新しき日本文化建設と西洋思潮の攝取が重要な一問題である今日、ひとり科學史、醫學史方面に興味を有する人のみならず、一般の知識階級に推奨し得るものである。

附録に「日本民族の海外發展」があり、之亦時局的に言つても興味深く有益な事柄を平明に述べてゐる。

(昭和一五、一、二五 芝區田村町一 テキストビル内)
日本放送出版協會 特小判 附録共一九八頁 五〇)

鏡 淵 稔 著

趣味の世界數學史物語

題名の通り數學史を趣味的に扱つたもので、「むつかしいもの」「いやなもの」と云ふ數學へ對する學生の一般概念を打ち破らうとしたものである。著者は特に小學校の兒童目あてに本を執筆されたやうに「はしがき」の中に云つて居られるが、小學生にはやはり少しむつかしいのではないかと思は

れる。小學生へならば先生か父兄が讀んで、一應くだいて話してやると云ふ様なものではないかと思ふ。寧ろ本書の様なものには中等學生にすゝめて適當と思はれる。内容はギリシヤ時代からニュートン、ライブニッツの頃まで、それに日本の數學者も加へて歴史的に、挿話を交へて面白く數學の發達を述べたものである。

(昭和一四、四、三〇 本郷區元町二ノ二)
啓文社 四六判 三四八頁 二・〇〇

ドウ・ブロイ 著
河野 與一 譯

物質と光 (上・下)

此書は一般向の科學叢書としては難解である。然し、一般人に現代物理學の抽象的ではあるが、明確なる概念を與へるには此書をおいて他に求む可くない。

ニウトン・アインスタインの名を知る一般知識人が此處に新に波動力學の創始者ドウ・ブロイの名によつて現代量子物理學の概要を知ることが非常な幸運と思ふ。

一般知識人が稍々難解な倫理哲學の書を愛好する一方、斯様な自然科學の著作を顧みないと云ふのはそれ丈で不都合で

ある。そう云ふ人達には此書の著者の哲學的な思想丈でも知らせてやりたい。さうすれば必ず此著者に親しみを覚え、從つて更に現代物理學の理解者になるであらうと信ずる。他の文明國人に比較して、科學的(特に自然科學的)思想の劣つてゐる日本人の中、少くとも一般知識人に丈は是非讀んで貰いたいと思ふ。

譯語の正確(譯者は佛文學者と聞く)活字の鮮明、價格の低廉なることは更に此書の持つ卓越點であると思ふ。

(昭和一四、七 神田區一ツ橋二ノ三 岩波書店)
新四六判 上二〇七頁 下一八八頁 各・五〇

荒木 俊馬 著

天文と宇宙

本書は昭和十二年七月に本協會推薦圖書となつた物の改訂版で、著者は京都帝大助教物理學博士荒木俊馬氏である。本書は著者の長い間の通俗論文と講演の原稿から撰擇して幾分系統的に配列したもので、一書を著す爲に書き下したものであるが、重複した箇所が處々にある。又長い間の原稿の集成である爲、前版には古い材料が相當あつた様であるが、今回此等の缺點は出来るだけ改訂した積りであると著者は序文に

述べて居る。

主なる改訂は古い題材と思はれる「學藝復興と近世天文學の黎明」「現代の宇宙觀」及び「星辰進化の問題」を削除してその代りに「西洋天文學史」「星辰スペクトル」及び「白色惑星と星辰の末路」を挿入し、更に卷末に附録としてロソツプ島皆覽他四篇の隨筆が附加され、前版よりも約百五十頁程増加されてゐる。

本書の内容は著者の目的が實際と云ふ事よりも、天文同好の士の爲に著した故、單に知識として興味有るものが多く、天文學全般に互つてはゐない。天文學史、宇宙構造論に多くのスペースを取り、吾々として一應は知つて置きたいと思ふ地球、天文器械及び太陽系の個々の惑星に就いての説明が殆んど無く、興味ある火星に就いての説明位有つても良いと思はれる。本書は天文學全般に互つて書かれてはゐないが、何等豫備知識を有さない讀者と雖も平易に興味深く説かれた本書に依り、宇宙に對する新しい目を開く事が出来ると思はれる。上品な趣味の養成及び教養向きとして一般の人に推薦したい。

(昭和一四、一〇 芝區南佐久間町二ノ四)
恒星社 四六判 四九三頁 三・八〇

宇田 道隆 著

海 (岩波新書)

我れ等は海の子と唄ひ、海國日本を誇號する人々が海の色青きは青空の映れるものと思ひ潮流と海流とを混合し、日常食事にのぼる魚は何處で何うして獲られたか知らないとしたら眞に遺憾である。海を征服するものは世界の覇者たらんと云はれる如く實に海外發展は海の理解に始まると云つても過言ではあるまい、本書は一般教養向きに書かれた海の通俗書であつて決して俗惡な淺薄なものではない。内容は寧ろ海と水産とも稱したい位に水産に關聯して海洋學の智識が盛られ、吾々の實際生活に觸れた點が多い嘗つて出版された邦文の海の書としては最も新しい、最も手頃な教養向きの良書として推薦して憚らない。

著者は東大の理論物理を出て國立水産試驗場に奉職され、目下海洋調査の指導者として令名を唱はれ、最近潮流の研究により學位を得られた篤學者である。

(昭和一四、五、三〇 神田區一ツ橋二ノ三)
岩波書店 四六判 二〇六頁 五〇

中谷 宇吉郎 著

雷 (岩波新書)

著者は北海道帝大理學部教授中谷宇吉郎博士である。

『複雑で研究すればする程分らない事が澤山出て来る。雷及び雷光の現象に關して澤山の外國の學者の研究を紹介しながら自然現象の複雑さと奥行さとを日常自然科學に餘り關係の無い人達に幾分でも分つて貰はうと思つて書いて見た』と著者の序文に有る如く、此の書物は雷の現象に對する從來の科學的研究の發達に關して述べながら、科學的研究態度とは如何なるものであるかを述べてゐる。

内容は四つに大別されてゐる。即ち第一話は雷の歴史及び避雷針の話で、この中には雷に關する古代の人が雷に關して如何なる考へを有してゐたかを述べ、次に避雷針の發明發達を興味ある事實を挙げながら述べ、第二話は色々な電光の話でこの章と前の第一話とは雷に就いて、判り易く興味深く隨筆風に記述されてゐる。

第三話の電光の性質は著者自らかつて直接研究に携つてゐたものだけ、電光の特異の形態成長に關して詳細に記せられてゐる。第四話は雷雲の電気で雷のあの巨大なエネルギーが

六〇

如何にして出来るかに就いて述べられてゐる。第三話、第四話は電光の性質、雷雲の電氣と云ふ甚だ複雑なる問題にも關はず、其の眞實性を曲げずに平易に讀み易く書かれてゐる。此の書物は著者がこの方面の研究に従事してゐた事があるだけ、收録が豊富で、内容に厚みがある。日常生活と關係の深い雷に就いて一應の理解を有してゐる事は望ましいことであるし、又科學的研究態度を知る事も出来る故一般教養向として推薦したい。

(昭和四、九 神田區一ツ橋二ノ三)
岩波書店 三五判 一九九頁・五〇)

アレキシス・カレル 著

櫻 澤 如 一 譯

人 間 (この未知なるもの)

「譯者の言葉」によれば原著者アレキシス・カレルはニューヨークのロックフェラー醫學研究所に在り、元來フランス人で今はアメリカに歸化してをり、一九二二年ノーベル賞を貰つた世界的碩學である。本書の内容は、第一章「人間とは何か、それを知らねばならないわけ」、第二章「人間の科學」、第三章「肉體と生理的活動」、第四章「精神的活動」、第五章

「内なる時間」、第六章「適應の機能」、第七章「個人」、第八章「人間の再建」の八章から成る。本書は生物學の大學者が汎く一般の人に讀ませるために、極めて打融けて噛み砕いて標題の副題にあるやうに「この未知なるもの」人間に就て、これまでの西洋の科學研究の及ばざるところを語り、人間の綜合的研究によつて人間の眞相を究め、現代社會の不合理な生活機構によつて歪められ、不健全化せられてゐる人間の改善、眞の人間の再建に努力しなければならぬことを語り聞かせたものである。例へていへば、非常な明知に輝き人間愛の熱情を胸深く藏してゐる長老が、爐端にあつて諄々と説き聞かせる豊富な、滋味溢れるばかりの科學物語といつた趣のものである。而もその物語は單なる科學の物語に止まるものではない。人間の正しい健全な生活を熱望し、その可能を信じて説いてゐるのである。だからこの書は科學書であると同時に、文明批評の書であり、また人間教育の書でもある。本書で説いてゐる内容の要旨に就て簡単に述べて見れば、西洋の科學特に生理學や心理學等の輝かしい研究の成果によるも、人間は未知である。科學的方法による分析的研究所は眞に人間を究めることは出来ない——併しかうはいつても著者は科學的方法を斥け、科學研究に望を斷つといふのではない。「カレル博士は科學的分析的、部分的、顯微鏡的研究に偏す

るのを訂正しようと努力してゐるやうである。然るに精神的、全體的、直觀的考察は數千年前に東洋の聖人達によつて略々完成されてゐる」と譯者のいふことは早計であると思はれる。經濟學も法律學も人間生活の眞實を究めてゐない。あらゆる科學が眞に人間を知り、人間生活の健全を所期して共同協力し、綜合的成果をあげるやうに努力すべきである。著者はこれがために「人間研究所」といふやうなものを考へこゝにあらゆる人間研究の科學を集め、一人の學者がそれらの綜合知識を獲得するといふやうな一見奇矯の説を唱へてゐるのである。併しそれら對策的なことはそれほど重要なことゝは思はれない。重要なのは、現在における人間の狀態であり、その研究狀態である。著者の教へるところは、人間の完全に調和した生活である。肉體・精神の平衡、調和を保ち、安らかな精神と而も生々潑刺たる生活々動といふことにある。著者は教育を重視する。遺傳學の原理に従ひながらも人間の素質・能力の涵養、育成を否定しないのである。それらのことは特に第七章「個人」の章に詳しい。社會生活の機構と人間心身との相關情況に就ては、第六章の「適應の機能」に詳しいのであるが、恐らくこゝらが一般の人には最も興味のある、且つ文明批評的色調の濃厚な部分であらう。

譯筆は極めて簡明で讀み易く、一見煩雜な、無味な著作に

見えるのであるが、読み出すと非常に解り易く、面白い。高く、奥床しい思想的人間の著作、最上の意味の通俗書として推奨に値する。

(昭和一三、八、五 神田區一ツ橋二ノ三)
岩波書店 四六判 四〇二頁 一・六〇)

厚生省保険院 編

結核は必ず癒る

恐るべき國民病結核の豫防撲滅は常時非常時を問はず國家緊急事項の一に屬する。厚生省が創設匆々に際して其の對策の一として「結核は必ず癒る」の實話又は物語を懸賞募集したことは誠に機宜を得た措置といふべきである。

本書はかくて集められた二千六百四十篇より審査員の慎重なる審査を経て採用された二等六篇、三等二十四篇の収録である。従つて本書は悲痛なる決意と健實なる実行力とを以て結核を克服した人々の貴重なる體驗録であり、同病者にとつ

ての福音書である。

しかし序にも「結核は必ず癒るといふ意味は全部の結核が悉く癒ると言ふ意味ではなく本書掲載のやうな條件を備へれば必ず癒るといふことなのである」とあるやうに百の療養書よりも一の實行こそ大切である。

世上結核の書は枚舉に遑ない。しかしその多くは偏狹な治療書、獨斷的な體驗記、甚だしきは本さへ讀めば治癒するかの如き欺瞞書もすくなくはない。かゝる際に多方面の體驗と、嚴密なる審査の下に採録された本書の出現を見たことは誠によろこぶべきことである。

本書は常に病者の爲めの書ではなくて看護者も一般民衆も一讀すべき書と信ずる。蓋し結核は限らず病者に理解を持ちこれに善處することは必要であるが、結核の如き長期に亘る疾患に於ては一層必要であるから。

總ルビ付であるから小學校卒業以上の人々には理解出来る

(昭和一四、三、四 牛込區矢來町七一)
新潮社 四六判 四〇四頁 一・〇〇)

第五 工 學 ・ 産 業

宮本 武之輔 著

新技術者精神

著者は興亞院技術部長である。本書は、著者が一高時代に校内の煙突から墜落して瀕死の重傷を負ひ、奇蹟的に一命を取止めた體驗によつて、滅私奉公といふ眞に日本人の道念に目覺め、その信念に基いて興亞の大業に協力すべき技術者は如何なる心構であらねばならないかを諄々と説いたものである。

巻頭には總論ともいふべき「新技術者精神」をかゝげ、事變今日の段階に於て技術の占める地位の重要性を強調し、これが直接の擔當者たる技術者に強烈な國家意識と旺盛な民族的自覺と正しい科學精神が缺くべからざるものであることを強調し、その指導原理を明確にし（これが著者の主張する新技術者精神である）、次いで各論ともいふべき論說に於ては現在我國の技術界が直面してゐる個々の具體的問題の解釋について試論し、最後は數篇の隨想となつてゐる。技術關係者は勿論一般大衆に推薦したい。

(昭和一四、一、二 神田區神保町一ノ一)
三省堂 四六判 二二一頁 一・二〇)

東京商工會議所 編

轉業指導講座

本書は東京商工會議所が現下に於て緊要なる轉業問題に關し最も適切なる知識と方法とを普及せんが爲に、五日間に亘り、各方面の權威を招き、轉業指導講習會を開催し、轉業の必要に迫られてゐる實際中小商工業者を集めて講演したものを纏めて刊行したものである。全編が九講に分れ、官廳その他關係方面の専門家が、各種の題目の下に戰時統制經濟の必要と轉業問題發生の必然性並にそれが對策の大意を説くことから、商工組合の組織と經營、共同設備、轉業資金、轉業體験談等凡そ轉業に關して重要な諸事項目に就き、極めて平明に懇切に講演したものである。

本書は現下時局に於て緊急逼迫せる轉業問題に就き、その方面に精通せる専門家が、實際焦眉の急として差迫られてゐる業者に對する直接の指導講義であるから、生きて直接に役立つ著書であつて、現在此の方面に關する指導書が殆どなく、一般世上の要求を充足し得ない状態にある時、本書を奨める意義は大きいであらう。

何といつてもこれが必要に差迫られてゐる中小商工業者の

讀むべきものであるが、一般指導階級の人々も一讀して本問題の解決に盡力すべきものと思はれる。

(昭和四、八、麹町區富士見町二ノ一
昭和圖書株式會社 四六判 二七六頁 一・六〇)

アーチバルト・ブラツク著

平山復二郎著

トンネルの話

本書は素人を目標として各國のトンネルの歴史を書いた科學的讀みものである。その内容はギリシヤ及びエヂプト等の古代のトンネル、暗黒時代のトンネル、最初のシルード・トンネル、米國のトンネル、アルプスのトンネル、英國の海底トンネル、米國のハドソン・トンネル、米國の瓦斯管トンネル、パリ及びベルリンの地下鐵、シカゴの貨物用地下道、ニューヨークとフィラデルフィアの地下鐵、米國の灌溉用トンネル、最初の沈埋トンネル、丹那及び清水トンネル、伊太利のトンネル、米國太平洋岸の水道、米國のホランド・トンネル、米國西部のトンネル、英國クウイーンズウエー・トンネル、モスコの地下鐵、イギリス海峡の未完成のまゝのトンネル等の、トンネル工事の事實と逸話を集めて居る。一般

六四

の讀者が非常な興味を以つてトンネルに關する科學的敘述を讀むうちに、トンネル工學の概要を知り得る科學讀みものとして極めて適當である。

(昭和四、六、神田區一ツ橋二ノ三
岩波書店 四六判 二五四頁 一・六〇)

ブルノー・タウト著

篠田英雄譯

日本美の再發見

建築學的考察

本書は世界的な建築家ブルノー・タウト氏が從來の西歐人の日本美觀とは又異つた独自の日本美觀に立つて、主として日本建築に對する諸種の見解を述べた文集である。總論的な「日本建築の基礎」と桂離宮の美を解明した「永遠なるもの」の二篇と「飛彈から裏日本」「雪の秋田」の日本の古建築を訪ねて歩いた二つの紀行文とから成つてゐる。「日本建築の基礎」は國際文化振興會に於ける講演で、翻譯して「日本評論」に載せられたものであり、二つの紀行文も同じく翻譯してそれ／＼「日本評論」「文藝春秋」に載せられたものである。譯者は「素材そのものが直ちに美の構成要素でなければなら

ない」といふのがタウト氏の持論であると説いてゐるが、その様な觀點から簡素な日本美を正當に認め、「伊勢神宮に於ては、一切のものがそのまま藝術的であり、殊更に技巧を凝らした箇所は一つもない」といひ「伊勢神宮は絶対に日本的なものである。しかも日本に於てこれ以上日本のなものはどこにも存しないのである」といひ、桂離宮を説いては「まことに桂離宮は文化を有する全世界に冠絶せる唯一の奇蹟である」と讃へてゐる。尙この様な建築學的記述の行間に著者の眞摯な人間性が滲み出てゐて訴へるところがある。譯筆も極めて平易流暢であるから一般人の好個な讀物として推薦した

(昭和四、六、二八、神田區一ツ橋二ノ三
岩波書店 特小判 一六四頁 一・五〇)

東京商工會議所編

機械工業講話

本書は生産力擴張の國策線にそひ、東京商工會議所が機械工業界の權威者を煩はして昨夏開催した工業講演會の講演集である。内容は機械工業概論、自動車工業、原動機、航空機工業、化學機械、工作機械工業の諸篇より成り一般商人は

本書によつて斯界の現状を知り、商工業事務の能率を増進することが出来るであらう。

(昭和四、五、二五、日本橋通二ノ三
丸善株式會社 四六判 三五八頁 一・八〇)

十川純夫著

工作機械 (改訂版)

(ダイヤモンド産業全書)

本書は工作機械に關し、工業、經營、法制の各般に關し一聯の専門的常識書として執筆したものである。本書は、序說性能、製造、事業、統制、結論の各論から成つて居る、序說に於ては新興工業として工作機械工業の重要性を説き、性能編に於ては工學的に工作機械の種類と品位及び發達過程を述べて居る。製造編は我が國に於ける斯工業の發達史に始まり、最新工作機械の特質を強述し、次に構成材料や生産費と價格とに就て敘した。事業編に於ては事業としての工作機械工業を過去の日本の發展過程からして將來に及んで工業、經濟、國策の各點から論述し、統制編に於ては國策上より工作機械製造事業法を中心にして工作機械行政を論じ、最後に結論として斯業の反動期對策と將來性とに就て述べて居る。

六五

工作機械に關し、工學、工業、商業、經濟、法制、國策に關し、一聯の専門的常識を求むるものに適切である。産業家向のものである。

(昭和一四、六、三〇 麹町區霞ヶ關
ダイヤモンド社 四六判 二九四頁 一・八〇)

東京朝日新聞社編

朝日航空講座 (上)

支那事變に於ける陸海空軍の活躍、航研機の長距離世界記録の樹立等が我國の航空技術、並に航研機の性能に就いて國民の認識を新にし、航空に對する世人の注意を喚起した。本書は昨年夏東京朝日新聞社で開催された航空夏期大學の講義を纏めて上梓したもので、平戦時の航空全般に關する綜合的著述である。講師はいづれも我國航空界の第一線に活躍してゐる人達であり我國航空史上に重要な役割を果しつつある人達である。中には最近惜しくも散華された名パイロット藤田少佐の名も連ねられ、洵に感慨無量なるものがある。

本書は只に航空常識の涵養に適切な許りでなく、時局下に於ける精神作興上にも裨益する。

(昭和一四、四、三〇 麹町區有樂町 二・〇〇)
東京朝日新聞社 菊判 三四七頁

朝日新聞社編

朝日航空講座 (下)

本書は、先に推薦された朝日航空講座上巻の姉妹篇である

- 航空機學 小川太一郎
- 海軍航空 加藤尙雄
- 航空施設 佐々木利吉
- 航空醫學 寺師義信
- 航空糧食 川島四郎
- グライダー 石原政雄
- 防空施設 田邊平學
- 防空法 龜山孝一
- 航空文學 杉山平助

執筆者達は、上巻と同じくいづれも斯界の現役であり、而もそれらの權威者であるから、内容は適切にして正確、洵に航空常識の涵養書として上巻に劣らずよく出来てゐる。

(昭和一四、七、七 麹町區有樂町 二・〇〇)
朝日新聞社 菊判 三八六頁

東京商工會議所編

化學工業講話

(昭和一四、二、一五 神田區豐河臺一ノ一)
佐藤新興生活館 四六判 二一七頁 一・八〇)

小倉金之助 著

家計の數學

「家計の數學」この目新しい題目の書は數學の書物といふにはあまりに我々の常識から離れて居ります。然し其序文の中で博士は、わが國民大衆の間に、何とかして、科學の精神——少くとも數學的な見方、考へ方、取扱ひ方——を廣く行きわたらせ、しみ込ませたいかう云ふ一念から、この書物を書いて見た」と述べてゐられます。定理と證明との連続からなる在來の數學の書物を大衆が好んで讀まぬのは云ふ迄もない事であり、しかも大衆の爲めの興味ある數學的讀物と云ふやうなものは殆どありません。數學書といへば受験のためのものか技術家や専門家のための専門書ばかりであり、一般の人は學校を出れば數學とは無縁の衆と成つてしまひますがこれでよいのでせうか、よいと思ふ人のみでなくとも進んでこの缺陷を救はうとする人は無かつたのであり、博士は其著「科學的精神と數學教育」の中の一論文中に「吾々に取つて最も重大なる課題の一つは如何にして、人間

本書は昨夏東京商工會議所が工業知識の普及の爲、斯界の専門家を煩はして開催した工業講演會の講演を集録したものである。内容は化學工業總論、燃料工業、電氣化學工業、酸アルカリ及肥料工業、窯業、油脂工業、纖維素工業、砂糖酒類、染料染色、護謨皮革の諸論より成り稍々専門的ではあるが敘述が平易であるから一般商人並びに化學工業に關心を有するものに推薦する。

(昭和一四、五、二五 日本橋區通二ノ六)
丸善株式會社 四六判 三六〇頁 一・八〇)

高良 富子 著

新生活の設計

「新生活の樹立」「新生活の設計」「生活問題斷想」「非常時局の生活」の四篇に分ち、生活刷新の要點、豫算生活を強調し、ともすれば個人的、家庭的に局限される婦人の生活を國家生活の見地にまで高めることを目的として書かれたもの、しかもそれは單なる經濟主義からでなくて「勿體ない」「忝けない」「有難い」と云ふ心持を臺所の隅から家庭に、社會に國家にそして世界同胞の間に押しひろげ「暮し好い」世界の樹立に努力したいといつて居る。

の物質的並びに精神的生活を豊富にするかの問題である。それが爲めには、文化の水準を高め、科擧を大衆のものとしなければならぬ、こゝに數學が、何故に大衆化されなければならぬかの、根本理由がある」と述べて居られます、そしてまた「もしも單に數學の技師でなく眞に正しい意味での科學者であるならば、眞理を目指す知的活動を、人間解收の目的にまで高めなければならぬ」とも述べて居られます。このやうな高い理想信念の一端を具體化されたものが家計の數學であります、それは未だ嘗てなされなかつた全く新しい企であります。

内容は第一編常識としての數學、第二編收入と生計費、第三編利殖の計算、第四編生命保險の四編からなつて居ります其序に「數學の豫備知識としては、せいぜい中學校や女學校や實業學校の二三年程度まで、それとも實際はもつと低く主に高等小學校や青年學校程度の算術に代數の入門——これだけで十分に間に合ふやうに工夫したつもりである」と云はれてあるやうに初等的な數學の豫備知識があれば誰でも十分理解出来るやうに分り易く説明されてあります、そして經濟生活の中に起る具體的、現實的な諸問題を數學的に考察することによつて、其中から一般的な法則を見出す手順が、懇切にまた極めて巧に示されてあります。

石川翁農道要典編纂部編

石川翁農道要典

本書は石川理之助翁の農村更生の事蹟とその指導精神、倫理思想及び和歌、紀行等を選択編纂せしものである。従來石川翁は單なる農村更生のすぐれた技術者であつたかの如く思はれてゐたが、實は更に偉大な反面、即ち至る所世道、人心を説き、自ら率先實行しつゝ、學をすゝめ、以て社會教化に盡力した半面があるのである。

翁の指導精神、倫理思想は大體儒教的なものが基調をなし、言々句々すべて誠實にみち／＼た實踐の所産であり、うまさる努力の結晶である。その精神力、意志力は全く敬服に價するものがある。單に農村更生方面に關係ある人のみならず一般社會も得る所多いと思ふ。

(昭和一四、三、三一 日本橋區室町二ノ一)
(三井報恩會 四六判 八七三頁 一・八〇)

朝日新聞社編

新農村の建設

——大陸へ分村大移動——

以上のやうに本書は大衆の文化的向上を目的として書かれたものでありますが、それと同時にこれはまた、數學教師にとつて教授の非常によい参考書であります、本書は博士が多年唱道して居られます數學教育の改良主義の主張を具體的に表はされました一つの標本とも見る事が出来ます、我國の初等數學教育界に改良運動が導入されましたから舊い形式的論理的な教授法は次第に改良されてまゐりました、教材の心理的取扱ひ函數觀念の導入等が行はれ、自然、社會現象の數學的把握、科學的精神の開発等が追求されてまゐりました、而し今日とても其教授の實際に於てはこの目的を遂行する適當な方法が十分とられてゐるとは言ひ難い有様であります、改良主義の理論の上に書かれた教科書、参考書で其理想が十分表はされていると言ひ得るものも乏しい有様であります、この時本書は數學教師に多大の示唆を與へるものであると思ひます、一般の人々に讀まれるのみでなく、數學教師、わけても女學校の教學教師の方々の多くに讀まれたいものと思ひます。

(昭和一三、一、二〇 神田區一ツ橋二ノ三)
(岩波書店 特小判 二四六頁 一・五〇)

本書は新東亞建設の時局に重大な意義を持つ滿洲への分村運動の全貌を闡明して一般の理解に資すると共に、その指針ともなるべきものとして編まれたものである。内容は「分村運動の全貌」といふ概説と官廳、諸團體、農村、代表者の集る座談會記事「先進分村に聴く」といふ一篇と、分村計劃懇話會調査になる「分村計劃の村を訪ねて」といふ精細な調査報告とから成つてゐる。右の中座談會記事は最も興味ある部分であつて、讀者はその中から色々貴重な暗示を得、教訓を得、感奮興起せしめられるであらう。尙調査報告は夫々の分村計劃、村の實情を細大漏らさず知らしめて、農村の人々には得難い参考となるであらう。

(昭和一四、四、一五 麹町區有樂町)
(東京朝日新聞社 四六判 五六一頁 一・八〇)

森川 規矩 共著
増田 正直

農村 共同炊事の手引

元來農民は食糧生産者の立場にありながら、その消費に對しては餘りにも無關心で、因習に執はれ、粗食多量主義で、夙に榮養改善の急務なるを識者は認めてゐたのである。

一方農繁期に於ける勞働力の不足は主婦の炊事を益々困難ならしめ、榮養の質的悪化をも招くおそれがある。従つて榮養を改善し、繁忙を極むる農業者に對して出来る丈多くの勞働力を轉化補充すると云ふ意味で、農村の共同炊事が最も大切な方法であることも識者のひとしく唱へ來つたところである。更にこれを大きく觀れば、生産力擴充、國民體位向上の資ともなり得るわけである。かくて本書の價値は何よりも先づ標題であるところの共同炊事の意義——その重要性にある。

内容は前編、榮養改善の基礎知識と、後編は共同炊事の實際とより成り、更に附録として實驗濟農繁期榮養食共同炊事献立百例及び農繁期託兒所用献立を載せてゐる。

前編は榮養學を基礎として、主食、副食、辨當及び間食の榮養改善の方法を實際に即して示して居る。後編は共同炊事の經營内容、設備、献立調整、配給方法、經費及び決算等について、著者等の經驗に基いて共同炊事の實際の營み方を指導的に書いたものである。

前編は榮養改善の基礎知識を與へるもので、ひとり農民のみならず、一般家庭の主婦に對しても大いに参考となるべき點が多い。炊事に携はるものの一讀を切望する。

後編は農村共同炊事の重要性に鑑み、この方面の指導書と

しての價値をもち、社會大衆を益する點甚だ大きいと信ずる。

(昭和四、九 神田區駿河臺一ノ一
佐藤新興生活館 四六判 二七六頁 一・〇〇)

農林省副業課 編

時局農村の副業と工業

本書は農林省副業課に於て編纂したものである。

先年農林省が奨励金を交付してその發達を促した農村工業及び副業の中主要なるもの二十一種を選んで、夫々の専門家に依頼して執筆せしめたものである。

その主なる内容は本書を四編に分ち、第一編農産關係に於ては、漬物菜種油、菓製品、桑條の利用、眞綿、澱粉、製麵、醬油、罐詰、第二編畜産關係に於ては軍用兎・アンゴラ兎罐詰肉、第三編林産關係に於ては松脂、五倍子、輸出向木製玩具、竹工品、曹達バルブ、第四編水産關係に於ては寒天、昆布、和布、練加工品を取扱つてゐる。

その説明の仕方は各種の産物について性質、用途、年産額主要産地、貿易關係等の概説を致し、各論に於て製法並に製造に要する器具機械荷造法、貯造法、販路、販賣價格に至るまで一々詳細に具體的に教示したものであつて、直ちに實際

に役立ち得るものである。

現下の重大なる時局に際し副業及農村工業は國策に順應して軍需品の供給に、將又海外輸出に重要な役割を果しつゝある今日、多角的農業者の經營は農村振興の上に缺くべからざるものである。かゝる方面の書物の需要甚だ多いにも拘らず信頼すべきもの少いのを鑑み、今般農林省が率先してこの種の方面に着目して、斯業奨励の爲本書を公にしたことは喜ばしい事である。社會教育上裨益する所大なものと信じ、推薦して可なるものと思ふ。

(昭和四、九 赤坂區一ツ木町三一
西ヶ原刊行會 四六判 四〇九頁 三・〇〇)

野口 亮 著

會計通論

『會計通論』などといふ標題は如何にも四角ばつた教科書風の本を思はせるのであるが、この本はそんなものではなく、寧ろそのやうなものと全然異つたもので、類のない簿記會計の通俗解説書である。「緒言」で「本書は、實際に適合する會計を最も確實な方法で解説したものである。極く最近、實社會を研究所として八千百三十七の會計について實驗した

結果、かうすれば會計に實際に適合し、この方法で指導するならば、會計は造作なく理解されるといふことが明となつた。云々」といつてゐるやうに、本書は著者の數多くの實際經驗に基いて、簿記會計の知識を最も簡易化し、合理化して初歩の人にも徹底的に會得せしめようと試みたものである。いはゞ簿記會計の原理原則をエキスにして、最も平明に簡略に説明しようとしたものである。この試みは從來類例のないものであつた、簿記の教科書はいろ／＼數多くある、併し簿記の各分野に共通した一元的原理をこのやうな形で説かうとしたものはない。その意味で本書は甚だ有意義な著述なのであるが、さればといつて全然初歩の人が本書によつて十分に會計觀念を會得することが出来るとはいはれないやうに思ふ。本書はやはり實務に携つてゐる人々に最もよく適合し、それらの人々がこれによつて自己の會計觀念を明瞭にし、實際の遣り方に改善を加へるに好箇の手引となるといつたやうな本であると思ふ。普通一般の人々には著者が解つてゐるものと前提してかゝつてゐることが解つてゐないのである。それ故一般人のためには、これをテキストにした、もつと懇切に、嚙んで含めるやうに説いた本が必要だと思ふ。それ故本書は、簿記會計に就て多少の知識あるもの、特に實業に従事してゐる會計に係はりのある人々に好箇の伴侶としてお奨めしたい

(昭和一四、一一 日本橋區通二ノ六
丸善株式會社 菊判 二・二四頁 一・八〇)
増補版 二四五頁 二・〇〇

第六 美術・諸藝

山口 諭助 著

無の藝術

本書は東洋藝術——主として日本藝術の美を哲學的に論究したものである。近來日本文藝學の提唱に伴ひ、國文學界に於ても日本文藝美の學的研究を見るに至り、他方また美學的見地から日本藝術美の研究なども現はれるに至つてゐるが、本書の如き哲學的研究も當然期待さるべきものであつた。本書の著者は明快透徹せる論述を以て日本藝術美の哲學的解明を行つてゐる。即ち繪畫における空白の考察より論歩を進めて、日本藝術、廣くは東洋藝術の美を永遠悠久なるものにならざる無の世界を顯現するものとして定立してゐるのである。論究は明快であるが必ずしも精緻を極めてゐるとは言ひ難い。幾分觀念的に性急に結論を急いでゐるの觀がなきを得

ないが、一應哲學的究明を遂げてゐるのである。附録に「寂び」の本質を究明せる一論があるが、われ／＼は少しく觀念化、理念化の度の強すぎる感をなくし得ないのである。われ／＼は不満の點を少し強調し過ぎたやうであるが、本書の功績は没すべくもないと思ふ。かくの如く新しい分野を開拓せんとし、而も簡潔明快に論述した著者の手腕は賞さるべきであると思ふ。

(昭和一四、九 麹町區内幸町二ノ一二内幸ビル
理想社出版部 菊判 一一四頁 一・二〇)

小山内 薫 著
北村 喜八 補

芝居入門 (岩波新書)

大正十三年プラトン社から出版された前者に、かつての門

人であつた北村喜八氏が隨所に「補稿」し、新に新書の一編として上梓されたものである。

本書執筆の年代は現在より二十餘年も遡るのであるから、到る處に現代とはかなりの隔たりのある部分があるやうである。

しかしそれ等の隔りはこの方面の専門家と特別の興味をもつファンの一部であつて、演劇に對する一般大衆の關心や理解には飛躍的な進歩はないと言ひ得るのではなからうか。

従つて本書が取扱つて居る「役者の藝」「俳優と演技」「補稿」「芝居の稽古」「舞臺の變遷」「歴史的に見た劇場の形態」「補稿」「脚本の味ひ方」「舞臺監督の事」「演出と演出者」「補稿」「觀客」(補稿)の諸項は今も尙「芝居入門」としての相當の役割りを演じ得るものと考へられる。

そして著者の一種風格のある文章は「芝居道」に對する著者の指導的熱意と相待つて讀者を引きつけて行く。北村の補稿は著者の當時とは趣を異にする部分を修正し且つその後の進歩を取り入れ、足らざるを補つて居るので、この程度の入門書としては啓蒙的價値は少くはないであらう。

(昭和一四、一〇 神田區一ツ橋二ノ三
岩波書店 新四六判 二六二頁 一・五〇)

能勢 朝次 著

古代劇文學

古代劇文學は我國演劇の發達の主流を猿樂にありと考へて、まづ猿樂の濫觴から次第にそれが發達して來る過程を述べ、最後に大和猿樂について解説して觀阿彌、音阿彌、金春禪竹の功績をそれぞれ述べて猿樂發達史の概観を終る。次に能樂藝術論と題して世阿彌十六部集を中核として演劇の三大要素、能の構成論、能樂の音樂的統整、能樂習道論、藝位序列、心の問題等について能樂藝術の概説を専門的に過ぎぬ程度に説く。後は室町時代以後の能樂と能樂の現代的意義にふれ、能樂美といふやうなものを説いて稿を終つてゐる。

豊富な學殖を以て平易に書かれた、一般に古代劇の概要を知らしめるに有意義な書である。

(昭和一四、四、一五 日本橋區三ノ一
河出書房 四六判 二二六頁 一・三〇)

野上 豊一郎 著

世阿彌元清

野上豊一郎氏は能樂研究の第一人者であり、「能・研究と發見」によつて學位を受けられてゐる。本書は能樂の完成者世阿彌元清の生涯と藝術を一般讀者子のために平易に傳したものである。

五十七年の長きに亙つた戦亂も漸く終りを告げて、室町幕府の基礎はこゝに定まり、泰平の春は再びめぐると見えた。華美・豪奢・逸樂の生活をひたすらにした將軍義滿が今熊野に觀能の宴を催した時、その晴の舞臺に「翁」を舞つたのは大和猿樂の名手觀阿彌清次であり、その時輝く美貌を認められてその子世阿彌元清は將軍の同朋衆に加へられ、長くその愛を受けた。この好機運に出發した元清はしかも稀世の獨創的奇才と総合的才能の持主であつて、將軍の寵愛に押れることなく、よく生涯を藝道精進に献げて、遂にわが民族固有の舞臺藝術の完成をなし遂げた。彼は役者であり、同時に作者であり、舞臺監督であり、又能樂理論の建設者でもあつた。しかもその孰れにも第一流であつた。彼の能樂完成の功績は、俳諧完成者芭蕉、演劇完成者近松に比較すべきものであり、わが文化史、藝術史の上に不朽の名を留むるものである。しかし我々はこの偉大なる藝術家について餘りに知るのと慚いのであるが、本書はこの國民詩人の全貌を傳へて餘すところがない。

世阿彌の作品は現代まで五百年の歲月を越えて傳へられてゐるが、その數百二十四番、謡曲全曲の過半數を占めてゐる。しかもその能樂の技法、精神を論じたものは花傳書・能作書その他を併せて現存のもの十八種に及んでゐるが、いづれもこの大才が諄々として後進のために、能樂藝術の本質を説いたものである。就中、花傳書は彼の技法の眞骨頂を傳へたものである。

彼が能樂の眞髓として擧げたものは、唯美主義を意味する幽玄であつた。しかし猿樂が元來、堅實なる寫實精神に出發せるものであるが故にこの幽玄もまたリアリズムの裏付けに立つものである。花傳書の花とは即ちその幽玄なる技法に於ける魅力の意義を説いたもので世阿彌藝術の本質である。作能書は能樂の製作上の彼の體驗を盛つたもので、彼が上は將軍の寵愛を得る程の本格的な藝術家であると同時に、卑俗なるべき民衆が彼を支持した所以のものを汲みとることが出来る。本書はこれらの彼の藝術の本質を構成するものを引例の下に詳論してゐる。能樂は五百年の傳統を引いて今に傳へられてゐるが、その間彼の如く時代と共に生き、しかも不滅の藝術をとゞめた大藝術家は遂に現はれなかつたと著者は結んでゐる。

(昭和一三、一一、一〇 四谷區愛住町一九)
創元社 四六判 二四九頁 一・〇〇〇

竹内 尉 著

千 利 休

茶と云へば利休と云はれる程に、利休の名は極めてポピュラーであるが、その割に利休に關する傳記資料は少いと云ふことである。それは著者も本書で云つてゐるように、彼が晩年秀吉の忌諱に觸れたことが、當時かれに對する記述を遠慮しなければならなかつたのかも知れない。何れにしても從來利休傳のまとまつたものは殆ど見受けられなかつた。その意味で本書は類の尠いものと云へる。

内容は先づ「珠光・紹鷗・利休」と云ふ見出で茶の傳統を示してゐる。將軍義政の側近には能阿彌、相阿彌と云ふ官僚的な――著者は敢て斯様な文字を用ひてゐる――茶の技術家も居たし、これと相並んで民間には禪僧珠光やら、その門に堺の名家武野紹鷗も居た。利休の茶道はそれ等の傳統を承けて生れたのである。それでは彼の茶道は、茶の精神はと云へ

ば、次の「利休とその時代と環境」「茶聖利休」「桃山文化と茶道」と云ふ様な諸文がこの説明を詳細に引受けてゐる。最後の興味は何と云つても悲壯な彼の晩年である。傳記的には彼の死は色々説明されてゐる。然し著者はこゝに一つの新説を提起してゐる。それは利休を切支丹と結びつけることである。それは當時の社會道德の通念上、娘を太閤に献ずることとは必ずしも恥づべきことではなかつた。それにも拘らず彼が徹底的に之を拒否したのは、決して從來の佛敎的の道念から出たものではなくして、キリスト敎的の道念であるとさえ云つて、種々論證をかげりて利休の切支丹説を唱へてゐられるのは、新説として誠に面白い。勿論著者は之を決定説として主張されてゐるのではない。

以上の内容が平易な敘述に依つて樂に讀んで行ける。主題としてはいさゝか特殊であるかも知れないが、我國文化史の一斷面を示すものとしては仲々面白いもので、又得る所も多い。大方の讀者子に一讀を薦め度い。

(昭和一四、一一、二一 四谷區愛住町一九)
創元社 四六判 二一三頁 一・〇〇〇

久松 潜一 編

國語國文學年鑑 第一輯

國語國文學の研究は、近時日本の自覺の高まるにつれて漸次隆昌となりつゝあるのであつて、之が關係の單行本講座雜誌等の刊行、講習會放送講演の開催など甚だめざましいものがある。之等を集成整理して記録することは、現在研究の進歩の爲に必要であるのみならず、後世の學徒の爲に、我等の當然爲すべき一つの義務とも感ぜられる。本書は即ちその要望に應ずるものである。従來も此種の企ては皆無ではなく、特殊なものとしては「萬葉集研究年報」の如き相當充實したものも出てゐたのであるが、廣く國語國文學界を大觀し、整然たる組織と豊富なる内容を以てここに第一輯（昭和十三年度分）が公刊されたのは誠に慶賀すべきである。

本書の内容は、卷頭に「國語國文學概観」として、國語學一般、方言研究、國語政策、國文學一般（附評論史研究）ほか各時代別の研究、日本漢文學、國語教育及び文壇出版界の

業績成果を學界の諸家が分擔執筆され、次に「雜誌所載論文目録」として分類内容一覽、論文目録、及び所載雜誌一覽があり、「新聞所載論文目録」に次いで「單行本目録並解説」として分類目録、書名目録並解説の外發行所一覽を附し、次の彙報には各大學の講義題目、卒業論文題目をはじめ、講習會、放送講座の題目、學界消息、雜錄、檢定試験問題、國寶重要美術品認定目録抄等が收められてゐる。最後に「執筆者索引」（四段組三十頁）を附するが如き、極めて用意周到なるを見るのである。

勿論全體としての多少の不滿、改革を要すると思はれる點もあらうし、脱漏も皆無とは言へないであらうが、久松博士主宰のもとに編纂に當られた諸氏の勞苦は甚だ大なるものがあり、吾人の想像以上の難關を突破して價値ある大冊と成された事は何人も敬意を惜まぬものであり、之を少くも高等専門以上の諸學校、及び各種圖書館、研究所等に備へて、研究の補助、讀書の指導等に寄與する所絶大なるべきを確信する

（昭和一四、一一 神田區錦町一、一四）
（靖文社 菊判 四七六頁 四、二〇）

齋藤 清衛 著

精神美としての日本文學

本書は日本文學精神史に關する研究論文集である。序論として「日本文學精神史の方法論」と「古典文學研究に於ける立脚點」の二論文を掲げ、次に本論とも見るべき部分は「日本文學精神美の諸問題」と「中世文學の精神研究」といふ二篇に大別して諸論文を収めてゐる。最後に結論として「日本文學研究の對象領域を擴大せよ」といふ一篇の論策を與へてゐる。

序論や結論に見る著者の論述は、極めて特異性に満ちた注目すべき卓見を含んだものである。文學精神の研究は單に各時代の代表的作品につくといふに止まらず、廣く各時代精神に更に深く作者の人間にまで探究の眼を注がなければならぬ。近來擡頭した文藝學的研究に對しても十分にその意義を認めながらも、研究領域の偏狭に陥ることを戒めなければならぬといふ立場である。いはゞ著者の謂ゆる藝術至上主義的研究態度に對して、一種の社會的、人生的研究態度を取るものといふことが出来る。「中世文學の精神研究」中に含まれてゐる「神皇正統記の文學的價値」といふ一篇の如きは、

右のやうな立場からでなければ出て來ないものである。こゝでは著者は神皇正統記の作者の人間、人格の表現を見ようとしてゐるのである。

「日本文學精神美の諸問題」篇中の諸論文もそれ／＼注目すべきものではあるが、何といつても「中世文學の精神研究」篇が著者の本領でもあり、特色鮮やかな、本書中の壓巻であると思はれる。「幽玄美の深化」「流離漂泊」「俳諧美の本質」などは最も際やかな、著者の人間と性情とを反映したものである。中世日本文學の精神美の底深く輝くものが見られる。

著者の卓見に富む研究に對しては敬意を惜まないものではあるが、その態度、方法に對しては一言疑問なきを得まいと思ふ。文學作品は結局に於て作品としての獨立性を嚴として持つものである。作者の人間、人格も作品の表現を待たなければならぬ。その限界はあくまで守らなければならぬ。そこに研究の嚴密性も要求せられ、困難もあるのだと思ふ。それから今一言讀者としての諸論文の着想の卓拔さと共に今少し敘述の簡明直截さを要求せざるを得ない。少しく晦澁に過ぎるの難は免れられまい。

（昭和一三、一二、一〇 京都河原町二條下ル）
（人文書院 菊判 三五三頁 三・五〇）

齋藤 清衛 著

日本の性格の文學

齋藤博士の國文學界に於ける地位は定評がある。主として中世文學を専攻しつつ、各時代文學にも注意を拂ひ、日本文學の本質を究明しようと、靜かに考察を進めて行かれる態度は、その最初の著述以來、多くの人に認められ、又、親しまれてゐる。

「日本の性格の文學」は「文藝文化叢書」第一輯として刊行された博士の近業で、十四篇の論攷を收め、之を、序言、總説、和歌・俳諧、物語文學、日記・隨筆、緒言に分つてゐる内容の各々に就て紹介の暇は無いが、いづれも著者の靜思默想の境から生れた、暗示に富む貴い論文であつて、總説の「に收められた「自抑の文學」の如きは、説く所必ずしも詳密ではないが、日本文學の本質に肉薄する重要な鍵を示すものとして、日本文化に關心を有する者の必ず益する所あるものであらう。諸形態の文學を論じて、著者の造詣は隨所に汲取る事を得るのであつて、日本文學の「性格」を掴まんとする者に、甚だ多くの示唆を與ふるものである。しかも、日本の藝術を肇國以來絶えず存続する皇道精神の具現そのもの

七八

であるやうに説くのは早合點であり、輕薄な態度であつて、文化各部門の諸機能に現はされたものは、人間の肉體の各部の作用に差別があるやうなものであると、序文に於て述べられてゐる態度は、此の時局下に於ける國文學徒に示された重要な戒告でもあると思はれる。

(昭和一四、一八、小石川白山前町四七) 子文書房 菊半蔵判 三〇〇頁 一・二〇)

久松 潜一 著

日本文學の思潮

「この書は日本の立場にたつて日本文學思潮をまとめやうとした一つの試論である」と著者は序文に記してゐる。即ち日本文學思潮の基底となるものとして著者は「情理」と「まこと」とを捉へ、その文學的諸相として「言靈」「大和魂」「幽玄」「有心」「をかし」「無心」などを考へてゐる。更に第三部としてこれ等の日本文學思潮が形成されるころの日本の歴史 風土の問題に考をすゝめ「歴史」「山水」「季節」といふ様な順でこれ等と文學との關係が述べられてゐる。

全體としての方法は日本文學思潮を構成的に分析しその本質を捉へんとすると同時に一面に歴史的発展として文學を見

る考へ方をも併せ入れて、極めて穩當且つ周到な見解に達してゐる。

著者も序文に述べられてゐる如く、本書が日本文學思潮を完全に餘す所なく説き得たかどうかは論をなすものもあらうが、尠くとも本書が現在に於て日本文學思潮を説いて最も穩當正確な見解に達してゐることは否定し得ないであらう。

尙著者の云ふ「日本の立場に立つ」ことも可なりよく實現されてゐるし、行文又平易で汎く一般に薦めるに足ると思はれる。

(昭和一四、七、日本橋區通三ノ一、二〇) 河出書房 四六判 二〇〇頁

志田 延義 著

日本文學論

— 神話篇 —

本書は著者の日本文學論體系中の一篇として著はされたものであつて、古典論、神話論、今日論の三部から構成されてゐる。著者の企圖してゐる神話論は随分大きなものであるらしいが此處ではその設計圖めいたものしか受取れない箇所も聞々ある。然しながら在來の謂ゆる科學的分析的方法に反對

して、神話を神話として取扱ひ、神話的眞實を掴み出すといふ著者の新しい方法、立場は極めて時局に相應したものであり、從來の神話研究の缺陷を補ふものであり、讀者に新しい視界を與へるものであつて、殊に第一部古典論は汎く古典に興味を持つものゝ必讀すべき好文字であると思はれる。

(昭和一四、二、一五、麹町區有樂町一ノ四) 日本問題研究所 菊判 二〇三頁 一・六〇)

片岡 良一 著

近代日本の作家と作品

この評論集は初めから秩序や體系をたてて計畫されたものではないやうである。その折々に發表したものを適宜選擇しそれを大體作家の時代順に配列した體裁を取つてゐる。しかし紅葉、露伴から始めて川端康成、阿部知二にまで及んでゐる點、明治、大正、昭和を通ずる近代日本の作家の概觀圖を提供してゐると見られないこともない。

これらの論文の中で最も主要なものは一番最後の「後書に添へて」の一文であらう。これには「近代日本文學研究者への課題」といふ副へ書きがついてゐるが、内容は問題の提出のみにとどまらず、かなり積極的に論者の意見が主張されて

七九

ゐる。即ち今まで普通信ぜられてゐる國文學の傳統である「あはれ」「幽玄」「さび」「をかしみ」の系列に疑問を發し、人間肯定の積極主義がその反對な面であることを述べ、ここに日本文學の他の傳統があることを指摘してゐる。

これがここに含められてゐる作家論の基調をなし、全體がちようど各論の形式になつてゐる感じである。しかしこの各論も決して先人の説に囚はれず彼獨自の見地からなされてゐる。その鋭鋒もなかなか手きびしいものである。確信を思ふままに吐き出し、容赦するところのないこの氣概は、かへつて文壇に深く觸れることのない境遇にあるものの強さであるといつて書かれたものは文壇の事情に疎いところはなく、むしろ熟知してゐることを思はせるので、近代作家を理解する上に好ましい指針となる著書であると考へられる。

(昭和一四、一一 神田區一ツ橋通二ノ三)
岩波書店 菊判 六四二頁 四・〇〇)

伊藤 整 著

現代の文學

本書はその内容を「藝術家の心」「知識階級と文學」「戦時
の文學」「人間性の問題」「批評」の五項目に分けて、現代日

本の現實に直面せる一文學者の立場から、考察をめぐらした文學論集である。

政治上の變遷の目まぐるしい重大時期に、藝術家は如何に處すべきかを論じ、この烈しい變革期を文學が乗り切る唯一の正しい方法は、現實を把握する意欲、これを記録し觀察する意欲の外にないことを反省してゐる。即ち事實のみを執拗に追ひかけてゆく外に、明日の文學を危氣なく設置する方法はないといふ。また知識階級の問題を論じ、現代日本の知識階級人が、廣範圍の廣い知識を持つてはゐるが、實生活に無關係な多くのものが混入してゐることを認め、人間としての秩序を希求する。「人間性の問題」の項に於て、「全體主義藝術の一可能性」としてヒュームの抽象藝術觀をみ、「女性の幸福」としてD・H・ローレンスの女性觀を説くあたり、この著者の外國文學に對する卓拔なる理解力を示すものとして見過してはならぬ好論文である。尙「批評」の項には、現代の文化問題たる映畫、國文學、國學、綴方教育等を取扱つてゐる。

總じて、人間性の眞實、人間の抱く理想、善への願ひを提げて、この轉換期の文學を處理しようとする著者の知性の牙えは、今日の日本文學に多くの示唆を與へる。文學に於ける新しい展開を求める知識人に良書として推薦する。

(昭和一四、四 日本橋區通三ノ一・五〇)
河出書房 四六判 二六〇頁

小林 秀雄 著

文學

自然主義文學批評、精神主義・理想主義批評、印象主義批評、更にそれに對峙するマルキシズムの輸入に始つた科學主義批評に對する批評を書いて、わが國近代文學批評精神の成立を示してゐる。次に文學的思想の價値は、現實的價値ではなく、象徴的價値だとする著者の觀點からあらゆる文化の形態に向つて批評が擴大されてゐる。トルストイやフロアベルの藝術論、小説論、志賀直哉や菊池寛の作家論、その他戦争、宣傳、映畫、演劇、現代詩等について書かれてゐる。やゝ難澁の文章であるが、文體は特異であり、内容も豊かである。それらの場合に深い睿智と發見とを藏してゐるものである

(昭和一三、一一、一五 四谷區愛住町一九)
創元社 四六判 二七〇頁 一・〇〇)

吉澤 義則 著

大和魂と萬葉歌人

本書の内容は「大和魂に就いて」「用語上から見た萬葉歌人の詠歌態度に就いて」の二篇よりなるもので、前者は昭和十三年十一月のラヂオ放送をもとにせるもの、後者は昭和八年岩波書店發行「萬葉集講座」中に執筆したるを補訂せるものである。

「大和魂に就いて」は著者の専攻せる國文學の専門の資料を以て、大和魂の本質を一つの知識として説いたものであつて、大和魂なる言葉の發生からその正當な意義、用法を古文獻を以て例證し、大和魂は「わが國の目あかしになる國なり(花鳥餘情)」といふのが平安朝人の大和魂の考へ方を正しく示してゐると思はれ、平安朝に出來たこの言葉は當然平安朝人の使用した意味に吾人も用ひなければならぬとする。

更に云へば大和魂は日本人が生れながらの本能となつてゐる天京の指導精神であつて、之は萬葉集などに於ては支那文化の影響が著しいものがあるに不拘らず矢張り取るべきは取り拒くべきは拒くといふ嚴然たる精神が一貫してゐることを見ても明瞭である。と云ふ様なことを豊富な引用を以て説かれてゐる。

次の「用語上から見た萬葉歌人の詠歌態度に就いて」は萬葉集の主として修辭の方面の研究であつて、博引傍證の中に萬葉集の歌語は周到なる考察によつて美化された人工語であ

つてこれは即ち如何に萬葉歌人の詠歌態度の用意の行きといたものであるかを示してゐる、と説かれる。

後者は稍々専門的な研究であるが、前者は平易な文章で古來の大和魂なる言葉の用法と精神とがよく説かれてあるので時節柄國民一般に推薦して適當なものと思はれる。

(昭和一四、五、二〇 日本橋區吳服橋三ノ五 平凡社 四六判 一六七頁 一・八〇)

武田 祐吉 著

女身萬葉

武田博士は人も知る如く今日國文學界の大家であり、萬葉學の權威者である。本書は博士がいろ／＼な場所、いろいろな機會にもせられた隨筆を集めたものである。博士の如く篤學で日夜學問的な勞作に勤んでゐられる方の隨筆集は既に珍重すべきものである。而も隨筆といへば謂ゆる隨時隨想、もしくは身邊雜記風のものと考えられてゐる中に、本書の如きは學問研鑽のうちに自らに生れ落ちたいはゞ落穂集とも見らるべきもので、著者専攻の萬葉に關する隨筆が大半を占めてゐるとなればいよ／＼珍重すべく、眞に學者の隨筆集といふべきものである。『女身萬葉』の語は、同名の一文が

書中に含まれてゐるのであるが、著者の自序にある如く何となく本書にふさはしい題名となつてゐる。萬葉といへばその昔眞淵によつて呼び與へられた「ますらをぶり」の概念によつて臨むならばしとなつてゐるが、著者は「女身萬葉」の一文によつてその「たわやめぶり」の半面を見、これを人に知らさうとしてゐるのである。本書の中に收められてゐる文章は大方短いものであるが、女人相手の雜誌などに書かれたものが多いところからも、この『女身萬葉』といふ名はふさはしいのであらう。百花とり／＼に優しく咲き競ふ花園のやうなこの書は、國文學に殊に萬葉に思ひをよせる者にとつては、懐しく去り難い親しみを感じさせる書であるが、わけても女性の讀物として誠にふさはしいものとして、弘く奨めたい氣が強く起るのである。

(昭和一四、七 芝區新橋七ノ一二 改造社 四六判 三七三頁 二・二〇)

川田 順 著

幕末愛國歌

本書は歌人川田順氏が、歌人としての力量と學者的な識見と努力とを傾注して解説せられた幕末維新志士の愛國歌評釋

書である。「序篇」では幕末志士の先驅をなす國學者歌人と寛政三奇士の歌をあげ「珠玉篇」では事件別にして代表歌を一首乃至十數首宛選出列挙し、「主要作者篇」では傑出せる十二人を選び、略傳を掲げ數首乃至十數首を選出し、一首毎に評釋してゐる。「一般作者篇」では右十二人以外の數十人につき一首又は二首宛同様に評釋してゐる。「外篇」は幕末愛國歌總論であつて、作者、對象、作風の種々相を纏めて説明してゐる。時局柄國民一般が折にふれ時に應じて讀み、大いに志氣を鼓舞せらるべきものである。

(昭和一四、六、一 龜町區三番町 第一書房 四六判 三八八頁 〇・七八)

石山 徹郎 著

現代短歌

本書は日本古典讀本中の一冊であつて、現代短歌に關する一般的知識の提供を目的として成つたものである。内容は序篇、展望篇、研究篇の三部に分れてゐて、序篇では幕末から明治中期に、新派和歌が勃興するに至るまでの短歌界について記し、次の展望篇に入る準備とする。展望は一種の現代短歌史と短歌讀本を兼ねてゐる如きもの

で、明治中期の新派和歌勃興以後現在までを次の如く

- 一、短歌革新期(明治二十五、六年—同三十四、五年)
- 二、「明星派」隆盛期(明治三十五、六年—同四十一、二年)
- 三、自然主義浸潤期(明治四十二、三年—大正二、三年)
- 四、「アララギ」派隆盛期(大正三、四年—昭和二、三年)
- 五、蕩播分裂期(昭和三、四年以後)

五期に分ち、その各期毎に先づ歌壇の様相の概觀を記し、ついでその期に活躍せる代表的歌人を挙げ、その作を掲げて歌人別にその性質、傾向、役割等を附説し、尙又頭註として各歌人の略傳、歌集、参考文献等その他理解、鑑賞に必要な事項を記し、全體として現代短歌の全領域に亘る廣い公平な展望を試みようとしてゐる。

次の研究篇では主として短歌の本質とその現代的意義を明らかにしやうと企てられてゐる。

廣い視野と公平な立場と穩かな理解と、それに何よりも特色となるであらうことは從來の如く單なる鑑賞主義に陥らぬ科學的方法を以て大きな全體を手際よく處理してゐて、短歌に關心を持つものは勿論、汎く一般に薦めて恰好のものと思はれる。

(昭和一四、九 京橋區京橋三ノ四 日本評論社 四六判 三七〇頁 一・五〇)

聖戰歌集

本歌集は齋藤茂吉、佐佐木信綱、北原白秋三氏選の下に讀賣新聞歌壇に選載せられた支那事變に關する短歌千二百餘首を集録したものである。編輯は各選者別に三部に分れ、各部夫々「現地篇」「銃後篇」の二篇別になつてゐる。「現地篇」の出詠者は戦地軍人を始めとし、應召兵、戦病兵、歸還兵等を含み、「銃後篇」には出征兵の親類縁者、友人知人、一般等あらゆる種類の人々が出詠し、尙歌も必ずしも戦争に關するものと限らず、廣く時局を詠じたものも含まれてゐる。

本協會に於ては昨年大日本歌人協會編『支那事變歌集、戦地篇』を推薦したのであるが、本歌集は時期にして云へば、大體その後には現はれた歌を収めてゐる。それ故右歌集を補ふものといふ意味もあるであらう。また質の上から云つても歌壇の第一人者たる三氏の選になるものであるから、相當粒は揃つてゐる譯である。

右の理由で本集も國民赤誠の聲を記録するものとして國民一般に併せ推薦したい。

(昭和一四、一〇 京橋區京橋一ノ四山中ビル 岡倉書房 四六判 三二七頁 一・七〇)

吉植 庄亮 著

大陸巡遊吟

本書は歌人吉植庄亮氏の支那大陸巡遊歌集である。「卷末」に曰く、『大陸巡遊吟』五百餘首は、大體、昭和十三年五月十九日日本を飛行機で飛出して、夕景大連着、軍の徵發で天津行の飛行機が明日に延びたのを知り、直に鐵路北支に向つた日から始まり、北支、蒙古、滿洲をめぐり、六月十八日祖國に歸りつくまでの約一箇月の私の心の記録である。』

本書は紀行に代る歌集、或は歌による旅日記といふことが出来る。「すでにして久しと思ふ渡津海と空」とけあひて大虚しさ」と歌ふ飛行機による渡洋を序篇とし、蒙古篇・北支篇・滿洲篇を収め、美し國や豐の蒼き國や歸り來て心はずがるただに祖國に」と祖國を歌ふ外篇を最後として、首尾結構よく整つた、歌集としても珍しい歌集である。各篇幾多の佳什を収め、作品價值よりしても近來稀に見る歌集である。歌によつて大陸を知り、支那民族の風習・生活に親しみ得るといふ、その意味でも類稀な書である。

本書に収められた五百餘首の歌は、『短歌研究』『日本短歌』等の歌誌に數回に亙つて發表せられたものであつて、發表當

時歌壇に於て賞讃を博したものである。

青雲の退きへの極み大陸は光となりて陽炎ふかなや

天地の寄りあひの四方に見ゆるものただ東に天つ日紅し

あらはなる土より出でて土に入るくれなゐの日を見つくしにけり

朝起きて外に出づれば天ありて天をただちに人は呼吸す

大陸の民のあけくれは直接に天に交渉を持ちつつあはれ

これらの大陸讚歌は普く歌人の讚嘆するところであつた。

時局柄歌を好む國民諸氏にお奨めする。

(昭和一四、六 芝區新橋一ノ七 改造社 四六判 二二六頁 二・〇〇)

本庄 陸男 著

石狩川

明治維新の大業が輝かしき成功を収め、茲に新政府が樹立された時、官軍に最後の抵抗を試みた東北諸藩の受けた運命はまことに暗いものであつた。本書はかゝる運命を負はされた仙臺藩の一支藩の藩主家老以下數十人が北海道へ移住し、石狩川の原始林を拓き、更生の建設に着手する経緯を描いたものである。あらゆるものを剝脱された彼等の唯一の活路は新天地にその郷土を打ち樹てることより外になかつた。若き

藩主を助けて原野の探検開拓、北海道開拓使との交渉、藩士の移住説得に鋼鐵の如き意志力を以て邁進する思慮稠密な家老の重厚な誠意と磐石の如き人格とを中心として彼を取りまく老若一團の藩士達の更生への熱情が、著者のひた押し筆力を以て淨彫の如く描きあげられてゐる。

本書中の歴巻は石狩川沿岸を埋めた原始林とトウベツの原野の描寫であるが、探検隊の一行は、降りそゞ雨に全身濡れ鼠となり、方角も定かに分らぬ林中を彷徨し、身を没する萱の中を押し分けつゝ前進する。さうしたあらゆる辛苦は新天地に定住の地を求めんとする先驅者達が必ず嘗めざるを得ないものである。今や續々としてわが移民團が、滿洲の沃野を開拓すべく移住しつゝあるが、この石狩川原野開拓の物語はそれと必ず一脈相通ふものを藏してゐるに違ひない。更に北海道開拓使との交渉は同じく最も困難なるものの一つである。即ち開拓使に勤務する役人はいづれも、嘗ては各藩の輕輩であつたものが多い。又時勢の潮に乗つた彼等の自負に矜つた尊大な態度はまことに忌々しいものがある。之に應待するものは、嘗ては一藩の家老であり、重臣である。しかし武士なる階級を根こそぎ拭ひ去つて、庶民として生きることによつて再起せんとする彼等の必死の努力は、着々として建設事業をもちたてゝ行くのであつた。明治維新に於て幾多の武

士が祿を失つて一介の庶民に墮落したであらう。しかし彼等の如く凡ての面目をかなぐり捨て、再起したものはどれほどであつたらうか。

歴史の大いなる車輪の轉回するところ、人生の轉變の諸相が展開される。本書はその一角をしっかりと把握してゐる。著者は新進の作家であり、この野心作をなして惜しくも物語した。表現上の多少の缺點はあるが、この優れたる北海道開拓史の一頁は萬人に讀まざるべきであらう。

(昭和一四、四 滝橋區戸塚町一ノ四四八)
(大觀堂 四六判 三八二頁 二・三〇)

日比野士朗 著

吳淞クリーク

召集令狀、出帆、吳淞クリーク、野戦病院の四篇の作品からなつてゐる小説集であるが、物語は一貫したものであつて、伍長として上海戦線に参加した知識階級出身の一青年の貴重な體驗を記録したものである。「召集令狀」は召集令狀を受けた彼の心境を描き、その家族を描き、更に不幸にも瀕死の床にある愛兒を後にして出發するその朝を描いたのである。「出帆」は正に祖國を離れんとする最後の夜、彼が宿泊せる〇

〇港のある一家を描き、その家族の出征兵に對する眞情を描き、更に出帆を描いたものである。「吳淞クリーク」はその壯烈なる渡河戦を描寫したもので、死生の巷に突入する一團の兵を描いて讀む者をして激しく感動せしめずにはをかかない。「野戦病院」は吳淞クリークの敵前渡河に傷いた主人公の野戦病院に於ける生活を描いたもので惻々として心に沁み入るものをもつてゐる。

この作者の筆致は非常に地味で、淡々としたものであり、又まことに正直に且つ出來得る限りつまびらかにその心境が描いてある。これは火野葦平や上田廣と異なるところである。しかもその淡々たる描寫の底から人の心を貫くものをもつてゐるのは、その體驗の眞實さとそれをそつくり描き出した描寫にあると思ふ。例へば彈丸雨飛の中を掻いぐりながら、なほ自己の姿の可笑しさに笑ふところが描かれてゐるか、これなどは、「土と兵隊」にも同様な場面があるが、それがいさゝか誇張されて感じられるのに對しこちらの方には迫眞力を感じるの淡々たる描寫の強味であらうか。一般に薦めるべき小説である。

(昭和一四、七 麹町區丸ノ内ビル
中央公論社 四六判 二八五頁 一・〇〇)

和田 傳 著

大日向村

著者は農民作家として著名である。本書は滿洲分村移民の代表村として知られてゐる長野縣大日向村における分村運動の實際を描き出した小説である。この作には特に筋らしい筋もないのであるが、窮乏のどん底に陥つてゐる村民の生活、その間に新しい若い村長と産業組合専務理事との二人の熱誠と献身の努力とによつて分村計畫が實現し、いよ／＼第一回の出發を見るまでを質實な筆で描き出したものである。流石に練達の筆致で巧に農民民を素描し、その中に盛り上げる感激の場面を點出して、新生活に向ふ光明を漂はしてゐる。謂ゆる農村文學、土の文學としては近頃での出色のものであらう

(昭和一四、六、五 麹町區有樂町
東京朝日新聞社 四六判 三八二頁 一・八〇)

大鹿 卓 著

金山

本書は生活文學選集第八卷に當るもので、金山に取材した

書下しの長篇小説である。秋田鑛山専門學校を出て十餘年、種々の修練を経て漸く所謂働き盛りに達した主人公杉山新吾が信賴すべき出資者を得て、北海道の北見山脈を越えた奥地に金山を開發せんとして出立する。時は支那事變勃發直後のことである。鑛夫小屋、食糧等の心配まで細かい手配がなされ、愈々彼の命令した北辰金山なるものの試掘が始まる。厳しい空氣を冒しての越冬の中にも電燈がつき、仕事は着々と進行して行く、鑛夫の間に問題が起つたり、練冶場が焼失したり、次々と事件は絶えなないが、杉山の逞しい建設的意欲の中に輝かしい將來が約束されてゐる如くである。

右のやうな梗概の中に本書は勞働を提供する所謂鑛夫の立場、鑛夫達を指導する現場係りの立場、更に一山の責任を擔ふ鑛山長の立場の三つの立場についてそれ／＼の主張と相互の關係を述べ、全體としては「産業方面の職場にあつて、今日を生きて通す人々が、那邊にその生活感情をもち、それ故に如何に愛を情熱とを人生に感じつゝあるか」を明にしようとするのが、企圖されてゐる。生活の積極的、建設的面を取上げた小説として藝術的にも優れたものであり、尙鑛山の實情を知る上にも有益なものとして一般に推薦したい。

(昭和一四、九 日本橋區通三ノ八
春陽堂 四六判 三九八頁 一・七〇)

建設戦記

上田廣氏は山西省の同蒲線の鐵道部隊員として従軍、既に「黄塵」その他の事變に取材した作品を発表し、火野葦平と並び稱されてゐる。「建設戦記」は氏が發表した作品中最も優れたものであつて、わが鐵道部隊が前線部隊へ食糧・彈藥或は郵便物を運ぶために如何に辛苦して鐵道を守り、列車を護るかゝ如實に描寫されてゐる。

鐵道部隊がその任務の遂行に當つて、最も困難を感じるのは敵軍の間斷なき來襲である。しかも敵軍は容易にその姿を示さず、秘かに線路を破壊し、橋梁を爆破して、鐵道部隊の前進を妨害するのである。部隊は直ちに破壊された線路の修理に着手するが、この作業の最中を狙つて、初めて敵軍はその姿を有利なる地勢によつて現はし、作業中の部隊を襲撃する。一方には作業を繼續し、一方にはこの敵軍に當り、これを撃退する部隊の二重の辛苦は我等の想像を絶するものがある。しかも本書に描寫されてゐる將兵はいづれも死と直面して微塵もたぢろがない不敵の魂の持主で、彼等の無難作な、常に諸諺にとんだ行動と、しかもその底に流れてゐる必死の

誠實さが、いづれの頁にも躍動して描かれてゐる。更に本書中の塵卷は洪水に流出せる橋梁の修理に當つて、應急にコンクリートの橋脚を作り、十一本の列車を臨汾驛へ送りこむ鐵道部隊の不眠不休の努力を描いたところで、その献身的な姿は激しく心を打つものがある。

上田廣氏は、所謂小説の旨味に於て「麥と兵隊」の作者に一籌を輸するやうであるが、これを補つて誠實な重厚さがあり、讀者をして感動させずにはをかかないものを持つてゐる。

(昭和一四、四、二〇 芝區新橋七ノ一二)
(改造社 四六判 二四九頁 一・〇〇)

小川 正子 著

小鳥の春

瘧は遺傳であると信じられてゐた。それが誤りで、傳染によつて波及することが知られた。そこで患者を隔離してこれに醫療を加へると同時にその傳染を防ぐのが救瘧の道である。國立の救瘧所が各地に設けられてゐる。その一つに瀬戸内の長島愛生園がある。瀬戸内沿岸の瘧者をこゝに迎へて、その醫員は肉體的に恵まれざるこれ等の人達に献身する。これを聖業と云はずして何をか云はう。そして小川正子女史は

その醫員の一人である。この「小鳥の春」は一度上梓されてすべての人の心をうつた。涙なくしては本書は讀過し得ないと云ふも敢て過言ではない。

本書は女史が七年の献身的な生活の中、中國の山峽に、瀬戸内の島々に瘧者を求めて歩いた記録である。瘧者を隔離することは法規によつて規定されてはゐない。従て瘧者を療養所へ引取るには瘧者の自由意志に俟つより外ないのである。女史の使命は瘧者を訪ね、その病の性質を説き愛生園へ來ることを勧めることである。この際に於て最も困難なことは瘧者と家族との情愛の絆を絶ちきることである。瘧者と別れる家族の哀別離苦である。就中瘧者が一家の柱である時、これは生活問題を伴つて、一層の困難を増して來る。この情愛を斷つべき役目を勤める女史の心中は察するに餘りあるものがある。そして女史は瘧者と共に泣くのである。女史の救瘧の奉仕は終始誠意と涙を以て行はれてゐる。この聖業に對する女史の信念はこの二つを以て貫かれてゐる。自己の天職に對する女史の火のやうな熱情は、あらゆる困難を克服して止まないものである。

そしてこの記録が人の心を打つのは女史の病める同胞に對する愛はもとより乍ら、も一つは女史の自然に對して流露する愛である。本書がいさゝか陰鬱なる救瘧の記録であり乍ら

いづこかに一脈の明るさを伴つてゐるのは、瀬戸内の島山の美しい自然を描く女史の筆致の故である。同じく文中に挿入されてゐる素直な短歌も又いかにも美しい眞情を流露してゐる。

(昭和一三、一、一 豊島區西巢鴨三ノ七〇三)
(長崎書店 四六判 二八二頁 一・二〇〇)

中谷 孝雄 著

滬杭日記

所謂ペン部隊の一員として中支戦線へ従軍した著者が、商城より麻城へと、大別山々脈の頭敵を抜く皇軍の姿を描寫したもので、その靜かな行文を以て、皇軍將兵の肉彈戰を活寫して讀む者をして眼前にその迫しい戦闘を見るが如き感を抱かせる。數多い従軍記の中にあつて屈指のものである。

(昭和一四、五、下谷區上野櫻木町二七 砂子屋書房)
(四六判 二七〇頁 一・五〇)

石森 延男 著

咲きだす少年群

滿洲に於ける日本の少年の生活を中心として書いた小説であつて、その同級生には滿洲の少年、蒙古の少年、ロシアの少年があり、同じ日本の先生の下に、日本語の教科書を使つて勉強にいそしんでゐる。そこに何等の差別感のない、純真な少年の世界が美しく表現されてゐる。

同時にその少年の姉とその婚約者であつて、北支の民衆に働きかけてゐる、朝陽門外の清水安三氏のやうな青年の世界が描かれてゐる。この小説はかうした二つの世界を交錯させてその生活を淡々と描寫したもので、そこには特別な物語の展開はない。作者はこの二つの世界を通して、自分の抱いてゐる教養や趣味や、或は大體政策に対する意見をそつくり盛りこんでゐるやうに思はれる。そしてその凡てが極めて妥當なもので、まづわが國の現代の知識階級の教養の程度を示してゐると云ふことが出来ると思ふ。

この小説は滿洲日々新聞に四十回に亘つて連載されたもので、著者は當時滿洲に在任、現在は文部省圖書監修官である専門の作家ではないが、その表現はなか／＼才氣の鋭いもので、時には書き過ぎる感のある部分もある。一般家庭にすゝめる讀物として健全で優れたものであると思ふ。たゞ上述した如く少年と青年の二つの世界が交錯してゐるので、前者は中等學校下級生なら興味を以て讀むことが出来るのである

が、後者の部分は矢張り一般成人のものであり、その點では坪田讓治の「善太三平もの」横山隆一の「フクチャマン」漫畫と同一の性質のものであらう。

(昭和一四、八、牛込區矢來町七一、四〇)
(新潮社 四六判 三三五頁 一・五〇)

岸田 國士 著

從軍五十日

文藝春秋に發表された「從軍五十日」と東朝に連載された「私の從軍報告」を収録したものである。數多い從軍日記中本書の特色とするところは、著者が士官學校出の文士であり今次事變出陣中の軍主腦部に多くの知己を有して居るといふこと、戰國狀況を述べるよりは戰國地域に於ける外國宣教師の活動、治安維持會其他について深く視察し、相當に深刻に批評的に書いてゐることである。我々は本書によつて東亞建設に臨む國民のよき反省資料を與へられたものと思ふ。

(昭和一四、五、八、四谷區愛住町一九)
(創元社 四六判 二四六頁 一・五〇)

徳 永 直 著

先 遣 隊

滿洲開拓のわが移民達は、その豊沃な原野に營々として鉦を揮ひつゝあるが、かうした集團移民の先遣隊達が現在どんな暮らし方をしてゐるかは國民の一樣に知りたく思ふ所である。著者は改造社から派遣されて佳斯木を中心として各地に建設されてゐるその部落を丹念に見てまわつた。本書はその正確な記録である。なんと云つても未だ初期のことであり、色々不便を忍ばねばならず、又もつとその農業の方法は機械化されなくてはならないであらう。然し總ては集團移民各自の困難にたぢろがない意志によるであらう。我々は先遣隊が大陸の一角に漲ちされるやうな意氣を以て開墾に従事してゐることを本書によつて知ることが出来る喜びの念を禁じ得ないのである。

(昭和一四、三、二〇、芝區新橋七ノ一二)
(改造社 四六判 三二八頁 一・五〇)

東京日日新聞社學藝部編

戦歿 陣中だより

東京日日新聞社では先に遺族から募集した戦歿將士の「陣中だより」を紙上に連載したが、紙幅の關係上割愛を餘儀なくされたものの中より選出して一書としたのが本書である。發表される事を全然豫定せずして陣中感ずる儘に懐しき故國の親に、子に、妻に、さては親戚知人に書送つた「便り」を集めたものであるから、場面の手差、感慨の萬別、筆致の巧稚などあつて、云はば玉石混淆であるが、凡ては戦火に彩られた純粹な人間の、しかも日本人の感情の發露であり、その表現はよし稚拙であつたとしても、秃筆の行間から私共は多大の感銘を受ける事が出来る。

この「陣中だより」は、第一に戦争をしてゐる「今」でなくては現れ得ぬ事、第二どうにもならぬ生々しき力強い事實としての戦争の當事者の手になつたものである事、第三にしかもさうした當事者の内戦争の中に死んで行つた人々の手になつたものである事、そして第四に全く發表を豫想せずして一切の技巧と形容とをとり去つて書いたものである事、これらの理由により、そして遺族の上を思ふ時、尙更本書の讀者層を廣く一般人に求めて推薦したいと思ふ。

(昭和一四、九、麹町區有樂町一ノ一一)
(東京日日新聞社 四六判 四〇九頁 一・八五)

菊池 寛 著

西住戦車長傳

本書は曾て新聞紙上に於ても喧傳された西住大尉の傳で主として戦蹟を中心に書かれてゐる。既に東日、大毎紙上に連載されたものを一冊に纏めたものである。小説風にでなく、拾ひ集め聞き集めた事蹟を適宜に按配しその間に自づと近代的英雄の姿が浮び上る様に書かれてゐる。「私は、いろ／＼な文献や談話筆記を採萃するに就いて、少しの誇張も修飾も加へなかつた」と著者はその用意を書いてゐるが、斯様な故人の傳を物するに當つてそれは最も適當な方法と思はれる。新聞に連載されたものであるから面白く讀める様工夫が施されてあり、「發端」「その人となり」「その生立と家庭」「戦歴」「戦死」といふ様な順序で、戦歴は昭和十二年九月五日、寶山城附近の戦闘から羅店鎮、馬路灣の激戦より昭和十三年五月十七日、徐州會戦での戦死までが精彩ある筆致で描き出されてゐる。時局柄一般人の讀物として好箇のものと思はれる。

(昭和一四、一〇 麹町區有樂町一ノ二・一〇〇)
(東京日日新聞社 四六判 四三四頁 二・〇〇)

火野葦平 著

花と兵隊

本書は「麥と兵隊」「土と兵隊」と併せて三部作をなすもので、嘗て「朝日新聞」に連載されて好評を博したものである。前二者が生々しい戦闘を寫したのに對して、これは杭州に於けるわが警備兵の生活を描いてゐる。こゝに描かれてゐる一團の兵隊は杭州灣に敵前上陸をなし嘉善を抜き、南京まで長驅した人達である。これは「土と兵隊」に迫眞力を以て描寫されてゐるところである。その後、彼等は杭州の警備を命ぜられ、嘗て彼等が幾度か死闘を繰返した戦蹟を逆行して杭州へ入る。時は既に歳末に近く杭州の市街は雪に埋められてゐる。なほ便衣隊が出没するとは云へ、此處に駐屯した彼等一團の兵隊の、激しい戦闘を體驗した後の、今は心の落ち着きを得た生活が、暖かい、しみじみとした筆致で書かれてゐる。兵隊達の身の上話や故郷の家族へ飛ぶ思慕や、兵隊達の友情や、異郷に迎へる新年の喜び等は、讀者に深いしみ／＼とした感動を與へるであらう。

なほかうした一面に、杭州の眼醒しい復興振りや、駐屯軍と市民との間に結ばれる交渉や相互の理解等が、和やかな、

いさゝかユーモアをこめた筆致で書かれてゐる。

「麥と兵隊」「土と兵隊」が戦闘の體驗を率直に描寫したのに比較すると、本書は充分に小説的構成がめづらされてゐる、従て前二者の如き、激しい直截な緊張感には缺けた點があるが、それに代つて作品の隅々までよく眼が届いてをり、いかにもゆつたりとした、落ち着いた筆力を以て兵隊と支那民衆が描かれたところに長所がある。

従軍小説が戦闘の記録のみに終始することなく、前月推薦せる日比野士朗の「吳淞クリーク」の中の「野戦病院」や、本書の如き作品、或は同じ著者による「海南島記」の如き作品を加へたことは、いかにも喜ばしいことである。広く一般の讀者に推薦したい。

(昭和一四、八 芝區新橋七ノ一二〇〇)
(改造社 四六判 二七〇頁 二・〇〇)

大嶽 康子 著

病院、院 船

著者は赤十字の看護婦であり、平時は「文苑研究會」などに關係してゐる所謂文學女性である。事變勃發と共に上海戦線に参加して、今は陸軍第一病院に勤務中である。

「召集令」「征途」「野戦病院」「病院船」「第三次航海」「颯風」と云ふ見出しが附けられて居るが、この六つは、それ／＼獨立の一篇をなすものではなく、全體が日記(昭和十二年七月二十九日から十一月二十日まで)として書かれて居り、その内の或る期間を主なる出来事の内容によりて纏めてかく題名をつけたものである。

本書は所謂文學的作品ではなく、著者が日々直面し體驗した非常の出来事を忠實に記録し、報告したものである。文學的作品としては寧ろ素人臭いものであるが、その素人らしさが本書のよさを形成つて居る。そして事實を素直に述べてゐる行間には自ら文學女性的な柔かな感情が滲み出て居る。

我々はこの本を讀んで戦争と云ふ巨大な無秩序の内に、小さく挾まれて押しつぶされ様としながら、毅然として白衣の天使として國家的大使命を自覺して、弱い女性の肉體を自ら鞭ち一途に唯精神のみに生きる、その嚴肅な美しさに心慄たれる。そしてこうした天使が居てくれると云ふ事が、戦地の勇士や、父や兄を戦地に送つてゐる人々にとつてどれだけ力強さを覺えしめる事であらう。

(昭和一四、一〇 小石川區雜司ヶ谷町一・一七)
(女子文苑社 四六判 一八一頁 一・〇〇)

山本 有三 著

不惜身命 (改訂版)

本書は嘗て某大衆雑誌に連載された小説であるが、作者の如何なる場合でも苟もしない良心的配慮は十分行渡つてゐる。

徳川秀忠の近侍石谷十藏貞清は武士たるものは身命を惜しむべからずを信念とし、その信念に生きてその信念に生きてゐる事を誇としてゐる。その様な生活態度は次第に彼の名聲を高め地位も進み、彼は益々自己の信念を固めるのみである。が、ある時、彼は將軍御手直し役荒木又右衛門から、武士たるものはもとより身命を惜しむべきではないが、然し人間にはたゞに身命を惜しまないのみでは割り切れぬものがある。身命を惜しむ惜しまないより、もつと背後にあるものがある、といふことを教へられる。

折から彼は天草の亂の鎮定の爲、さしぞへ(副將)として參軍するが、敵城は堅固な上に決死の勢が宗教的信念に燃えて立籠つてゐるので急戦して落すべくもなく、最良の方法は兵糧攻めであることが解る。然し世評の批謗と幕府の無理解に耐へかねて、上使(主將)板倉内膳は決死急戦の相談を彼

九四

に持掛ける。彼は今は急戦すべきでないことを主張するが、内膳の苦衷を思ひ、遂に負けて、不惜身命の信念を持つて出陣する。そして内膳は戦死し、彼自らも負傷し、敗戦の責をとつて自ら深く謹慎の身となる。蟄居の静かな生活の中に彼は不惜身命をつきぬけたある新しい心境に達する。

人間が精神的に成長して行く過程が巧妙に嚴肅に、しかも平易に描き出されてあつて、處世の修練に資する處尠くないと思はれる。用語の上にも作者獨特の配慮が施されてあつて振假名もバラルビであり、一般の讀物として好箇なものと思はれる。

(昭和一四、七 四谷區愛住町一九
創元社 四六判 一七六頁 一・七〇)

林 美美子 著

北岸部隊

「妻と兵隊」が上梓されて以來、相次いで事變に取材した報告文學が刊行されてゐるが、そのいづれもが、自己の體驗に基いてゐるが故に、どこか讀者の心をうつものがある。就中、前戦に参加して、敵の十字砲火をかいくり、死と直面した將兵の書いたものは、その稚拙な描寫を超えて、人をし

て激しく感動させずにはをかないものがある。この「北岸部隊」は從軍文士の一人である著者が北岸部隊に従つて漢口に突入した忠實な日録である。

いつもこの作者の作品を流れてゐるものは女性らしい肌の細かい抒情と、女性には珍らしい粉飾のない無難な生活態度であるが、その意味で女性よりも男性の讀者に好まれてゐる作家である。本書でもこの二つのものが戦争と云ふどこか激情的なもの結びついて、稍感傷に流れすぎてゐると云ふ缺點はないでもないが、この優れたルポルタージュを生み出したものである。もとより戦争文學とは云ふもの、修羅場が描寫されてゐる譯では決してない。前戦の直ぐ背後にあつて砲の撃ち合の音をき、或は生々しい敵屍を眼のあたりに眺めてはゐるもの、所詮は後方の記録である。従て本當の意味の戦争文學ではないかも知れない。しかしそこには女性らしい濃やかな情感を透して、戦場に馳驅する將校や兵隊が、そして軍馬がしみ／＼とした筆致で描かれてゐる。黄塵を被つて北岸部隊が一步一步と前進して行く、その路傍の草の花も虫の聲も、それから日の光も一つも洩らさず描いてゐる。嘗てラチオで放送されて、皆を感動させた、梅村少尉の話、死の床に横臥しつゝ、傳令傳令と叫ぶ滿身を祖國のために捧げつくしたあの少尉の物語はこの中の一節である。從軍文士の

一團が九江から引返した中に、著者は最後まで軍について行つた。兵隊はみんな「林さん」と親しみ呼んださうである。漢口へ入つてから宿屋の露臺に立つて下を雨に濡れて入城して来る兵隊に「林さん」と呼ばれて心を浮べつゝ手を振る著者を想像して見ると、著者が砲煙の中を抜けて漢口へ行つたことにしみ／＼感動せずにはをられない。よい報告文學である。

(昭和一四、一 龜町區丸ノ内二丁目九ビル内
中央公論社 四六判 二四九頁 一・〇〇)

阿部 知二 著

街

阿部知二氏は英文學を専攻してゐるが、同時にわが文壇の中堅作家として知られてゐる。主知的な傾向の作風であつて、最近「冬の宿」「北京」の二作が好評であつた。特に「冬の宿」が映畫化されたので、阿部知二の名を知る者が多いものと思はれる。

「街」は最近「都新聞」に連載されて、同じく好評であつて、夏目漱石の「坊ちゃん」と比較されてゐる。主人公が正義派であるところに類似點があるのでこの批評は首肯するこ

九五

とができる。しかし「坊ちゃん」が鋭い諷刺を以て貫かれてゐるのに比較すると、必ずしも「街」はさうではない。その主人公が自分の信ずる道を猪突する所は非常に似てゐるのであるが、彼の周囲として描かれてゐるのは、諷刺畫的に象徴化された世界ではなくて、現實の世相を逞しく追求して表現しようとしたものである。

村を小市民街の藥店にとり、店主を失つた未亡人を助けて、同業者との競争に大童となつて活動すると共に、組合の肅正のために孤軍奮闘する、愛すべき、ドン・キホーテの如き青年を主人公とし、之をめぐつて、有閑的な知識階級や、都會の職業婦人や、古風な淑女を配してゐる。所謂新聞小説と稍々趣を異にして、或る程度まで、寫實的に生活の諸相を取扱つたところに本書の優れた點がある。

(昭和一四、一、一〇 牛込區矢來町七一)
新潮社 四六判 四二八頁 一・八〇)

小泉 菊枝 著

滿洲人の少女

本書は興味深い物語の形式をとつてゐるが、所謂小説ではない。日本の一官吏の妻たる著者が、滿洲新京に於て安東縣

の田舎から来た一少女を雇ひ入れてから、その少女に育まれた排日思想の誤であるを覺らしめ、滿洲國の國是たる民族協和を理解させ、延いては東洋に於ける日本の地位や役割、日本の國體や使命をも正解せしめるといふ血の滲むやうな苦心の體驗實録である。

雇ひ入れた下婢桂玉を「むづかしい子でした。然し實に正直な魂の持主でした。純真でした。私こそ教へられもし、銀へられもした大切な桂玉でした」と著者であるその女主人は書いてゐる。高等小學校を出てゐる十五歳の、この滿洲人の少女は非常に精巧でそれだけにきかん氣で日本人に對する反抗心が強く、それを教化してゆくことが至難で、幾度か諦めてしまはうと思ひ乍ら、日本人としての自覺がいつも温かい心でその少女を包み、遂に心から日本と日本人に信頼する心を持たせるに至るのである。それが卑近な家庭の瑣事を通じて、柔かく、心に打ち込むやうに書かれてゐる。

本書を読んで民族協和のいかに至難なるかがまづ第一に感ぜられる。しかもこれをなさずには民族の生きる道がなく、日本民族に課せられた使命であると自覺して、涙ぐましい努力を傾注する一日本女性の實在することを頼母しく感ずる。對象は滿洲人の一少女にすぎず、事柄は卑近な家族内の出来事にすぎないが、傳統を異にし、しかも敵性さへも持つ他民

族をしてこちらの意思を諒解せしめ親和の氣持さへ起せしめることの、いかに容易ならぬことであるかを必々とこの著者は教へる。この著者自身が體驗した貴重な悩みと献身的な努力こそ、今後の日本人の宣撫工作に於ける有力な示唆を與へるものといふことが出来よう。そこに語られてゐる、滿洲國に於ける、日本人の持つ使命に對する深い認識には、傾聴すべきものが多い。この著者が心がけてゐるやうな温和な氣持と自省する力とは、大陸に進出する誰もが心がけるとしたから、この至難にみえる宣撫工作、民族協和の大事業もうまくゆくのではないかと思はれる。本書はさういふ人々に一讀をすゝめたい良書である。序文に「日本民族滿支大陸發展の教科書」といふ文字が見えるが、讀物としても相當に面白く讀め、滿洲の事情や滿洲人の心持もはつきり判るやうに書かれてゐるから、一般の人々にもすゝめて可なるものであらう。

(昭和一四、三 新京永樂町四ノ一)
月刊滿洲社 四六判 一三四頁 一・五〇)

松田 甚次郎 編

宮澤賢治名作選

本書は岩手縣花巻農學校教諭にして詩人であつた故宮澤賢

治氏の作品から、主として童話及詩の優れたものを、「土に叫ぶ」の著者松田甚次郎氏が選んだものである。内容は十數篇の童話と四篇の戯曲と十數篇の詩と農民藝術論と加ふるに「手紙」二篇を以てし、「宮澤賢治略歴」を附したものである。氏の大量の作品は未發表のまま、篋底深く藏されてゐたのであるが、死後生前の知己によつてはじめて「全集」として出版され、多くの文學者によつて發見驚嘆され、俄かに稱讃を博したものである。科學者的頭腦と詩人としての藝術的感覺とによつて渾然たる作品を生んだのである。農民指導者及青年に奨めたい。

(昭和一四、三、一五 日本橋區通二ノ二)
羽田書店 四六判 五七二頁 三・〇〇)

横光 利一 著

考へる葦

本書は短篇小説三篇の外、感想、紀行、日記、講演等を収録した横光利一氏の著作集である。いづれも雑誌や新聞に發表したものであるが、最後の「我等と日本」はバリボルザ萬國協力の協働委員會で著者が行つた講演の筆記である。總じて著者最近の文學的思想の傾向を知り得るものである。外遊後

の著者は現代の世界的擾亂を目にし、耳にし、一日本人として根柢からその動向を考へる立場に置かれてゐる。置かれたといふよりも身を挺して、その擾亂の只中に飛躍し、日本の知識階級者として煩悶し、新日本の自覚にまで克服しようとしてゐる。卓抜なる思索と感覺の書である。「スフィンクス」「北京と巴里」「支那海」等の中に、著者の思索の獨自性を見ることが出来るし、「七日雜筆」の中に多くの廻轉面をもつ著者の面目を發揮したのを見得るのである。これらは著者が現實の日本と世界の現實との間から展望した報告書である。この意味で、現代日本の生きた思想を思索する知識階級に示唆するところ多いものとして推薦する。

(昭和一四、四、二六 四谷區愛住町一九
創元社 四六判 三一頁 一・五〇)

アンドレ・モロア著
河盛好藏譯

結婚・友情・幸福

フランスの作家アンドレ・モロアが講演した五編の記録を集めたものである。各編それぞれ獨立したものはあるが、思想内容においては互に關聯した意味をもつものであり、最

後にある人間の幸福といふことに係つてくるのである。人間は幸福を求める。これは疑ふべからざる事實であるといはなければならぬ。しかし人間の幸福とは果して何であらうか。この一見明白にして單純な問ひに對して古來幾多の解答が與へられたことであらうし、幾多の實踐が示されたことであらう。しかも依然として人間は幸福を問題とし、いろ／＼な探究を試み、解答を與へようと努力してゐるわけである。

本書において著者は人間生活の秩序と安定とを解答として與へてゐるのである。著者はまづ家庭生活を探究し、更に社交生活における友情の問題に入り、進んで職業人として社會生活並に國家生活を問題としてゐるのである。人間生活は古來自由と權力との兩極に向つて振子のやうに動きつゝ變遷發達して來た。今や世界の風潮は權力に向つて動きつゝあるが、畢竟秩序と安定を求めてゐるのである。人間不幸の諸相は様々であるが、究極は精神の問題とならざるを得ない、といふのが著者の根本思想であらう。流石に作家の具體的に物を視る眼が自由に豊かに働いてゐて、何をいつても一個の知慧の書として推奨するに足るものである。

(昭和一四、一一 神田區一ツ橋二ノ三
岩波書店 新四六判 二〇頁 一・五〇)

市河 三喜 著

昆虫・言葉・國民性

はしがきを見ると、著者は本屋から餘り専門に流れない大衆向きの隨筆を集めるやうに勸誘されたさうであるが、之に對する「學者が『キング』に成り下る事も出來ず、又『富士』の高さにレベルを引下げる譯にも行かず」と云ふ著者の辯は、如何にも英文學者らしいユーモアである。結局本書に收められた約六十篇は、大體著者専門の英語學、英文學に關する趣味的な隨筆、並にこれ亦英文學にはゆかりの深い歐洲各地——と云つても主に英國であるが——の短かい印象記が主であつて、はしがきに著者も云つて居られる通り結局本書は「矢張大衆向きとは行かず、先づ自分の嘗て教へた英文科の人々へ送る捧げ物のやうなものとなつて仕舞つた」と云ふのが一審當つてゐる様である。従つてどちらかと云へば専門學校以上の學生並に知識階級向のもので、例へば旅行の話を書かれても、昆虫の話（著者は蝶のアマチュア研究者として著名である）や、植物の話を書かれても、やはり英文學者としての風格が非常に滲み出て來てゐる。尙附録として「濟州島紀行」と云ふのがあつたが、之は明治三十八年著者が一高の三

年生の時、大英博物館から派遣された動物學者アンダーソン氏に従つて濟州島に採集旅行をされた時の記録で、この採集旅行は當時動物學者の間で可成有名であつたさうである。

(昭和一四、一〇、一 龜町區富士見町二ノ一
研究社 四六判 三七八頁 一・七〇)

火野 葦平 著

戦友に懇ふ

二年の間支那各地に轉戦し、今次事變を主題とした戦争文學物の王座（？）にある著者が謙虚な心地を以て戦友に對し、「戰場にあつてはたとへ一時間先に死なうとも、その一時間の間を兵隊として、人間として、立派に生きる、といふことが必要である。」又歸還しては「ああ、兵隊が歸つて來たために、こんなにも日本が良くなつた、町がよくなつた、村がよくなつたといはれなければいけないのである。」と述べてゐる。「戦友に懇ふ」といふ一文と、占據地域に進出して一攫千金を夢見る一部の居留民の利己的行動を戒しめる「戰場より」と、二年振りで歸還してまのあたり見た銃後の様々な風景についての感想を述べた「歸還兵士の言葉」の三篇を輯録した感激的記録である。

極めて短篇ではあるが出征將兵も、大陸に進出せんとする人々も、銑後の國民の誰もが一讀して各自の反省の資に供すべき好文字と信ずる。そして我々は祖國の興隆のためにお互に感謝しあひ、一致團結して愈々難局の打開に邁進しなくてはならぬと思ふ。あへて一般大衆に推す所以である。

(昭和一四、一二 日本橋區吳服橋二ノ五春秋ビル)
軍事思想普及會 四六判 八四頁・四五

幸田 露伴 著

竹 頭

本書は露伴が最近に發表してきた考證を主とした隨筆集で、各篇いづれも大卒の滋味を湛へたものばかりである。露伴の隨筆はいま更こゝに収々するまでもなく、その豊かな學識と悠々たる人格との渾然とした融合を示すものである。書名の「竹頭」は「竹頭木屑」と成句になるもので無用なるものゝ意味であらうか。

巻頭の「太公望」は嘗て中央公論に發表され、その作品のもつ大きさと深さの故に大方の三嘆を獲たものである。周の文王を助けてその王道を全うさせた太公望の姓名、生地等を考證したもので、太公望を取扱つた古來の文献に現はれてゐ

る各説をとりあげ、これに犀利な批判を加へたもので、渭水のほとりに釣しつゝ文王に招かれたと傳へられる太公望の正體が露伴の筆頭に忽ち暴露されて、一辭あるギョロリと眼を光らせた姿を示して來る。諸説を弄しつゝ、たゞみこんでゆく筆致の旨味はこの困難なる考證に終始する一文を氣輕に讀み通させる。亡友を追憶した數篇があるが、その内で「春廬屋主人」を描いたものを紹介すれば、最高學府を卒へた者が如何なる榮達も容易であつたであらう時代に文學を愛するが故に、その生涯を金錢に縁遠い文學に捧げた。「今に當つて小説神髓の主張が何様の、書生氣質の内容が何様の、といふのは問題では無い。新墾の田島の耕作が南北であるだらうとも東西であつたらうとも、又その最初の收穫が稻であつたらうと將又蕎麥であり馬鈴薯であつたらうともそれは問題でない。たゞその榛蕪草葉の地に人の手が入りはじめ、銀の光が日に輝きそめたといふことが、如何にこの大きな此土の歡びの光景の初めであつたかといふだけでさへ十分である」といふのはしみじみと心にしみる言葉である。「偉人論」は偉人とは世にもて囃される、事功の大を致した所謂偉人は論の外であり、無窮の路をはしつて已まぬものが偉人であると結んで露伴翁の風格を示してゐる。「一貫章義」は論語里仁篇中の「吾道一以貫之」といふ孔子が曾子に與へた言葉を講述した

もので、曾子の爲人の好きがしつとりと描き出されてをり、「夫子之道忠恕而已矣」といふ曾子の言葉をひき、「一貫」の「一」を忠恕の二字に置き換へて、惟忠恕の一理を以て、天下萬事の理を統べ、更に他法無し、故に而已矣と古註の如く解すべきであると説く。然して夫子の道は人の人たる所以に率ふの道である。なにも幽玄高遠のものではない。然し平凡庸常の者はこの道を踏み脱すことが多い。之を子思が指示せる如く「慎獨」の工夫より着手し、隱微の間によく大道を念ひ「敬」を持って忠恕に志す時、髣髴として光風熙和の景象を見、怡悅の心境に入るを得る。忠恕の乏しき世界は小慧横行して民苦しむのみであると喝破してゐる。

(昭和一四、四、二八 神田區一ツ橋二ノ三)
岩波書店 四六判 三一頁 二・〇〇)

澁澤 秀雄 著

父の日記など

この著者は故澁澤榮一氏の息である。榮一氏の死後その日記二十冊が近親の間に一冊づゝ分けられ、秀雄氏のところに明治四十二年の分がくばられた。その年の日記をもとにして

著者は巻頭の「父の日記」といふ隨筆を執筆してゐるのである。この年には大日本製糖會社の疑獄事件が起り、社長酒匂常明氏が責任を感じて自殺し、世の同情を集めた。そのため彼を社長に推薦した榮一氏はかへつて世の非難を蒙ることになつた。それに對して榮一氏が毅然として同氏の死には哀悼を禁じえないが、自殺は決して申し譯にはならぬとして世に答へた事件など、歴史の重要な一齣をはからずも興味深く覗くことができるし、またそれを通じて榮一氏の日常生活の態度をうかがひ知ることができる。これらが單に日記だけとして世に現れたのでは一般の注意を引くことは難しいであらう。それが適宜に拔萃されて、輕妙な筆でその解説がほどこされてゐるため、なか／＼面白い味のある讀物となつてゐる。

「父の日記」はこの隨筆集の中の最も興味のあるものの一つであるが、同時に收められた數多くの隨筆も實業家畑の人には珍らしい才筆で私たちを楽しませてくれる。中でも著者が演劇關係の會社に働いてゐるため、その方面の觀察に特段の鋭いものが出てゐる。隨筆の出來榮へとしては、「尾瀬ヶ原」「子寶隨筆」「寄宿寮愚談」「僕の人物評論」「わが演劇交友録」などの生活の多少滲み出たものにいゝものがあるやうである。

(昭和十四、一、二 京橋區銀座西一ノ三)
實業之日本社 二七六頁 一・五〇

龜井勝一郎 著

東洋の愛

本書に收められた「日本の基督者」は内村鑑三を、「牡丹觀音」は岡本かの子を、「或る隱者の運命」は武者小路實篤を、「逞しき念佛」は倉田百三を、「寒樂春秋」は日本古佛像を、「觀音經覺書」は觀音を、すべてこれ禮讚したものである。著者は人も知る日本浪漫派の若きチャンピオンの一人であり、思想的虚無の中より立ちあがつて、今や東洋の佛禮拜の掌を合せんとしてゐるのである。著者のこの姿には氏の思想的徑路を知るものはある傷ましいものと眞摯なものとを見てとることが出来る。本書の中でも最後の「觀音經覺書」は、本書最大の雄篇であるが、こゝには氏の心的影像がまさしくと現はれてゐるのである。氏の禮拜は「生命のもとつ泉への憧憬」であり、「衆生病める故に我も病む」といふ慈悲忍辱の觀世音を禮拜せんとするのである。氏が東洋の佛を禮拜せんとするのも西洋の神を斥けての東洋の佛ではないことに讀者は注目しなければならぬ。内村鑑三を論じ、武者小

1011

路、倉田の諸氏を論ずるのも、すべてこの觀音禮讚の根柢と相通ふものゝ角度よりしてゐるのである。著者の文藻は多彩であり、流麗である。若くしてこの才華讚嘆すべきものではあるが、多辯の感なきにしもあらず。思想的に求むるところある者は一讀すべきである。

(昭和十四、四、一五 四谷區北伊賀町一三)
竹村書房 四六判 三三三頁 一・六〇

相馬 御風 著

土に祈る

本書は越後糸魚川の郷里に住んで二十年、今や全く土の人となつた御風氏の最近の隨筆集である。氏は「題言」の中で「土に祈る時人は俯して熱き涙を澆ぐ」といつてゐるが、本書の中にはさうした氏の老境の眞情が満ちあふれてゐる。特に本書には事變の農村に及ぼした影響を書き記したものが多く、ことさら氏の切實敬虔な感激の心がこめられてゐる。また所々に自作の詩歌が收められてゐるのも親しみ深い。銚後の農村生活を記録したものは他にも多々あらうが、本書のやうに老歌人の心境に反映した農村の姿は一入泌々とした親しさを持つてゐる。氏の隨筆は青年層に愛讀されると聞く。青

年といはず一般銚後の人々に奨めたい。

(昭和十四、四、二八 京都市河原町二條下ル)
人文書院 四六判 二三〇頁 一・六〇

飯田 蛇笏 著

土の饗宴

甲府山中人煙遠きところに山廬を構へ、悠々自適、俳三昧に耽つて、現代の隱士の佛を宿すが、著者の姿であり、清逸の妙想、時に凝つて一書を爲したのが、さきに刊行された「穢土寂光」である。本書はそれに次ぐ隨筆集である。

前書にては著者の生活環境が巧みに描かれてゐて、山中の寂寞を味ふべきものであつたが、本書に於ても亦心境の愈々透徹せるを覺える。「家山圖」「白雲去來」等の章下に收められた文章は、山村兒童の無邪氣な遊戯に通ふ感興深いものである。本書は之に加ふるに山間の僻村にまで及ぶ時代の波を捕へたところにある。著者は時代に對して白眼視するものではなく、それらの出來事を隨筆風に描出してゐるのである。「啓蟄祭」の「紅い饅頭と白い饅頭」や「榮助の場合」がその逸なるものである。山村の祝儀や祝祭を敘するに、この著者の滋味のある凝つた筆法は迫眞性をもつてゐるやうに思は

れる。また「雲上の富嶽」の章下には、著者の山岳愛ともいふべきものが多く收められ、著者の俳句と相俟つて、富士の秀麗をよく傳へてゐる。因に著者は「雲母」の主宰者として、俳界に既に噴々の名聲ある人である。本書は以上の如く前者「穢土寂光」よりも更に身の加つた感のする優れた隨筆集である。日本の山河の美を味ひ、日本の山村の風趣を知り得るものとして、一般人士に薦めてよい本である。

(昭和十四、七、一 小石川區諏訪町五九)
小山書店 四六判 三〇八頁 二・〇〇

芳賀 檀 著

日本文化の方法

曾て著者が「日本文化の本質」と題して講演せるところのものである。「方法」といふよりも「本質」といふ方が適當してゐる。著書は謂ゆる日本浪漫派なるものゝ若き旗手の一人であつて、まことに才氣煥發、詞藻絢爛といふところであるが、本小冊子に説くところはやはり講演だけに平明で、よく一般人にも解り易い。本書はこの著者が日本文化を如何に見るか、ひいては謂ゆる浪漫派なるものゝ文化觀の一タイプとして理解するに明瞭且つ適切である。周知の如く岡倉天心の

1011

流れを汲むこの派の人々は、今や興亞の重大時機に際會して決意を叫び、捨身奉仕を要求するのである。新しき日本文化東亞文化を思ふ人に一讀を奨める。

(昭和一四、三、二三 麹町區内幸町二ノ一ノ三 大阪ビル)
日本文化中央聯盟 四六判 九四頁 三〇

幸田 成友 著

番傘・風呂敷・書物

書誌と圖書館に關する隨筆集で、その達意の文章と豊富な學識とが醸し出す魅力は本書のもつ大きな價值である。書誌に興味を持つ者、圖書館人にとつては必ず一讀すべきものである。書名の「番傘・風呂敷・書物」はその一篇であり、いづれも符號を打たれるところに共通な點があるといふ譯、「五十年前の書價」は淺倉屋が小中村清短博士へ宛てた古い書出の話で、それには東海道名所記六冊堂圓、好色一代男八冊堂圓などと記載されてゐていかにも隔世の感のある興味の多い一篇である。「青柳の珍書會」は外神田廣小路にあつた貸席で行はれた古本屋連の市會の思ひ出話で、その入札のやり方が椀伏といふのであつて、御椀の蓋の裏に適當と思ふ代價を筆で書いて投げるといふやり方である。ボン／＼と投げて、

數回繰返して蓋裏が眞黒になると濡雑巾で拭きとつたものださうである。「中川得基翁」といふのは稀にみる愛書家であつた翁の面影を傳へたもので、翁の本屋廻りは有名なもので右手に杖、左手に信玄袋を下げ、尻をはしより、白い股引でスタ／＼歩きまはつた由、庖丁、鋏、錐、針、糸、へら、糊板、尺、定木その他種々の道具を入れた桐の机を置き、買つて來た本の繕ひをしたといふのは面白い話である。

圖書館に關するものは現在の帝國圖書館が御茶水の聖堂跡にあつた頃から出かけ、晝は森閑として鶯の鳴聲が聞え、夜は西洋蠟燭の光の下に集る閱覽室に入り浸つた著者のこと故流石に圖書館事業に對する理解の深さが示されてゐる。愚書は閱覽を禁ぜよといふ「愚書退治」、館員の待遇を論じ、圖書館間の連絡を説き、登館者の反省を促した「圖書館に關する三つの注文」その他數篇が收められてゐる。敘述は平易であるが高等學校程度の理解力を必要としよう。

(昭和一四、三、二六 京橋區新富町三ノ七)
書物展覽社 四六判 二九三頁 二・八〇

八波 則吉 著

隨筆 分に應じて

分に應じてはこの書の第一文の標題であるが、時局下の國民に望む教育家としての著者の希望でもある。本書は折にふれてものされた講演、論文、道話、感想、實話、假作談、詩、歌、童謡等を収録されたものである。短篇集であるが、何れも事變下に相應しい佳什たるを失はない。

附録「少年期に於ける情操陶冶」は文部省主備全國少年團指導者講習會で講述されたもの、少年期の讀物について述べられて居り、この方面の參考としてよいものである。

(昭和一四、二、二〇 神田區神保町一ノ六七)
東洋圖書株式合資會社 四六判 三三五頁 二・五〇

吉田 絃二郎 著

わが人生と宗教

大正の初期から今日迄、理想集、隨筆集、小説、戯曲、童話と、思へばどれ程の著述をこの著者は世に送つたことであらうか。然もそれぞれに青春の心を捉へ得て、今なほ青年男女の愛讀を得てゐることは、畢竟永遠の青年といはれる氏の純眞な態度に據るものと思ふ外はない。

本書も既刊の感想集と同様のものであるが、特に人生思惟宗教的感想を選んで一卷としたと自序にある。

著者は今も變らずに武藏野の一角に、のじこや鶯の笹鳴きを友としながら、特に寒巖枯木の冬の空を愛して禪僧の心の世界に住んで居られるとのことである。その様な生活から生れた人世思惟、宗教とは何ぞやの問題に觸れた隨筆であつて見れば、靜か過ぎると云ふ難は遁れないかも知れないが、その清純さに青年ならずとも愛着の念を禁じ得ない。

著者の生活は禪僧的ではあるが、この本に現れた思想は必ずしも佛教のみに偏つて居ない。佛陀の教も説けばキリストの言葉も説く、聖僧哲人の諦悟も語れば、又多分に西洋哲學の香もする。收められた四十數篇悉く人生觀照ならざるはないが、修養書乃至は哲學書の堅さはなく、飽く迄感想隨筆集の形である。

(昭和一四、一、二、一 麹町區三番町一)
第一書房 四六判 三七二頁 一・三〇

昭和十五年三月二十七日印刷
昭和十五年三月三十一日發行

良書百選 第九輯
定價金三十錢

編輯者 日本圖書館協會
印刷者 鐵道弘濟會印刷場

發行所 東京市麹町區西三丁目四番地文部省内
日本圖書館協會
販賣口東京二四一八一番

★建築家隨筆評論集第五★

陸屋根

武藏高工教授
藏田周忠著

内容 白いマツチ箱の様な住宅、住宅と太陽、夏の日蔭、茶の間と廣縁とサンルーム、アトリエのある住宅、北九州の一住宅、白柱居、住宅雑感、拓本と床の間

近代工藝運動の基調、現代工藝ノート、現代的意匠の特性、室内とメカニズム、近代建築に於ける東洋の影響、現代建築に於ける「面」の發展に就て、日本建築の國際性、獨逸に於ける大戦記念建造物、ライプツィヒの戦勝記念塔

夏と大東京、都市の性格と建築、建築と花、路上の花賣
ワイセンホーフのジートルング、北京の裏門

熱河畫行、布達拉の印象、熱河の壁、熱河の土、北京再見、近江小景、八丈島民家記、埼玉での採集、旅中雜感

四六判上製函入寫眞圖版七十五葉挿入著者裝幀 定價二・五〇送料・一四

葦 「いらか」 岸田日出刀著

四六判上製和紙函入 定價二・三〇送料・一四

聖 「かべ」 岸田日出刀著

四六判上製和紙函入 定價二・五〇送料・一四

匠人談義 藤島亥治郎著

四六判上製和紙函入 定價二・三〇送料・一四

無双窓 佐藤武夫著

四六判上製和紙函入 定價二・五〇送料・一四

步兵大佐 竹内正虎著

日本航空發達史

紀元二千六百年の記念すべき歳を聖戦下に迎えて、今や航空機の威力とその文化的使命は彌々重大である、この意義深き時に當つて著者多年の研究は完成、本書の上梓は識者の絶讃を受けることを信じます。

第一編 航空思想史—十七章— 第二編 航空發達史—十三章—
第三編 航空機發達表—三章— 附録鳥人浮田幸吉考—十九項—

藤木九三著 足立源一郎挿畫

登臨行

山の隨筆
繪

内 菊倍判十二部組和紙印刷上下二册函入
容 A版 限定參拾部挿畫・署名入定價參拾圓
見 B版 限定參百部 挿畫印刷 定價拾圓

岸田日出刀・土浦龜城著寫眞集

熱河遺跡の美

Hotelsom 判全アト紙印刷 寫眞圖版百二十五葉入 著者裝幀和紙函入 定價八圓
附・熱河の地理と歴史・熱河遺跡の美と保存

四六判上製綿布貼合裝和紙函入
本文六百頁寫眞挿圖五十葉挿入
定價四圓五拾錢 送料貳拾貳錢

東電振 京話普 日本東京 橋本京 通橋一 二九三 四八〇 八九四 本九八 橋一〇 番

相模書房

和漢書目録法

大阪帝國大學圖書館 田中 敬著

菊池 九
本 文 附 録 共 五 冊
定 價 五 圓 五 角
日本圖書協會會員一人
送 料 市 内 六 錢 內 地 二 錢
一 冊 以 限 朝 鮮 太 滿 洲 六 二 錢

前篇 總論

第一章 目錄の意義
目錄の語義、目錄の意義、目錄と書目、目錄學の定義、目錄學と目錄法

第二章 圖書館に於ける目錄の職能
圖書館の意義、圖書の意義、目錄の分類

第三章 基本目錄
基本目錄選定の要件、能率本位經營法、基本目錄の二義

第四章 目錄の體系と其の素材
目錄と著錄、目錄法の基礎概念、著錄の區分

第五章 書名と著者
古典の題號、著者の名に由來する書名、著者の名を記する慣習、變名の諸相、隱語に寓せる著者名

第六章 法制上の著者
著作權法上の著者、出版法上の著者、著作權法と出版法とに於ける著者の意義の異同、著者の特權、著作權の保護と自由利用、著作權法と目錄法

後篇 各論

第七章 標目
著者名、團體著者名、書名標目

第八章 書名
出版事項の概説、出版地、發行者、發行年紀、版種、書寫、雜

第九章 出版事項
圖書の形態、用紙の知識、冊數・頁數・其他、裝釘、大小

第十章 對照事項
雜則

第十一章 雜則
五十音順とアルファベット順との優劣、排列、標

第十二章 排列
記、振假名、同一圖書の順位

第十三章 雜誌目錄記入法
誌名、團體出版逐次刊行物、序報、註記、雜則

附錄 和漢圖書目錄法索引

良書推薦

文部省及日本圖書館協會推薦書

九州帝國大學 波多野 鼎著 經濟講話 四六上編五〇頁 定價 二・〇〇 送料 一・一〇	九州帝國大學 波多野 鼎著 統制經濟講話 四六上編三八頁 定價 一・六〇 送料 一・一〇	元龜工大 吉野 信次著 日本工業政策 四六上編三五〇頁 定價 二・三〇 送料 一・一〇	元龜工大 尾高 朝雄著 訂法 哲學 四六上編四〇頁 定價 二・〇〇 送料 一・一〇	元龜工大 穂積 重遠著 判例百話 四六上編三八八頁 定價 二・二〇 送料 一・一〇	元龜工大 牧野 英一著 急急如律令錄 四六上編三八六頁 定價 二・〇〇 送料 一・一〇	元龜工大 伍堂 卓雄著 伸びゆく獨逸 四六上編二七二頁 定價 一・五〇 送料 一・一〇	元龜工大 深井 英五著 人物と思想 四六上編四三六頁 定價 二・〇〇 送料 一・一〇	大日本圖書社 佐々井信太郎著 二宮尊德傳 四六上編六五〇頁 定價 二・三〇 送料 一・一〇	
山田 節男著 貧苦の人々を護りて 四六上編二七〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一〇	佐藤 信衛著 近代科學 四六上編三六八頁 定價 二・〇〇 送料 一・一〇	鈴木梅太郎 共著 榮養讀本 四六上編三三〇頁 定價 一・二〇 送料 一・一〇	鈴木梅太郎 共著 陸軍讀本 四六上編四〇〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一〇	阿部 信夫著 海軍讀本 四六上編五〇〇頁 定價 一・八〇 送料 一・一〇	小川 太一郎著 航空讀本 四六上編三九〇頁 定價 一・八〇 送料 一・一〇	青木 保著 兵器讀本 四六上編三七〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一〇	風巻景次郎著 謠曲 四六上編三〇〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一〇	石山 徹郎著 現代短歌 四六上編三〇〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一〇	東京橋三ノ四 振替東京一六番 日本評論社

發行所 日本圖書協會 東京 町田 三ノ四 文部省 內
振替 東京 一八四二番

和漢書目録法

大阪帝國大學圖書館 田中 敬著

菊池印刷
九折
本文・附録共
五冊五〇錢
日本圖書館協會
一冊に限り
送料市内六錢・内地二二錢
朝鮮・臺灣
六四七錢

前篇 總論

第一章 目錄の意義
目錄の意義、目錄の意義、目錄と書目、目錄學の定義、目錄學と目錄法

第二章 圖書館に於ける目錄の職能
圖書館の意義、圖書の意義、目錄の分類

第三章 基本目錄
基本目錄選定の要件、能率本位經營法、基本目錄の二義

第四章 目錄の體系と其の素材
目錄と著錄、目錄法の基礎概念、著錄の區分

第五章 書名と著者
古典の題號、著者の名に由来する書名、著者の名を記する慣習、題名の諸相、隱語に寓せる著者名

第六章 法制上の著者
著作權法上の著者、出版法上の著者、著作權法と出版法とに於ける著者の意義の異同、著者の特權、著作權の保護と自由利用、著作權法と目錄法

後篇 各目論

第七章 標目
著者名、團體著者名、書名標目

第八章 出版事項
出版事項の概説、出版地、發行者、發行年紀、版種、書寫、雜

第九章 照事
圖書の形態、用紙の知識、冊數・頁數・其他、裝釘、大小

第十章 對列
五十音順とアルファベット順との優劣、排列、標記、振假名、同一圖書の順位

第十一章 雜誌目錄記入法
誌名、團體出版逐次刊行物、序報、註記、雜則

第十二章 附錄 和漢圖書目錄法索引

良書推薦

文部省及日本圖書館協會推薦書

九州帝國大學 波多野 鼎著 經濟講話 四六上冊五〇〇頁 定價 二・〇〇 送料 一・一四	九州帝國大學 波多野 鼎著 統制經濟講話 四六上冊三八八頁 定價 一・六〇 送料 一・一四	元西工大臣 吉野 信次著 日本工業政策 四六上冊三五〇頁 定價 二・三〇 送料 一・一四	東大教授・法博 尾高 朝雄著 訂改法 哲學 四六上冊四〇四頁 定價 二・〇〇 送料 一・一四	東大教授・法博 穂積 重遠著 判例百話 四六上冊三八八頁 定價 二・二〇 送料 一・一四	法學博士 牧野 英一著 急急如律令錄 四六上冊三八六頁 定價 二・〇〇 送料 一・一四	元西工大臣 伍堂 卓雄著 伸びゆく獨逸 四六上冊四三六頁 定價 一・五〇 送料 一・一四	元日銀總裁 深井 英五著 人物と思想 四六上冊四三六頁 定價 二・〇〇 送料 一・一四	大日本報社 佐々井信太郎著 二宮尊德傳 四六上冊六五〇頁 定價 二・三〇 送料 一・一四
山田 節男著 貧苦の人々を護りて 四六上冊一七四頁 定價 一・五〇 送料 一・一四	佐藤 信衛著 近代科學 四六上冊三六〇頁 定價 二・〇〇 送料 一・一四	醫學博士 鈴木梅太郎 共著 榮養讀本 四六上冊三三〇頁 定價 一・二〇 送料 一・一〇	陸軍少佐 大久保弘一著 陸軍讀本 四六上冊四〇〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一四	海軍中佐 阿部 信夫著 海軍讀本 四六上冊四二〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一四	航空研究所 小川 太一郎著 航空讀本 四六上冊五〇〇頁 定價 一・八〇 送料 一・一四	東大教授・工博 青木 保著 兵器讀本 四六上冊四九〇頁 定價 一・八〇 送料 一・一四	東京帝國大學教授 風卷景次郎著 謠曲 四六上冊三七〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一四	大阪府立女學校教授 石山 徹郎著 現代短歌 四六上冊三〇〇頁 定價 一・五〇 送料 一・一四
東京京橋三ノ四 振替東京一六番 日本評論社								

發行所 法人社團 日本圖書館協會 東京・町田・關ヶ部・三ノ四 文部省
振替東京一六番 一八四二

文部省教育局内 新學教書

★行刊々續下以・冊一十刊既★編會究研學教亞興★
す行刊を書新本てし期を上向の養教民國皇り當に設建の序秩新亞東

刊新輯一十

科學と道德

醫學博士 永井 潜著
定價四十錢
送料六錢

教學の説

文學博士 西 晋一郎著
定價四十錢

松陰先生の教育

國民精神文化 研究所編註 廣瀬 豊著
定價三十錢

現代の問題としての復古思想

日本圖書協會推薦 松陰の實踐的教育の全貌を顯す。九州帝國大學教授 竹岡 勝也著
定價四十錢

經濟上より見たる支那事變の本質

文部省推薦 支那國民經濟を祖上に、支那事變の因つて來りたる經濟を解き、事變の本質を解析し盡す。廣島文理科大學講師 金子 大策著
定價三十錢

親鸞聖人に映せる聖德太子

像勳わが史上に光被する聖德太子が信仰著世の大哲觀に映りし互影や如何に。一讀感銘深し。大學講師 金子 大策著
定價五十錢

新支那と新生活運動

文部省前參與官 池崎 忠孝著
定價三十錢

科學の日本的把握

一國科學の盛衰は國家消長の運命の鍵と説く。東京帝大教授 橋田 邦彦著
定價四十錢

化學より見たる東洋上代の文化

近重 眞澄著
定價三十錢

日本教育の本義

【新刊】國民學校案に對する根本精神を具現すべく著者が兼意に問はんとする快著。文學博士 近藤 壽治著
定價四十錢

儒教と我が國の徳教

【新刊】新學研究の泰斗たる著者が儒教と徳教とを彼我相論考して現代德育の眞諦を暗示す。文學博士 諸橋 徹次著
定價三十錢

終

店書黒目

三臺河駿區田神市京東 (各料送册)
九〇八二京東座口替振 (各錢六)